

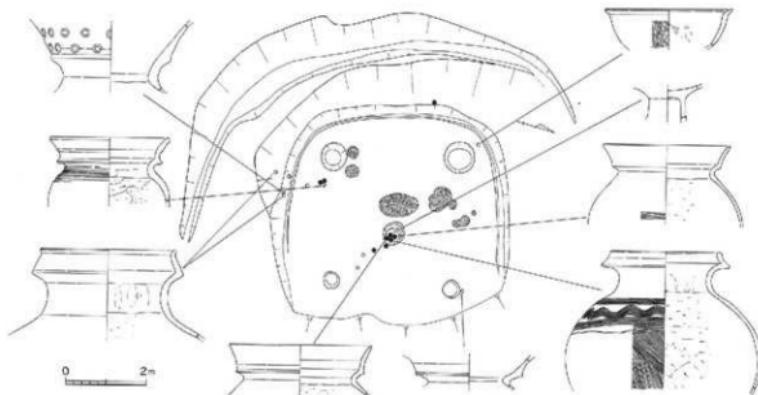
でしばしば見られるいわゆる小炭を焼く土坑の可能性を考えている。

S I 06出土遺物(第277図、第278図) 1、2、4、5は中央ピット内よりまとまって出土した土器である。1、2は薄手の複合口縁甕である。1は復元口径15.7cm、口縁がわずかに外反して立ち上がり、端部は風化で不明瞭だが丸くおさめるようだ。胴部には一部ヨコハケが見られる。淡黄褐色を呈す。2は復元口径17.6cm、複合口縁部の稜がやや横方向に突き出す甕である。口縁は中途で外方に折れ、端部は薄く丸くおさめる。ヘラケズリは右に砂が動き、白っぽい淡褐色を呈す。

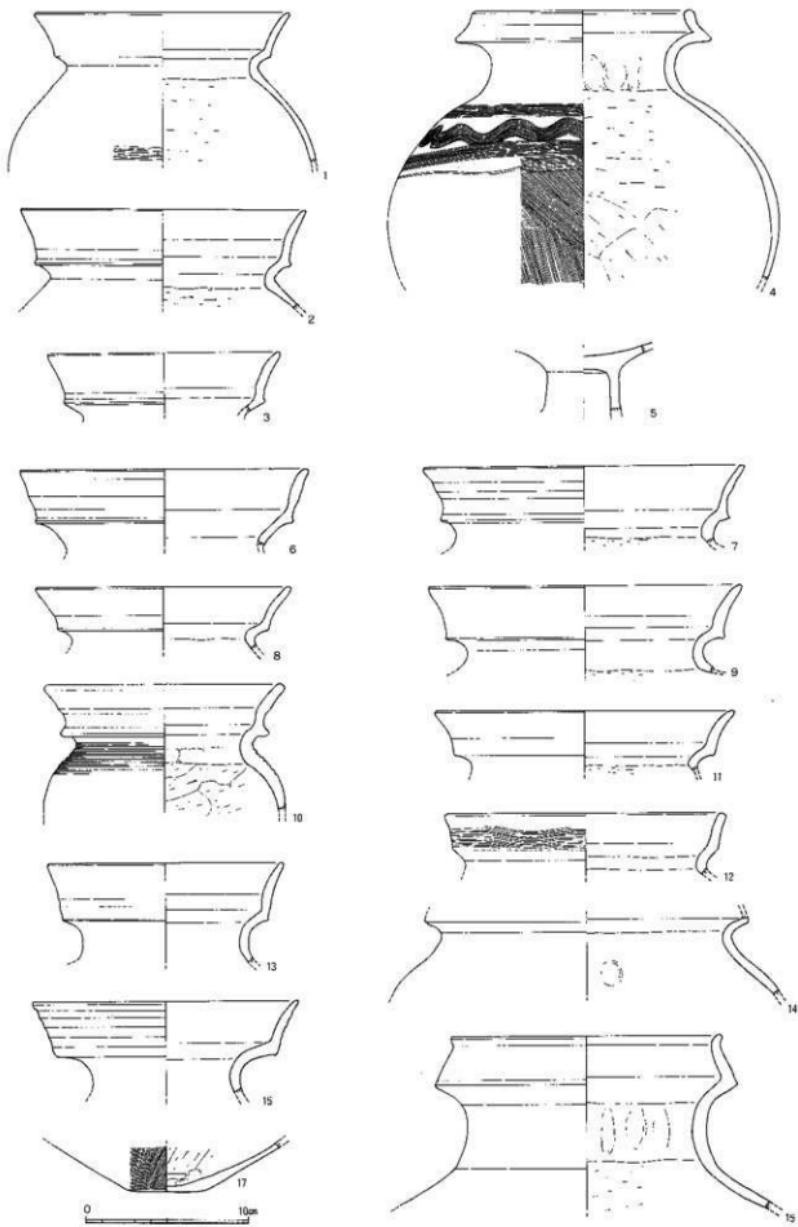
4はよく張った胴部と内傾する口縁を持つ甕である。頸部は丸く内湾して、横方向によく突出する複合口縁部の稜に至る。口縁は約45°の角度で内傾し、中途でやや折れ曲がって立ち上がり端部に至る。口縁端部は丸くおさめており、内面には観角的に稜が設けられる。胴部の外面、最大径より上には、非常に細かな櫛状の工具による平行沈線と波状文が施されている。平行沈線の下部には



S I 06遺物出土状況

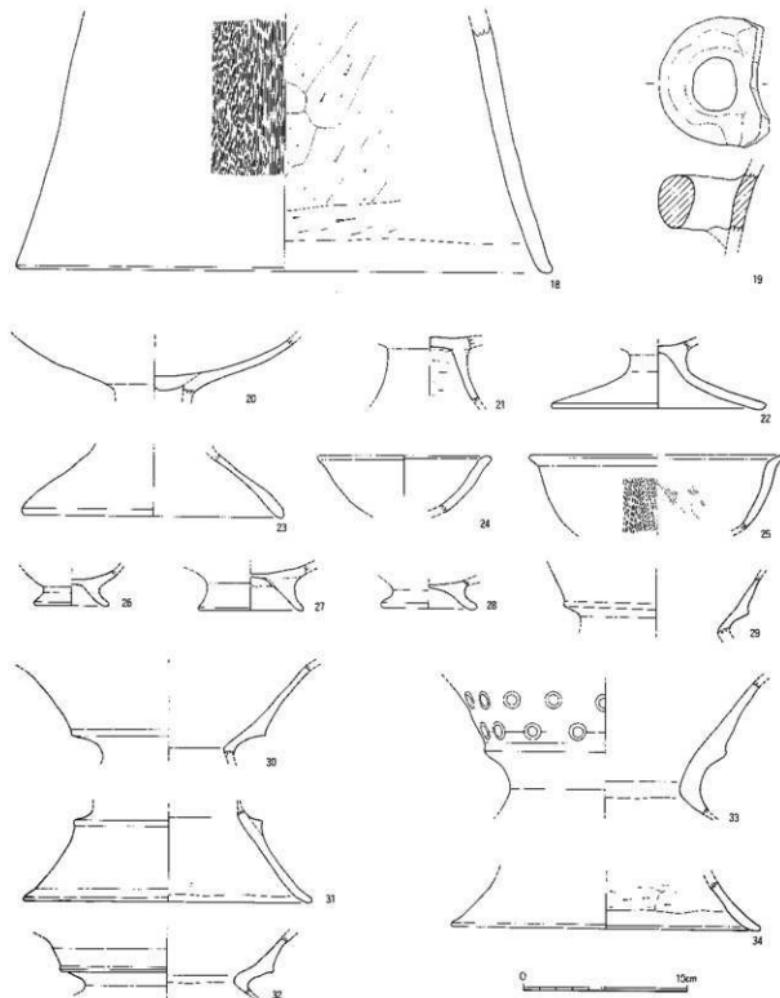


第276図 柳遺跡 S I 06遺物出土状況 S = 1/120 (遺物は1/6) ●…床面 ○…覆土



第277図 柳遺跡 S I 05出土遺物実測図(1) S = 1 / 3 (1~5…床面、6~16…覆土)

ヨコハケが、胴部下半には縦～斜め方向のハケメが見られる。胴部内面のヘラケズリは砂が左方向に動いている。口径13.3cm、頸部最小径11.3cmを測る。5は坯部と脚部の接続部の径4.4cmの高环である。全体的に風化しており、詳細は不明だが、脚部の内面から坯部の底にかけてはなでて調整しているようで、通例見られる円盤光模の痕跡や中心の小孔は見られない。



第278図 柳遺跡 S 105出土遺物実測図(2) S = 1 / 3 (17~34…覆土)

3は床面出土、復元口径14.4cmで、1、2に比べてやや厚手の甕である。複合口縁部の稜はわざかに横方向に強調し、その直上には微妙に凹線を意識したくぼみが見られる。口縁は稜の上で外方に折れて立ち上がり、端部は丸くおさめる。淡褐色を呈す。

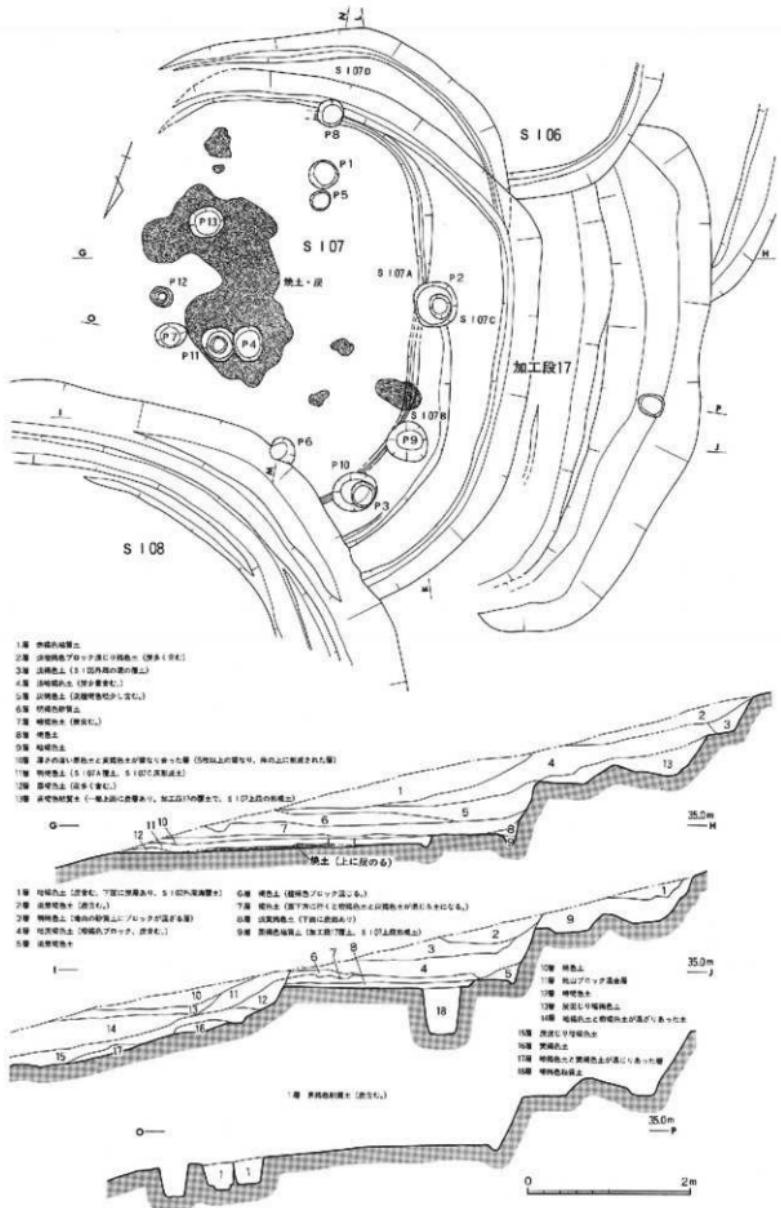
6～34は覆土内出土の土器である。6～12は複合口縁の甕である。6は複合口縁部の稜が横方向に強調され、口縁はははまっすぐ外方に立ち上がる。端部は細くなりながらも上端には微妙に面が見られる。復元口径17.8cm、頸部がやや長く伸びる気配で、壺となるかも知れない。7は復元口径19.8cmの甕である。複合口縁部の稜は横方向に突き出し、口縁は中途で外方に折れ曲がる。口縁外面はヨコナデによって凹凸が見られ、上端には面が見られる。8は復元口径15.8cm、口縁が折れ曲がり気味に外反して立ち上がる。表面は風化しており、壺面の詳細は不明だが、複合口縁部の稜はわずかに外方に伸び、口縁端部は丸くおさめているようだ。9は復元口径19.4cmのやや厚めの甕である。複合口縁部の稜は下方に若干伸び、口縁は外反して立ち上がる。口縁端部に向けては細くなつて先端を丸くおさめる。10は復元口径14.8cm、厚めで小形の甕である。複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁は大きく外反して立ち上がる。頸部以下には8条単位の大きい梅状工具（貝か？）による平行沈線が施されている。11は口縁が外反して立ち上がる複合口縁甕である。復元口径18.5cmを測り、口縁端は先細りになりながら丸くおさめる。12は複合口縁の外面に擬凹線を施す甕である。口縁部の立ち上がりの高さが2.3cmと低く、頸部のくびれの度合いも小さい。他の個体と比べて古い特徴を持つ。

13、15はやや外方にまっすぐ立ち上がる口縁を持つ壺である。13は復元口径14.6cm、複合口縁の稜はわずかに横に伸び、口縁端部は丸くおさめる。15は復元口径16.4cm、口縁の外面はヨコナデで凹凸がつけられ、端部は細りながら丸くおさめる。16は口縁が内傾する壺である。復元口径16.8cm、同様の壺4に比べて複合口縁の稜が横方向に発達せず、立ち上がり角も約60°と内傾度が弱い。口縁端は外方に強く折り返しており、端部は丸くおさめる。17は甕または壺の底部である。径4.6cmの平底で、外面にはハケメ、内面には若干の指頭圧痕が見られる。

18、19はコシキ形土器であろう。18は残存部が少なく不正確だが、復元底径33.0cm、外面には細かいタテハケ、内面にはヘラケズリを施している。19は把手で、器面のカーブから上方に付く横方向の把手と推測される。

20は壺部の底に円盤を充填する高壺である。円盤の底中心には小孔が見られる。脚部との接合部の径は4.7cm前後となる。21も高壺だが、脚部が早めに開いていくことから、通例の高壺に比べて短脚となるものかも知れない。脚部内面は横方向へのヘラケズリが見られる。22は台付き鉢もしくは台付き壺の脚部であろうか。接合部付近の最小径が3.4cmで、裾が急に広がり、底径は12.2cmを測る。脚端部は丸くおさめている。23は高壺もしくは器台の脚部であろうか。脚端部に向けて器壁が膨らんでいき、端部は丸くおさめている。復元底径16.2cm、白っぽい淡褐色を呈す。24は復元口径10.8cmの小形の低脚壺であろう。壺部はポール状を呈し、端部は外方に引き伸ばし気味である。25は鉢もしくは台付き鉢である。復元口径15.7cm、ポール状の壺部で、端部付近で外方に折り返している。外面はハケメ、内面はハケメ後ナテを施している。26～28は低脚壺の脚部である。いずれも接合部からわずかに外方に開いて端部を丸くおさめる。

29～34は器台である。33は全体に厚めで大振りな個体で、受け部外面に径1cm前後の竹管文を2段に亘り違ひの位置に押捺している。筒部径が11.6cm、受け部の開きがやや弱く、壺の可能性も否



第279図 柳遺跡 S 07・加工段17実測図 S = 1 / 60

定できない。そのほかの器台は、基本的に口径の割に筒部の高さが低い、同様の特徴を持つ鼓形器台である。底径は31が17.7cm、34が19.0cm、筒部径が30が8.0cm、32が10.0cmを測る。

S I 06の時期であるが、床面および中央ピット出土の土器から塩津4期と考えておく。ただ、壺が薄くなり外反度が弱まっている点、壺や高环など新しい器種が加わっている点などから、より5期に近い新しい部類といえよう。覆土内出土の土器をみても、明らかに古い12を除けば、4期の特徴を残すもの（9～11など）と5期の特徴を持つもの（7、16、20など）が混在してまとまっており、塩津4期から5期の中間的な時期を暗示しているといえよう。

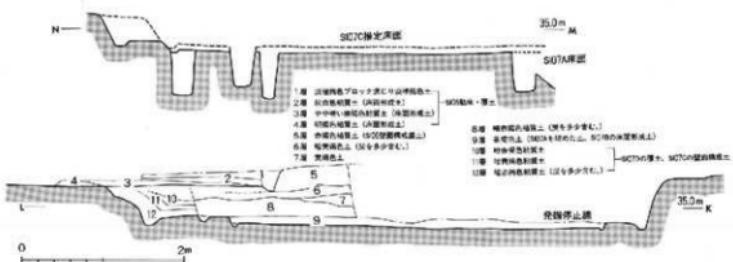
加工段17（第279図）

東斜面北半の谷状になった地形の奥部、加工段13と加工段15のすぐ下方で検出された。南側をS I 06、東下方をS I 07と切り合っている。切り合いによる前後関係は、S I 06は豊穴部分が加工段17を切り、外周溝が加工段17の覆土上に続いていることから、S I 06が新しい。S I 07は加工段17の覆土を切って豊穴が形成されていることから、S I 07が新しい。よって切り合いが認められる豊穴住居跡群の中で最も古い造構となる。

さて加工段17は、S I 07の西上方にあり、一見したところS I 07の外周平坦面と外周溝のようにも見える。しかし両者を横断する残りの良い土層断面を見ると（第279図I-J断面）、加工段17の覆土（9層）を切ってS I 07の豊穴が形成されており、さらによくみるとS I 07の外周施設と思われる造構が同じ断面で加工段17の覆土を切って形成されているのがわかる。平面的に見ても、加工段17はS I 07を弧状にとりまくのではなく、明らかに中途で折れ曲がって造構として完結しているのである。以上のことから加工段17が、S I 07とは全く別個の造構で、S I 07よりも古い造構であることは明かである。

加工段17は南側をS I 06によって切られているため、全体の長さは不明だが、検出時で約5mを測る。背後に底面の幅25cm～50cm、深さが20cm～30cmの溝があがぐ。床面は45cm～70cmの幅で残存し、壁際床面には底面の幅35cmの浅い溝が北側に部分的ではあるが検出されている。整体溝にしては幅が広すぎることから豊穴住居ではなかったことが推測される。

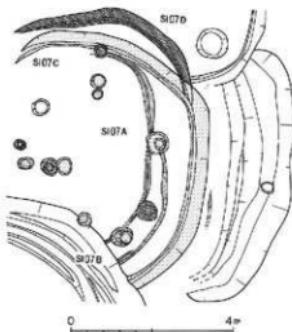
柱穴等は全く検出されていない。造構からは図示できる遺物は出土しておらず、S I 07の時期より古いという以上は時期の限定は出来ない。



第280図 柳遺跡 S I 07断面実測図 S = 1 / 60

S I 07 (第266図、第279図)

位置と切り合い関係 東斜面北半の谷状になった地形の奥部、加工段17のすぐ下方で検出された竪穴住居跡である。南側を S I 06、北側を S I 08、西側を加工段17と切り合っている。S I 06は前述したように S I 07の覆土の上に床面が形成されていることから、S I 07が古い。加工段17とは、S

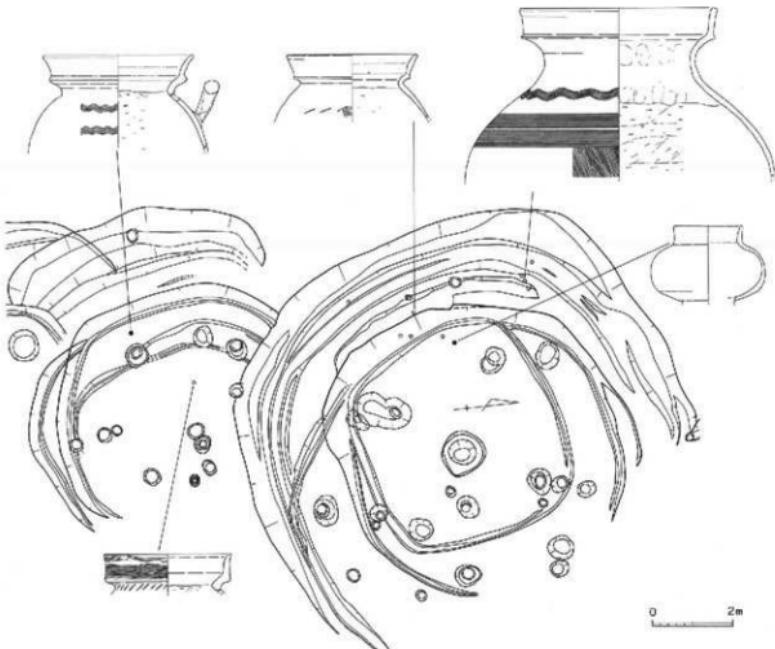


I 07が覆土を切って形成されていることから加工段17が古い。S I 08とは、S I 07の床面がS I 08の上に伸びないことからS I 07が古いと考えられる。

建て替えの順序 壁面の切り合いや壁体溝の重なりから、少なくとも3度の建て替え（4棟の切り合い）が想定される。ここで半分の壁が残存している竪穴をS I 07C、南側に張り出した壁で構成される竪穴をS I 07D、最も内側の壁体溝で構成される竪穴をS I 07A、S I 07AとS I 07Cの間に検出された壁体溝で構成される竪穴をS I 08Bと呼ぶこととする（第281図）。

これらの竪穴の前後関係は、堆積した覆土と床面、壁

第281図 S I 07建て替え概念図 S = 1/120 の関係からつかむことができる。まずS I 07Bは、S I



第282図 柳道跡 S I 07・S I 08遺物出土状況 S = 1/120 (遺物は1/6) ○…覆土 ●…床面

S I 07Aの覆土の上に床面が伸びている(第280図L-K断面)ことから、S I 07Aが古いことがわかる。S I 07CはS I 07A、S I 07Cの覆土上に床面がのっていることから、3棟の中で最も新しい。一方S I 07Dの覆土を切ってS I 07Aの壁面が形成されて(L-K断面)いることから、S I 07DがS I 07Aよりも古く、すなわち最も古い竪穴となる。整理すると次のようになる。

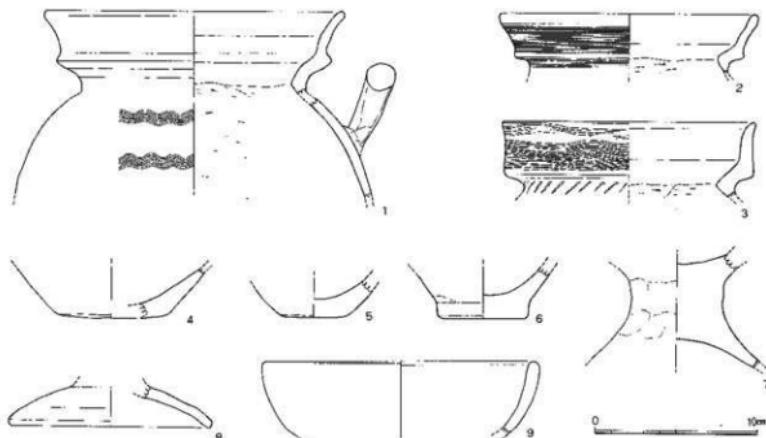
S I 07D → S I 07A → S I 07B → S I 07C

最初にS I 07Dが作られ、やや北に位置をずらしてS I 07Aが作られる。その後背後の斜面上方に壁を拡張すると同時に、床面をわずかずつ嵩上げしていくことになる。

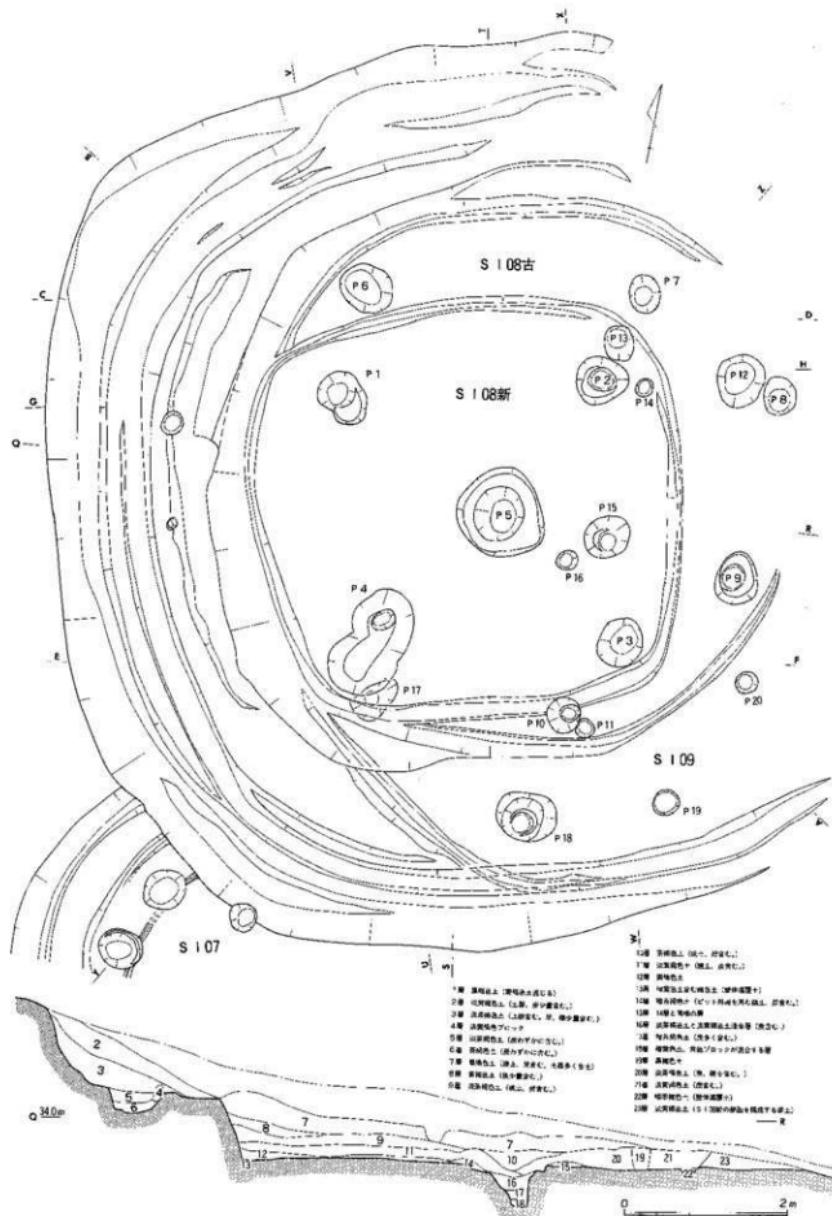
S I 07A 最も内側で規模の小さな竪穴である。壁をS I 07Bに切られているため、ほとんど壁体溝のみの検出で、平面形とピットの位置関係の対応から、P 5とP 6が主柱穴となる可能性が高い。となれば4本柱隅円方形の平面形を呈す可能性が高くなる。柱穴間は3.2m、深さはP 5が55cm、P 6が50cmである。いわゆる中央ピットは、位置関係からP 7もしくはP 12が対応するものと考えられる。この想定される中央ピットの西側を中心に、広い範囲で焼土が見られ、その上には炭が乗っている。

S I 07B S I 07Aの25cm~45cm外側で検出された壁体溝で構成される竪穴である。S I 07Aとの間隔が南側にいくに従って狭くなっている、相似形に拡張したわけではないことがうかがえる。P 2の南側に壁体溝が続かないのは、S I 07Aと重なるためであろう。柱穴は位置関係からP 10とP 1が対応する可能性が高いが、P 1はS I 07Cと共通である。いわゆる中央ピットはP 11が対応するものと推測される。

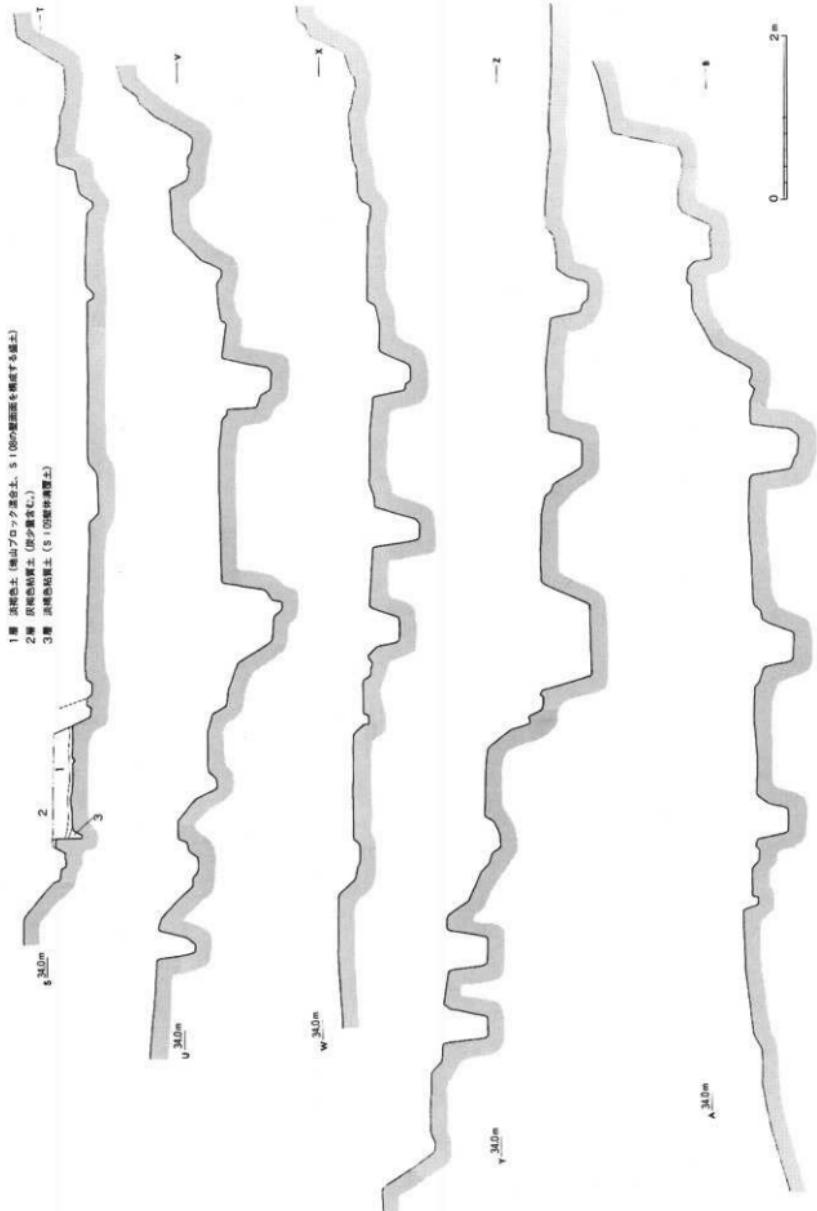
S I 07C S I 07Bの外側に検出された竪穴で、周壁のほぼ半分が残存している。平面形は隅円の多角形を呈すると考えられるが、コーナーの数は明かではない。壁の高さは、残存状況の良い西側斜面上方で80cmを測る。柱穴は、その位置関係からP 1~P 3が対応するものと考えられる。いわゆる中央ピットはP 4があたるであろう。床面上には、厚さの薄い炭混じりの黒色土と黄褐色土



第283図 構造跡S I 07出土遺物実測図 S = 1/3 (1…床面、2~9…覆土)



第284図 柳遺跡 S 108・109実測図 S = 1 / 60



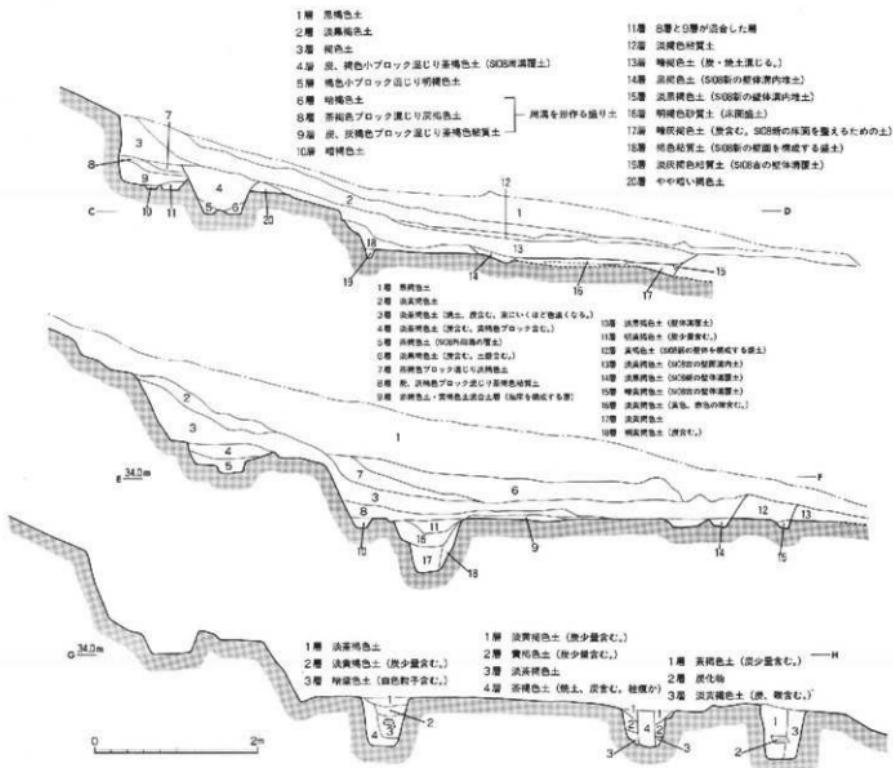
第285図 柳達跡 S 108・09断面実測図 $S = 1/60$

が重なり合う層（G-H断面10層）があり、何度か床を整形したものかも知れない。

S I 07D S I 07Cの南側に検出された竪穴で、大部分を新しい竪穴に切られているため全容は不明である。ただ柱穴はその位置関係から、P 8とP 9が対応する可能性が高い。柱穴の深さはP 8が65cm、P 9が70cm程になる。いわゆる中央ピットは、P 7かP 12が対応するのであろう。

S I 07出土遺物（第283図） 床面から出土したのは1のみである。これはS I 07Cの床面から出土した（第282図）もので、胴部に把手が付く甕である。類例から考えて、出土はしていないが口部も付いていたと考えるのが妥当だろう。頸部から複合口縁部の稜あたりまでは厚さ8~9mmと厚手で、稜は横方向に強調する。口縁はやや薄めになって外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。胴部外面には、櫛状の原体で振幅の小さい波状文が2段、施されている。口径は19.6cmを測り、淡褐色を呈す。

2~9は覆土内より出土した土器である。2、3は複合口縁の外面に擬回線が見られる甕である。2は口縁外面がやや外湾し、口縁端部は丸くおさめる。復元口径16.0cm、頸部外面にも平行沈線が見られる。3は口縁がほぼ直立し、端部はわずかに外方に折っている。復元口径15.6cm、口縁外面



第285図 柳遺跡 S I 08断面図 S = 1/60

の擬円錐は直線ではなくうねっている。頸部は厚めで、外面には貝の腹縫らしき原体で刺突を施す。4～6は甕または壺の底部である。いずれも厚くて平底である。7は高环であろう。鼓形器台様の筒部内部に粘土を埋めた形態で、脚注部の厚さは4.7cmにおよぶ。8は高杯であろう。脚部の裾部にあたり、復元底径12.6cm、端部は丸くおさめる。9は鉢であろうか。ポール状の体部で、復元口徑17.2cmを測る。

S I 07の時期は、床面出土の土器から埴津3～4期と考えられる。覆土内に古い特徴を持つ土器が多いことから、あるいは古相とみた方がよいかも知れない。

S I 08 (第284図～第289図)

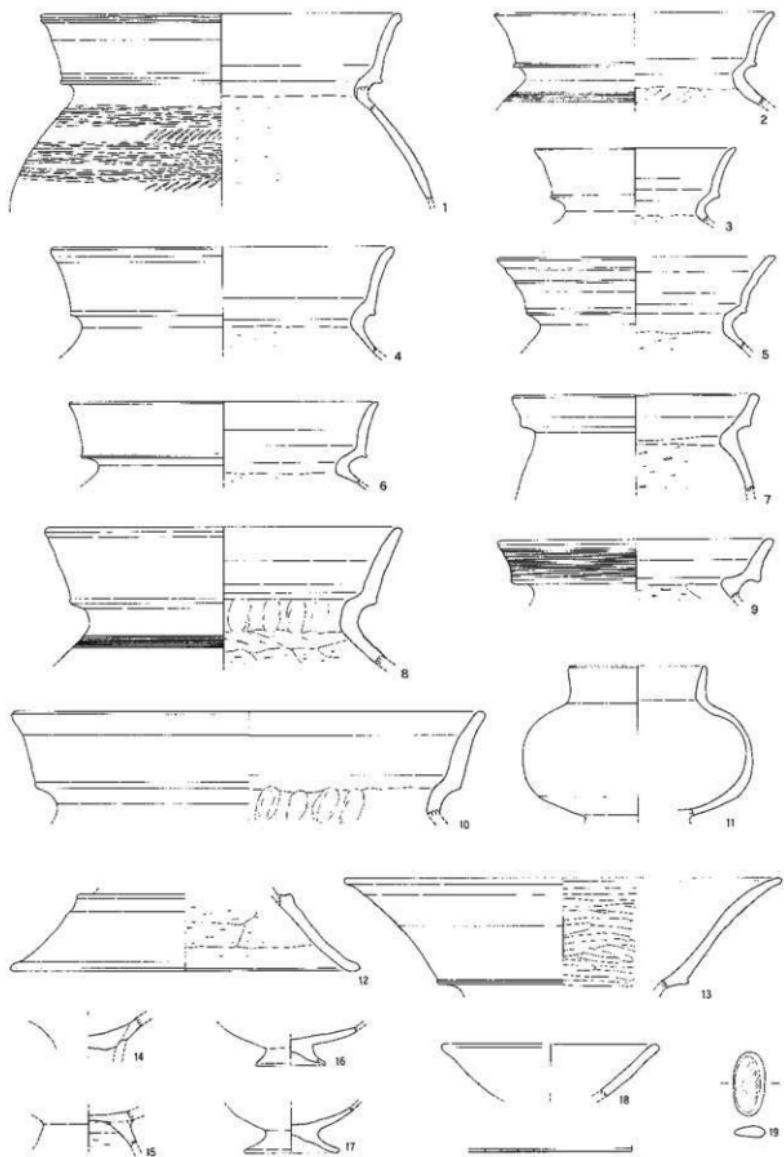
位置と切り合い関係 東斜面北半の谷状になった地形の奥部、竪穴住居跡が集中する区域の最も低い位置で検出された竪穴住居跡である。加工段14、加工段15の下方にあたり、北は加工段18、加工段19を切り、南はS I 07を切っている。またS I 09とかなりの部分重なっており、S I 08がS I 09の覆土を切って壁を構成していることからS I 08が新しい。

全体の構造 S I 08は、S I 05と同様、背後の斜面上方側の遺構がよく残存しており、総体としては斜面に作られた竪穴住居の構造がよくわかる資料である。竪穴住居本体の外側には平坦面が一段めぐり、その面は側面に廻り込んでくるにつれて広くなっていく。その外側には一段高い外堤状の高まりがめぐり、さらにその外周に溝が廻っている。S I 08ではS I 05とちがって、この外周溝の外側にもまた狭い平坦面が見られ、一部その上段にも平坦面がある部分がある。仮に周間にめぐる平坦面が住居の内部にあたり、外周溝が屋根から直接雨水を受ける構造とすれば、この竪穴住居はかなり大形の上屋を持つことになる。

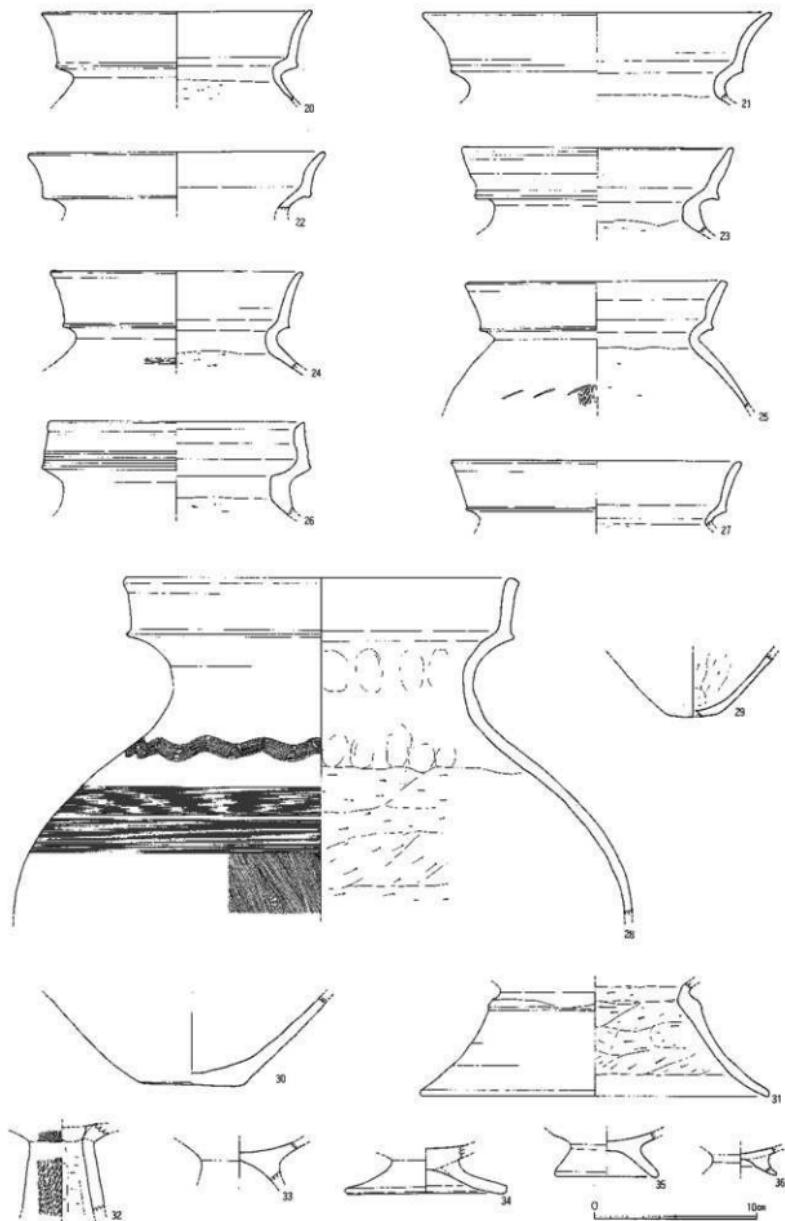
竪穴本体 竪穴は、平面隅円方形のものと平面隅丸多角形のものが重なって検出された。この二つの竪穴は斜面上方側（西側）の壁が同一であり、西壁を基準にして建て替えられたものと考えられる。土層の観察から、内側の隅円方形の竪穴の壁が外側の竪穴の床面から上に立ち上がっていることから、隅円方形の竪穴が後に作られたことになる。以後、外側の隅丸多角形の竪穴をS I 08古、内側の隅円方形の竪穴をS I 08新と呼ぶ。

S I 08新は、壁体溝の内側で測って南北4.9m、東西5.1mのややいびつな隅丸方形を呈す。壁の高さは保存状態の良い西斜面側で75cmを測る。主柱穴はP 1～P 4の4本と考えられ、いずれも壁から近い位置に設けられている。柱穴の直径は50～75cm、深さは45～65cmを測る。いわゆる中央ピットは床面の中心からわずかに東側にずれた位置で検出された。床面から5cmほど掘りくぼめたところに、幅10cm～20cmの狭い平坦面を作り、そこから径約60cm、深さ40cmのピットが掘られている。ピット内には炭を多く含む土が堆積している。この中央ピットの外周には、暗茶褐色土を盛り上げて外堤状の高まりを形成している。

S I 08古は、壁体溝の内側で測って南北方向の長さ6.5mの隅丸多角形の竪穴である。壁のコーナーと柱穴の配置を明確にしがたく、また東側の壁や壁体溝が一部検出できていないため、五角形なのか六角形なのかは判断がむずかしい。主柱穴は二穴重なったP 4とP 6～P 10あたりが対応するのであろうが、P 8はやや外側に出ており対応しないかも知れない。そうであれば隅円五角形となる可能性が高くなる。いわゆる中央ピットは、P 5以外に対応するピットはないため、S I 08新と位置が変わっていない可能性が高い。



第287図 柳遺跡 S 108出土遺物実測図 S = 1 / 3 (11、12…床面、その他…覆土)



第288図 柳遺跡 S I 08上段・周溝出土遺物実測図 S = 1 / 3

外周の遺構 竪穴の床面から75cm高いレベル（西側部分）で平坦面が外周（少なくとも三方）をめぐっている。平坦面の幅は最も狭い西側で55cm程度と考えられ、幅を広げながら竪穴の両側に伸びている。斜面上方側では、平坦面の外側に外堤状の一段高い部分が認められるが、他の部分は流出のためか不明瞭である。

外周平坦面、外堤の外側には外周溝がめぐる。底面の幅15cm～25cmの溝が2条重なっており、竪穴の縮小に伴って溝も掘り替えられたのかも知れないが、土層の堆積状況では確認できていない。溝は全体的に横断面箱形で幅が揃っており、S I 05に比べて整然と整った感がある。外周溝の外側にさらに平坦面が認められる。幅は10cm～25cmとせまい。

S I 08出土遺物（第287図、第288図） 多くの遺物が出土しているが、覆土内が多く、床面から出土したのは11、12だけである。11は小形の直口壺で、底部に低脚が付くものと考えられる。この種の壺は、外面に細かな文様が付けられていることが多いが、これは全体的に風化が著しく、不明である。復元口径8.5cm、胴部最大径14.2cmを測る。12は鼓形器台の脚台部である。復元底径21.6cm、脚台部の高さ4.7cmと、径の割りに高さが低い個体である。

1～10は覆土内出土の甕である。1は復元口径22.2cmの甕である。複合口縁部の稜は薄く横に突き出し、口縁は外方にはほまっすぐ立ち上がる。口縁端付近からわずかに外方に折れ、端部の外面には面を設けて一条の浅い回線を入れている。胴部外面には、ヘラミガキに近いような浅い平行凹線を二段に施し、その間に貝殻版縁らしき原体で斜めの刺突を施している。内面はヘラケズリで砂は右に動いている。白っぽい淡褐色を呈す。2は復元口径17.2cmの甕である。複合口縁部の稜は薄く横方向に引き出し、口縁はわずかに外反して立ち上がる。口縁端は丸くおさめている。頸部の下には櫛状工具を原体とする細い平行沈線が見られる。内面は砂が右方向に動くヘラケズリである。3は復元口径12.4cmの小形の甕である。口縁は外反して立ち上がり、表面の風化で端部は不明瞭ではあるが、複合口縁部の稜はわずかに横に伸び、口縁端は丸くおさめる。

4は復元口径21.2cmを測る甕である。複合口縁部の稜はわずかに斜め下に伸び、口縁はほまっすぐ立ち上がって端部がわずかに外方に折れる。胴部内面へラケズリで砂は右に動く。白っぽい淡褐色を呈す。5は口径17.1cm、口縁が外方によく開いた甕である。口縁はヨコナデによって内外面とも凹凸が付けられ、端部は丸くおさめる。口縁の厚さが3.5～5mmと薄手である。6は復元口径19.0cmの甕である。複合口縁部の稜は斜め下方向に引き出し、口縁はほまっすぐ立ち上がる。口縁端は先細りになって、先端は丸くおさめる。淡黄褐色を呈す。

7は胴部があまり張らず、複合口縁の立ち上がりが短い甕である。口縁端部はやや膨らんで先端を丸くおさめる。胴部内面は砂が右に動くヘラケズリ、復元口径15.2cmで白っぽい淡褐色を呈す。8は復元口径22.0cm、口縁部の厚さが5.5mm～9.5mmと厚手の甕である。複合口縁部の稜はわずかに横を強調し、口縁は外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部はわずかに外側に膨らんで先端は丸くおさめる。頸部の下には細い櫛状の工具による平行沈線が見られる。橙褐色を呈す。9は複合口縁部の外側に擬凹線を施す甕である。口縁は上下に拡張し、外面は若干外湾する。口縁端は丸くおさめ、復元口径は17.0cmを測る。橙褐色を呈す。18は残存率が小さく径は不正確だが、復元口径29.2cmを測る火形の甕である。口縁はまっすぐ立ち上がり、端部近くでわずかに外方に折れ、先端は丸くおさめる。淡黄褐色を呈す。

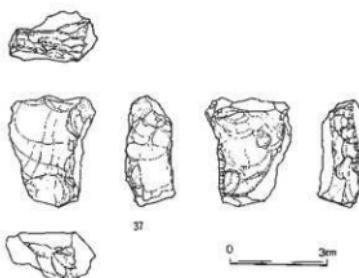
13は鼓形器台の受け部である。復元口径27.0cm、受け部の高さ6.5cmで、径の割りに高さが低い。

内面はヘラケズリの後ヘラミガキを施している。受け部下の稜は横に引き出し、端部は丸くおさめる。白っぽい淡黄褐色を呈す。14は高环であろう。坏部の底には円盤を充填しており、中心には小孔の痕跡が見られる。脚柱部は径4.2cm程度と推測される。15は低脚坏もしくは台付き鉢であろう。接続部の径が5.4cmと比較的大きく、脚の開きが小さいことから低脚环の可能性は低いかも知れない。16、17は低脚环の脚部である。16は接続部の径2.9cm、底径4.3cm、17は接続部の径3.1cm、底径5.9cmを測る。18は低脚环の坏部であろうか。口径13.4cmを測るが高环等の脚部の可能性も否定できない。19は表面に擦痕の見られる偏平な小円碟である。長さ3.9cm、幅1.9cm、厚さ0.65cmで、黒色の堆積岩製である。

S I 08外周平坦面・外周溝出土遺物(第288図) いずれも覆土より出土している。20~25、27は複合口縁の甕である。20は複合口縁部の稜を若干横方向に伸ばし、口縁が外反して立ち上がる。復元口径16.7cmで、端部は先が細りながら丸くおさめる。21は復元口径21.6cmで口縁が大きく外反する甕である。風化のため端部は不明瞭だが、複合口縁部の稜はわずかに横方向に強調し、口縁端は丸くおさめる。22は復元口径18.4cm、複合口縁部の稜が下方向に伸びる甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。23は復元口径16.8cmを測るやや厚めの甕である。複合口縁部の稜は、その直上を強くなることによって横方向を強調している。口縁部はほぼまっすぐ外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。24は復元口径15.6cm、複合口縁の稜を薄く横方向に引き伸ばした甕である。口縁は若干外方に開いてまっすぐ立ち上がり、口縁端はわずかながら外方に折り曲げる傾向が見られる。肩部外面にはヨコハケ見られ、内面は砂が右に動くヘラケズリを施している。25は復元口径16.2cm、複合口縁部の稜を薄く横方向に引き出した甕である。口縁はわずかに外反気味に立ち上がり、口縁部上端には明瞭な面を設ける。肩部付近外面には細い線状の刺突が見られ、内面は砂が右に動くヘラケズリを施す。白っぽい淡褐色を呈す。27は復元口径17.8cmの甕で、口縁は外方にほぼまっすぐ立ち上がる。風化のため端部の詳細は不明瞭だが、複合口縁部の稜は若干横方向に引き出し、口縁端はわずかに外側に折れるようなアクセントをつけているように見える。

26は口縁がやや内傾する甕である。複合口縁部の稜の直上には擬凹線を施し、口縁端には内傾する面を設けている。復元口径15.8cmを測る。28は口径24.4cm、口縁がほぼ直立して立ち上がる甕である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、口縁端には面を設けている。頸部は滑らかに内湾してよく張った副部に至る。頸部下付近には、

ハケメ原体かと思われる細かな単位の工具で波状文を施し、その下には二段にわたり平行沈線を施す。平行沈線の下方には斜め方向のハケメが見られる。胸部内面はヘラケズリで、砂は右に動いている。灰白色を呈す。29、30は甕または壺の底部である。30は凸レンズ状に膨らんだ平底の底部である。内面はヘラケズリで、指頭圧痕は明瞭でない。30は底径6.5cmの明瞭な平底である。

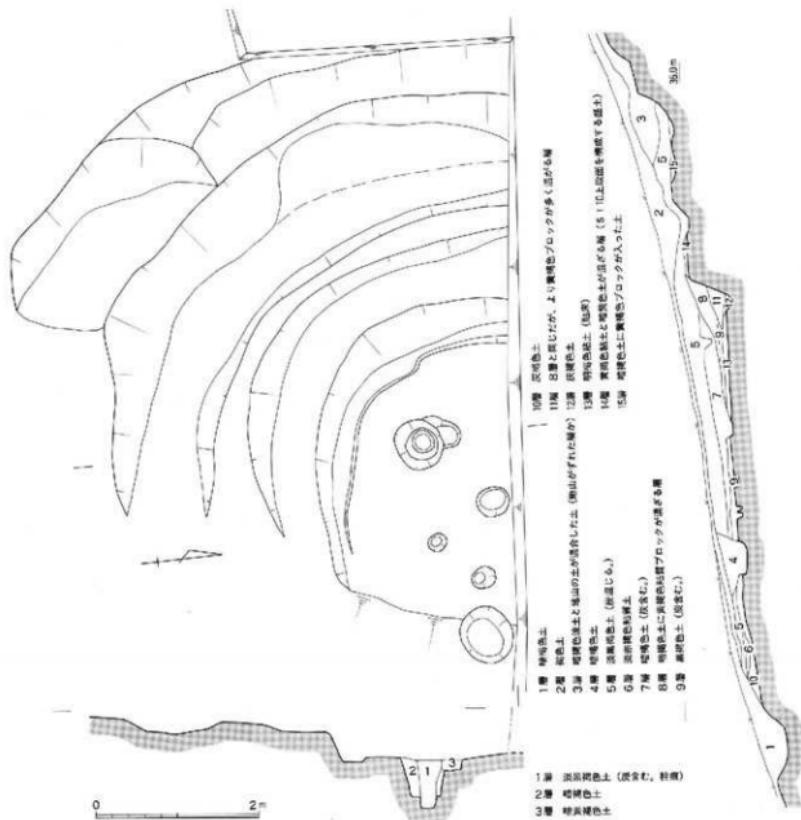


第289図 S I 08外周溝出土碧玉実測図 S = 2 / 3

31は鼓形器台の脚台部である。復元底径21.6cm、筒径11.6cm、白っぽい淡褐色を呈す。32は高杯である。環部の底に円盤を充填するタイプで、脚柱部の径は4.0cm、脚部内面には横方向のヘラケズリを施す。外面にはハケメが見られるが、脚柱部の接合部付近はナテによりハケメが消えている。33～36は低脚环であろう。34は一般例に比べて脚裾がよく広がる個体である。

第289図37は碧玉の玉未製品と考えられる。剥片を切断して適度な大きさにした後、側面を中心に整形のための剥離を加えている。4.4cm×2.6cmの大きさから勾玉の未製品と考えるべきだろう。

S I 08の時期は、床面出上の土器が二点だけ(11、12)で、しかも時期の限定がしにくい器種である。ただ基本的に塩津4期～5期でおさまると考えて大過ない。覆土内出上の土器を見ると、4期の特徴を持つもの(2、6、8など)と5期の特徴を持つもの(1、4、5など)が並存している。S I 06と同様、塩津4期から5期の中間的な時期と考えられるかも知れない。



第290図 柳遺跡 S I 10実測図 S = 1 / 60

S I 09 (第284図)

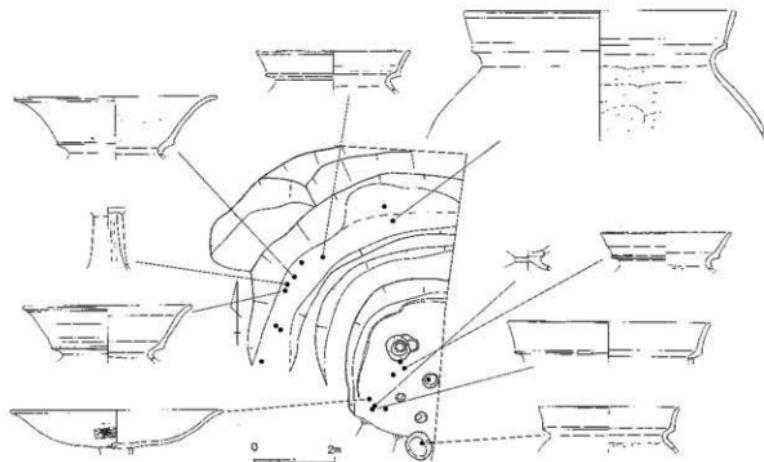
S I 08の南側で検出された竪穴住居跡である。S I 08によって床面の大部分を切られており、4.5m残存する壁体溝と、柱穴から推測するしかない。壁体溝は南端で鈍角に曲がっており、隅円多角形の平面を想起させる。S I 08との関係からP17、P18が主柱穴の可能性が高いことも隅円多角形平面を示唆する。S I 08の外側にあたるP20、P8もS I 09に関わる柱穴の可能性がある。図示できる遺物は出土しておらず、S I 08より古いという以上の時期限定は出来ない。

S I 10 (第290図)

柳遺跡東斜面北半の谷状地形の奥、調査区の最も北側で検出された竪穴住居跡である。加工段16の下方、S I 08の北側にある。用地境界で過半が調査区外にあたるため、全容は明らかに出来なかつたが、遺構のおおよそは推測できる。全体としては、竪穴の周囲に平坦面がめぐり、その外側には外堤状の高まり、その外側に外周溝が廻るという、斜面に作られた竪穴住居跡の一般的な構造を取っている。

竪穴部分は、調査範囲内で見る限り隅円方形を呈す可能性が高いと考えられる。壁の高さは斜面上方側（西側）で約50cmを測る。主柱穴と考えられるビットは南西側の1穴しか検出できず、直径60cm、深さ65cmを測る。断面を見ると、柱痕が観察され、その幅は約20cmである。東側に検出されたビットは浅いため、主柱穴とは考えにくい。いわゆる中央ビットは調査区外にあるものと考えられる。床面には、粘土を貼った貼床が認められる。

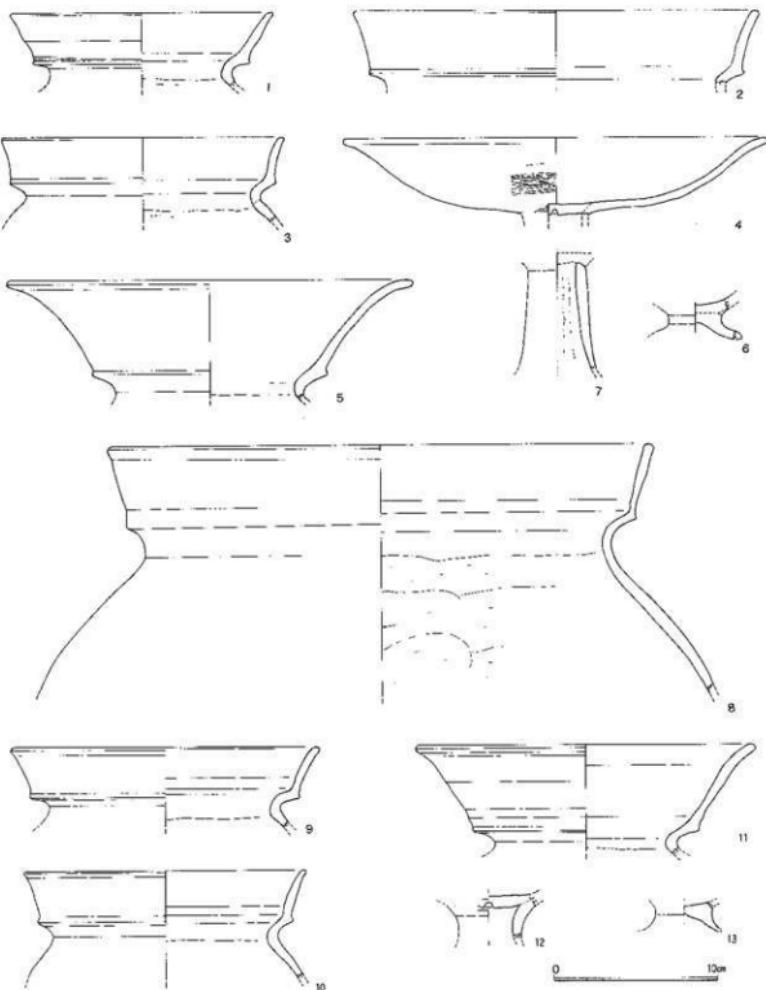
竪穴の外周をとりまく平坦面は、幅が55cm前後で、上面は盛土が行われている可能性がある。竪穴の側面に通り込んできても、幅が広くならないのが特徴である。断面観察で壁際に溝らしき落ち



第291図 柳遺跡S I 10遺物出土状況 S = 1/120 (遺物は1/6)

込みがあり、平坦面のすぐ外側にも溝がめぐる可能性がある。平坦面の外側には土手状の高まり(外堤)があり、その外周に溝がめぐる。溝の底面の幅は40~70cmと、S I 05やS I 08に比べて広い。ただ遺構の残存度はあまり良くなく、検出時の規模がそのまま原形をとどめたものではない可能性もある。

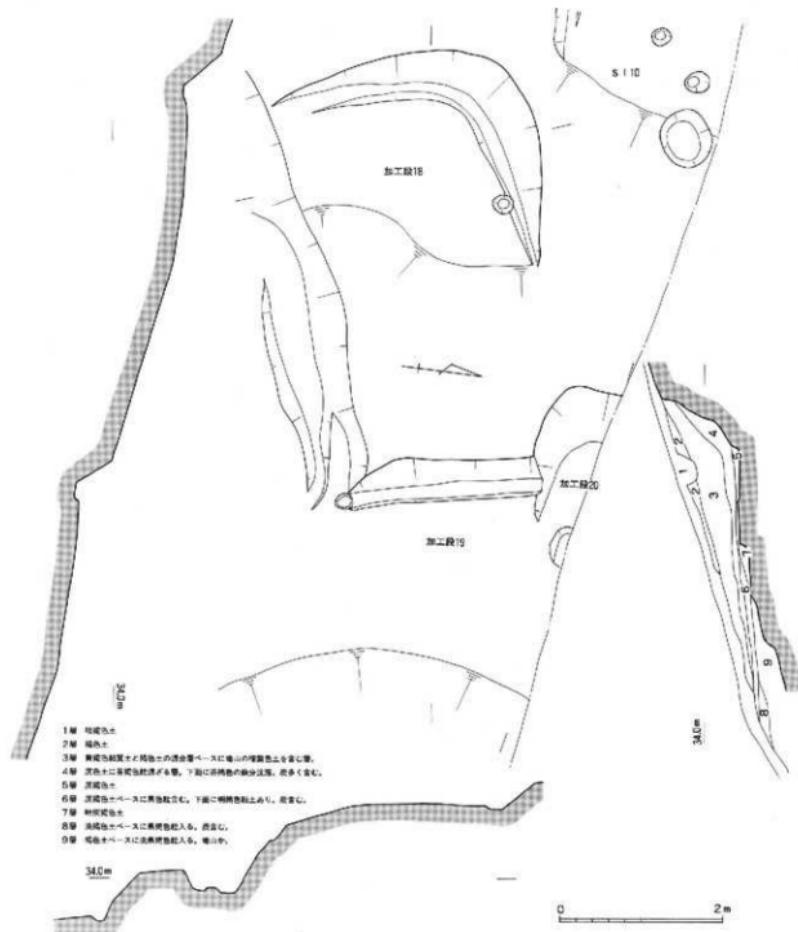
S I 10遺物出土状況 (第291図) 堪穴の床面、および外周溝の底面からかなりの遺物が出土して



第291図 棚遺跡 S I 10出土遺物実測図 S = 1 / 3 (1~6…床面、7~9、11…周溝床面、その他…覆土)

いる。堅穴の床面からは、主柱穴の東側と南側の壁際付近からまとまって出土している。外周溝からは南側を中心に、大きなまとまりはなく出土した。

S I 10出土遺物(第292図) 1~6は堅穴の床面から出土した土器である。1は口径16.2cm、口縁が外方に開いてまっすぐ立ち上がる甕である。複合口縁の稜は若干横方向に伸び、その直上に2条の擬凹線を施している。口縁端部はわずかながら外方へアクセントを付けている。白っぽい淡褐色を呈す。2は復元口径25.0cmを測る甕で、複合口縁の稜は横方向に引き伸ばす。口縁は外方にまっすぐ立ち上がり、口縁上端に不明瞭ながら面を作っている。3は復元口径17.4cmで、口縁がわずかに内側へ凹む。4は復元口径16.0cmで、口縁は外方にまっすぐ立ち上がり、口縁上端に不明瞭ながら面を作っている。5は復元口径16.0cmで、口縁は外方にまっすぐ立ち上がり、口縁上端に不明瞭ながら面を作っている。6は復元口径16.0cmで、口縁は外方にまっすぐ立ち上がり、口縁上端に不明瞭ながら面を作っている。



第293図 加工段18・加工段19・加工段20実測図 S=1/60

かに外反して立ち上がる甕である。風化のため端部は不明瞭だが、複合口縁の稜は横方向に強調しているようで、口縁の上端にはわずかに面が見られる。橙褐色を呈す。

4は高坏の坏部である。口径26.3cm、深さが4.1cmと径が大きい割には浅い坏部で、口縁部付近で外方に開く。底部には円盤を充填しており、その下部中心には小孔がみられる。調整は不明瞭だが外面にはヘラミガキが観察され、接合部近くにはハケメも見られる。接合部で測ると、脚柱部の径は4cm前後と考えられる。5は鼓形器台の受け部である。端部付近でまた外方に折れ曲がり、復元口径25.1cmを測る。白っぽい淡褐色を呈す。6は低脚环であろう。

7～9、11は外周溝の底面から出土した土器である。7は高坏の脚柱部である。接続部付近の径が3.6cm、風化が著しく調整の詳細は不明だが、脚内面は縱方向の筋が見え、しばりか横方向のヘラケズリと推測される。淡黄褐色を呈す。8は口径33.8cmの大形の甕である。大形の割に薄手で、特に口縁下部は3mmの厚さである。口縁は外方にほぼまっすぐ立ち上がり、口縁上端には面を設けている。風化のため調整の詳細は不明である。淡黄褐色を呈す。9は複合口縁部の稜からわずかに口縁が直立した後、外方に立ち上がる甕である。風化のため端部の詳細は不明瞭だが、稜はやや横方向に強調、口縁端部はわずかに外方に折るニュアンスが見られ、上端にも不明瞭ながら面が見られる。淡橙褐色を呈す。11は鼓形器台受け部であろう。口径21.0cm、筒部径11.1cmを測る。

10、12、13は腹内出土の土器である。10は復元径17.4cmの甕である。複合口縁部の稜は横に突出し、口縁は外方にほぼまっすぐ立ち上がる。口縁は次第に細くなって口縁端部はわずかに外方につまり出し、上端には微かな面が見られる。12は高坏であろう。坏部の底には円盤を充填し、中心には小孔が見られる。脚柱部の最小径は3.9cm、淡黄褐色を呈す。13は低脚坏であろう。脚端が先細りになっていく。

S I 10の時期は、外反する口縁の甕がほとんど認められず、大部分が口縁端部に何らかの調整を加えていること、脚柱部が円筒形で口径の広い高坏が明らかに出現していることなどから（甕がまだ若干厚めであることが気にはなるが）塩津5期としたい。

加工段18（第293図）

柳遺跡東斜面北半の谷状地形の奥、S I 08とS I 10に挟まれた狭い空隙地で検出された遺構である。南側をS I 10によって大きく切られており、全容は不明である。検出時の残存規模が長さ2.4m、幅が2.4mである。壁際には底面の幅10～20cmほどの溝がめぐっており、竪穴住居跡の可能性も否定できない。

床面から土器が1点出土している（第294図1）。底径2.4cmとわずかに平底を残す甕もしくは壺の底部である。やや厚手で、内面はヘラケズリ、指頭圧痕は認められない。この1点で加工段18の時期を決めるのは難しいが、おおよそ塩津4期と考えている。

加工段19（第293図）

柳遺跡東斜面北半の谷状地形の奥、加工段18の下方で検出された加工段である。南側をS I 08、北側を加工段20と切り合っているため、規模や形態は全く不明で



第294図 柳遺跡加工段18・加工段19出土遺物実測図
S=1/3 (1…加工段18床面、2…加工段19覆土)

ある。残存する2.4mの間、壁はほぼまっすぐ伸びており、壁際には底面の幅15cm～20cmの溝が見られる。両側の造構との切り合い関係は明らかに出来なかったが、S I 08の外周溝が加工段19を切るように伸びてきていることから、S I 08よりは古い可能性が高い。

覆土内より土器が1点出土している(第294図2)。復元口径14.0cmのやや小形の甕である。複合口縁部の稜は若干横方向を強調している。口縁は外反して立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸くおさめている。この土器の時期は、塩津山4期と考えられる。

加工段20 (第293図)

加工段19の北側に隣接して検出された。造構の南端のみが検出され、大部分は用地外の未調査区に続いている。土層の観察により、床面は少なくとも幅3.3m程度残存している。斜面下方側は、低い部分に床を貼って整えており、平面的には検出できなかつたが壁際には幅65cmの浅い溝がめぐるようである。遺物は図示できるものは出土せず、時期は不明である。



上空からみたS I 06～S I 10

加工段21（第295図～第299図）

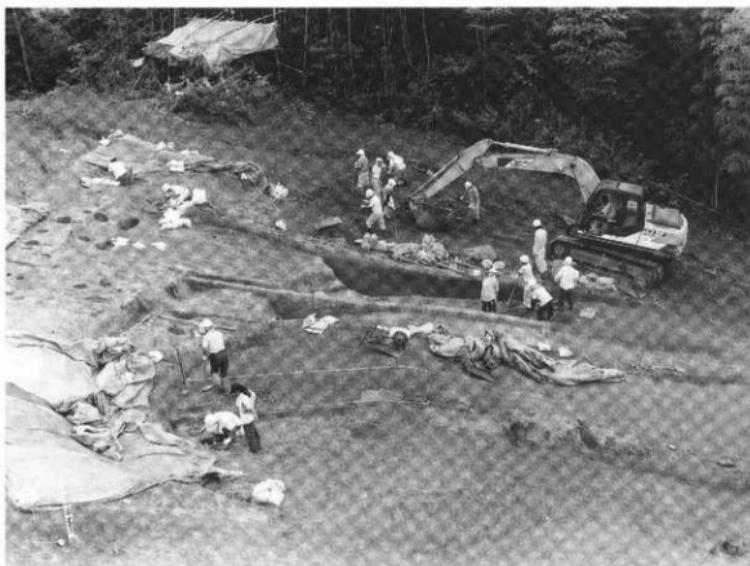
位置と概略 柳遺跡北半の谷奥部、標高35m付近で検出された加工段である。加工段11、加工段12の東下方、S I 06～S I 09の住居跡群南側にあたり、レベルはS I 07とほぼ同様である。他の造構との切り合いは全く認められない。

本遺跡の通例の加工段は、竪穴住居跡に比べて長さが長くて幅が狭いのが一般的だが、加工段21は比較的竪穴住居跡の形態に近いのが特色である。ただ床面の平面形は不整形で柱穴配置が竪穴住居跡と異なること、壁際の壁体溝が基本的に認められることなどから、竪穴住居跡ではないと考えている。

床面の重なり さて加工段21は、少なくとも3面、可能性としては4面の床が重なっている。床の作り替えは、床面の嵩上げによってなされており、最古の床面は削りだした地山の上に面を整えるための置き土をした面で、第295図12層上面（下面）がある。その後12cm～13cm、土が盛られて新たな面（中面）が形成される。第295図10層上面がある。

さらに10cm前後の置き土の上に加工段21上面が形成される。この面は、単なる嵩上げだけではなく、背後の斜面をさらに削り込んでの床面の拡大を伴っている。この面（上面）の上には厚さ10cm内外の黒色土が覆っている（第295図7層、第295図5層）。

平面的に床面を認識できたのは以上の3面であるが、土層断面を見ると床面の可能性がある面がもう一面見られる。第295図5層上面および第297図3層上面である。この面もほぼ水平で、上を黒



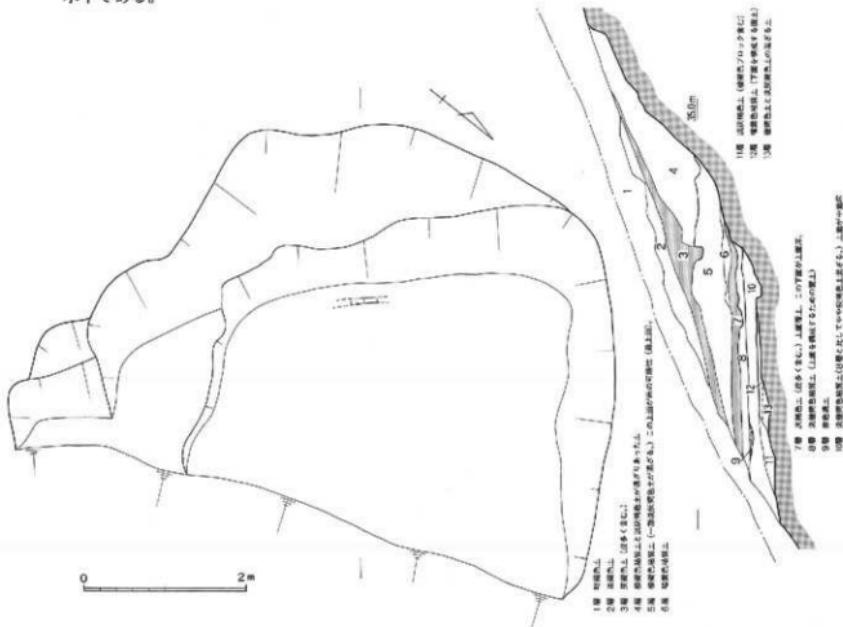
S I 07～S I 10付近 作業風景

色土で覆われている。壁際に溝らしき浅い落ち込みが断面で見られることは、床面であった可能性を高めるが、嵩上げの床面にはしばしば見られる粘質土による床の整形は見られず、焼土や柱穴等は認識できていない。

加工段21下面(第295図) 斜面に沿った長さが床面で約4.3m、斜面の下方側は流出しているが検出時の残存幅が4mとやや不整な方形に斜面を削りだして形成された加工段である。床面は、地山面がやや不整に整形されたためか、若干の上(第295図12層、13層)を上に載せて床面を形成している。床はほぼ水平だが、わずかに下方に向かって傾斜している。

土層断面の観察では、壁際には幅30cm、深さ5cm程の溝が見られる。平面的には土層観察ベルトでわずかな範囲で検出されただけだが、壁際をめぐっていたものであろうか。床面では柱穴や焼土等は検出されなかった。ただ次に述べるように、その上の面（中面）では柱穴らしきビットが4穴検出されており、この下面以下にまで達している。柱穴の位置を変えずに床面の作り替えをした可能性も考えておく必要があろう。

加工段21中面(第296図) 下面の床の上に、淡橙褐色の粘質土を12~13cm程盛って床面を形成した面である。床面を嵩上げする場合は、一般的に斜面上方側への拡張を伴うことが多い。しかしこの場合は平面的には全く捉えられず、断面でも明瞭ではない。ただ下面の下端の位置に比して中面の下端の位置は斜面上方側に寄った感があり、若干の拡張があったかも知れない。床面はほとんど水平である。



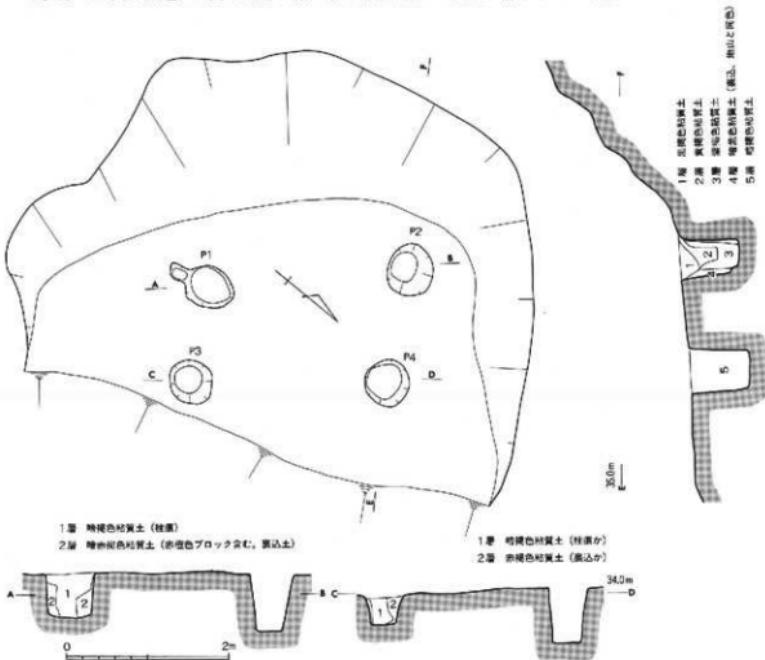
第295図 柳遺跡加工段21下面実測図 S=1/60

床面の規模は、斜面に沿った長さが5.7m、斜面下方側は流出しているが検出時の残存幅が約3.5mで、やや不整な方形を呈している。壁際には溝は認められない。

床面には柱穴様のピットが4穴検出された。柱間はP1-P2間とP3-P4間は、柱穴の中心で測って2.4mとほぼ等しいが、P1-P3間とP2-P4間はそれぞれ1.1mと1.4mと等しくない。よって4穴間を結ぶと、直角には交わらない不整方形となる。さらに短辺側の長さが短い感もあり、はたしてこの4穴で建物が構成されていたかどうかは疑問もある。床面が盛土で構成されているだけに、中面より上の面から掘り込まれていた柱穴を見逃していた可能性も捨てきれない。例えば壁に近い2穴が上面に伴う柱穴である可能性もある。次に述べるように上面では柱穴がないだけなおさらである。

柱穴の直径は50cm~65cm、深さは40cm~75cmで北側の2穴(P2、P4)が深い。断面の土層を見ると、柱痕らしき土層が確認され、柱穴であることは間違いないようだ。平面的に範囲を把握していないが、土層断面で赤く変色した焼土面の存在が確認できる。

加工段21上面(第297図) 加工段21の中面の背後の斜面をさらに削り込み、床面を拡張すると同時に、従来の床面(中面)の上に盛土をして床面の高さをあげて形作った面である。中面との高さの差は10cm前後で、中面を構成する置き土と同様の淡橙褐色土(第295図8層)を用いて床を作っている。床の上面は黒色土(第295図7層、第297図5層)で完全に覆われている。



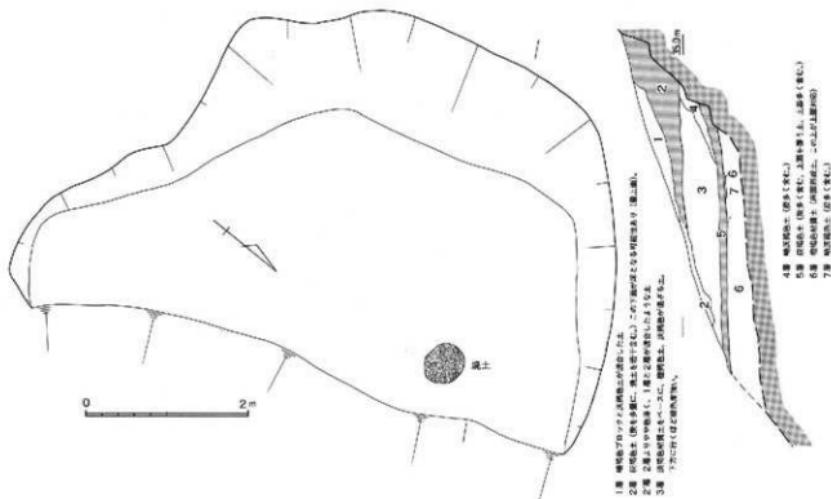
第296図 柳遺跡加工段21中面実測図 S=1/60

床面の規模は斜面に沿った長さが6.8m、斜面下方側は流出しているが検出時の残存幅が約3.2mである。壁際は不整に曲がっているが、これは検出時に壁が不明瞭だったために掘り過ぎた結果かも知れない。壁際の溝は認められないが、第295図の8層上面が壁際でわずかにくぼんでいるのは、溝を反映したものも可能性もある。床面の北寄りに、直径50cm前後の赤く変色した焼上面が検出されている。

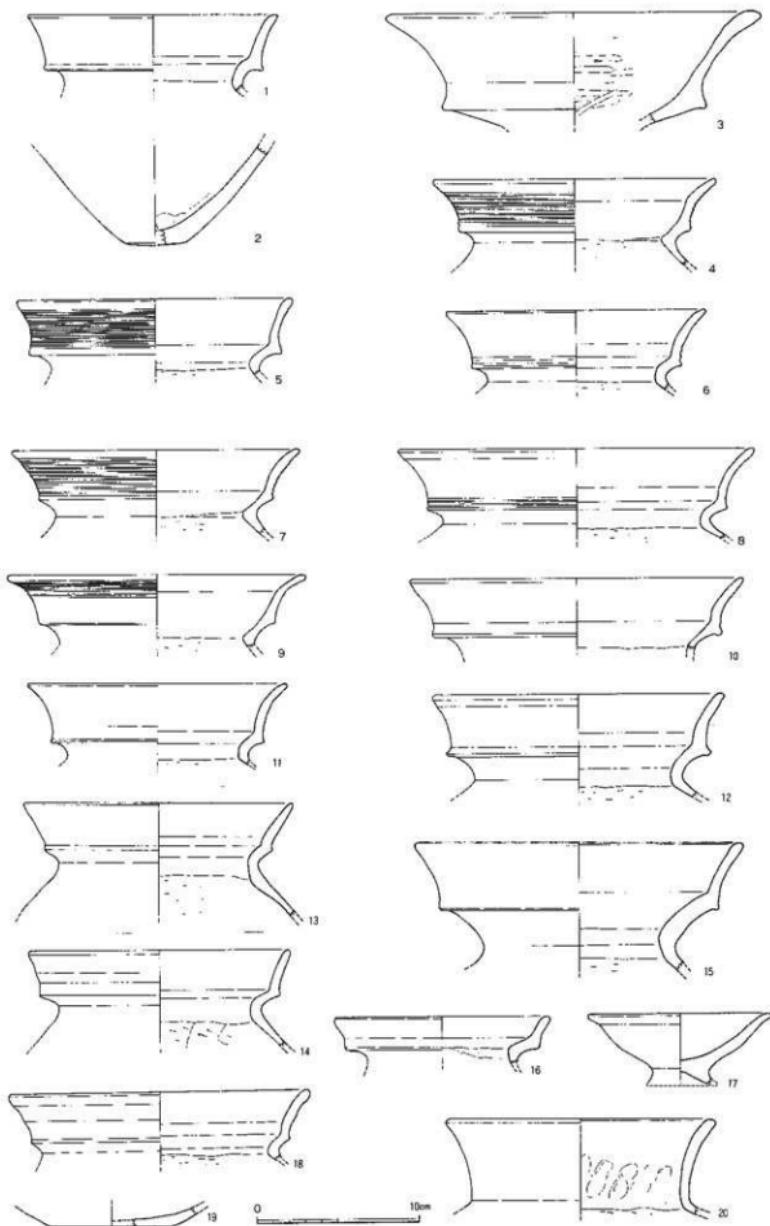
前述したように、加工段21上面のさらに上に面が作られた可能性もある。相対応する面の第295図5層上面と第297図3層上面がほぼ水平であることがその根拠である。ただそれ以上に床面と断定する根拠はなく、断定は出来ない。

加工段21出土遺物(第298図、第299図) 各面毎に遺物が出土している。1は下面から出土した甕である。復元口径15.4cm、厚めで口縁はやや外反して立ち上がる。複合口縁部の稜は斜め下方向に突出し、口縁端部は丸くおさめる。橙褐色を呈す。2、3は中面P4から出土した土器である。2は厚手の甕か壺の底部である。復元底径3.8cm、底面にわずかに膨らみがある平底である。暗赤褐色を呈す。3は鼓形器台の受け部である。復元口径23.2cm、受け部の高さ6.0cm、受け部は口縁に向かってよく外反して開き、一度器壁を薄くした後、端部に向かっては次第に厚みを増している。受け部の稜は斜め下に突出させ、口縁端部は丸くおさめる。内面はヘラケズリの後、ヘラミガキを施している。橙褐色を呈す。

4~6は中面から出土した土器である。4は復元口径17.4cm、口縁の外面に擬凹線を施す甕である。口縁はよく外反して開き、特に内面は中途で折れ曲がって外方に開いている。口縁端部はわずかに先細りとなって、先端は丸くおさめている。5は復元口径17.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜はやや下向きに伸び、口縁は外反して立ち上がって外面には擬凹線を施している。擬凹線



第297図 柳遺跡加工段21上面実測図 S=1/60



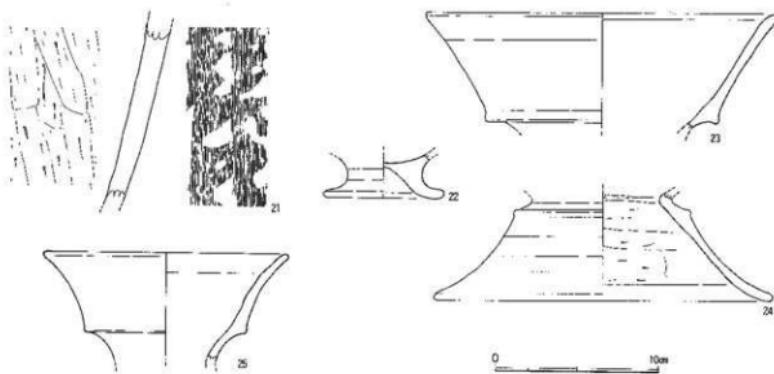
第298図 柳跡遺工段21出土遺物測定図(1) S=1/3
(1…下面、2、3…中面P 4、4~6…中面、7~17…上面覆土、18~20…上面上層覆土)

のある腰としては薄手で、口縁端部は丸くおさめている。6は復元口径16.0cmを測る腰である。複合口縁部の稜はわずかに横方向に引き出し、その直上に浅い凹線を施している。口縁はよく外反して開いており、端部は先が細くなつて丸くおさめる。淡褐色を呈す。

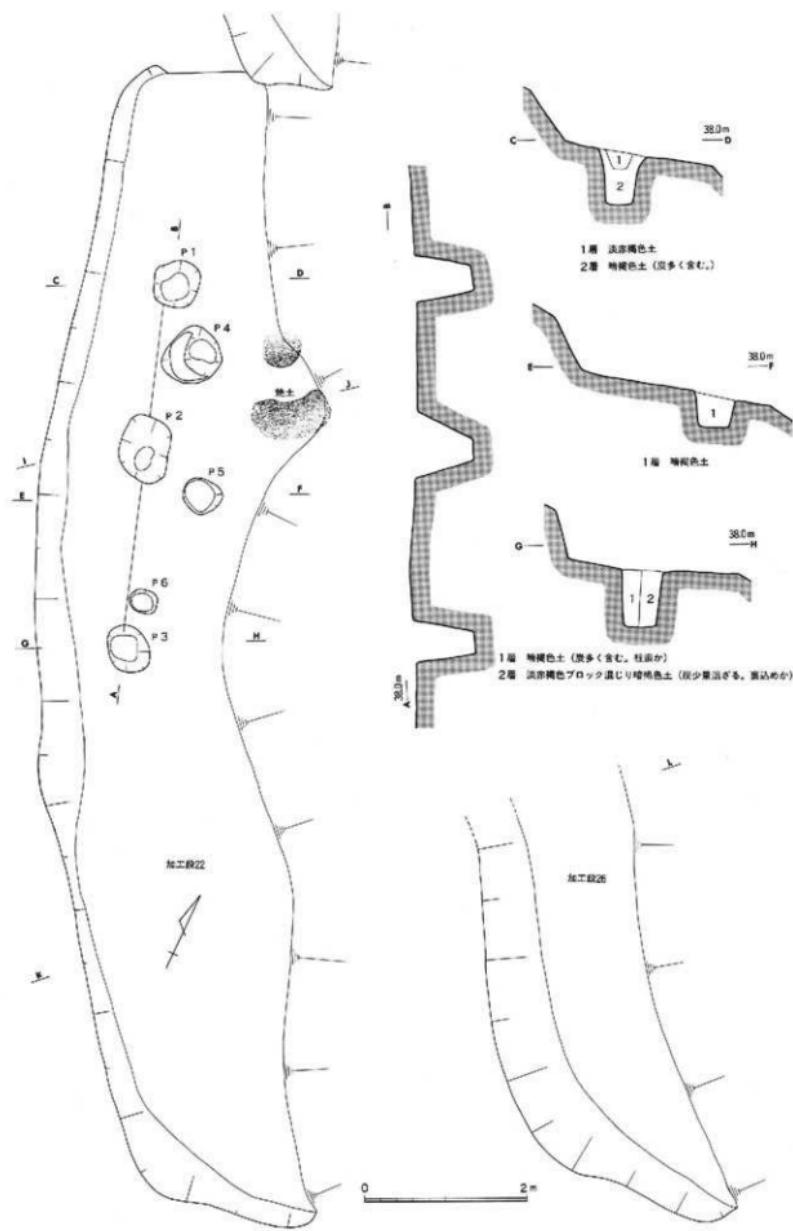
7～17は上面を覆う覆土から出土した土器である。7は複合口縁の外面に擬凹線を施す腰である。復元口径17.8cm、口縁はよく外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。概して薄めで擬凹線の間隔が1mm以上あり比較的幅広である。8は復元口径22.0cmの複合口縁腰である。口縁はよく外反して開き、端部は丸くおさめる。口縁の厚さが4.5mmと比較的薄手で、複合口縁の稜直上には少なくとも3条の擬凹線が見られ、それ以上は風化で不明だが全面に施されていた可能性がある。9は復元口径18.4cmの複合口縁腰である。風化で不明瞭ながら、少なくとも口縁の上半には擬凹線が見られ、本来は全面に施されていたものだろう。口縁は中途で折れ曲がるようによく外反して開き、端部は丸くおさめている。口縁は概して薄めで特に上半は厚さ3.5mmと薄い。

10は復元口径20.6cmの腰である。複合口縁部の稜が下に突き出し、口縁部は中途で折れ曲がるようにしてよく外反して開く。端部は丸くおさめており、橙褐色を呈す。11は復元口径16.0cm、複合口縁部の稜がわずかに横に引き出された腰である。口縁部は外反して開き、端部に向かって次第に薄くなつて先端は丸くおさめる。12は復元口径18.0cmの腰で、複合口縁部の稜は横方向に突き出す。口縁は外反して立ち上がり、端部付近の外面には回線状のくぼみをめぐらす。口縁の厚さが6～8mmと厚めで、端部は丸くおさめる。13は復元口径16.6cmの複合口縁腰である。口縁はほとんど外反せずに外方に立ち上がり、端部は丸くおさめている。口縁部の厚さは3mm～6mmで、端部に向かって次第に厚みを減じている。橙褐色を呈す。14は復元口径16.2cmの複合口縁腰である。口縁はほとんど外反せずに立ち上がり、端部は丸くおさめる。

15は復元口径20.4cmの壺である。複合口縁部の稜はわずかに下に伸び、口縁は外方に開いて立ち上がる。口縁外面は外済しており、頸部の厚さが1cm前後と厚い。16は復元口径13.4cm、口縁の立ち上がりが短い壺である。口縁は外方に開いて立ち上がり、外面が外済する。口縁端はやや膨らんで丸くおさめる。17は低脚環である。復元口径11.4cm、口縁付近で折れて外方に開いている。外面



第299図 柳遺跡加工段21出土遺物実測図(2) S=1/3 (21～25…覆土)



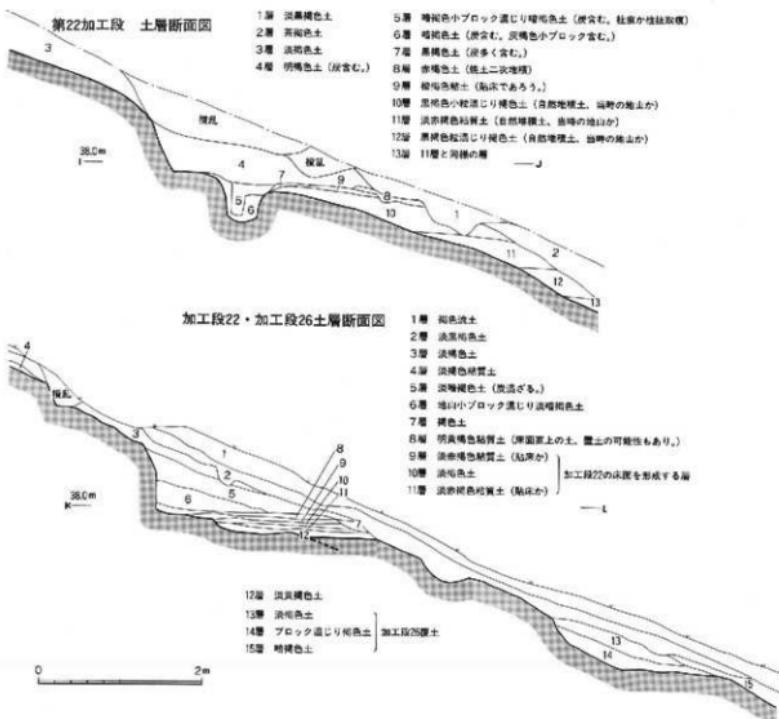
第300図 柳遺跡加工段22・加工段26実測図 S = 1 / 60

に煤が付着しており、火にかけられている可能性がある。

18~20は、最上面を覆う覆土出土の土器である。18は復元口径18.6cmの複合口縁甕である。口縁はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁外面にはヨコナテによって緩やかな凹凸が見られる。19は甕または壺の底である。復元底径7.8cm、明瞭な平底である。20は復元口径16.7cmを測る単純な口縁の壺である。口縁部がほぼ直立して立ち上がり、中途からやや外反して聞いて口縁に至る。口縁部の厚さは5mm~6.5mmで口縁に向けて次第に厚さを増し、口縁端部には明瞭に面を設けている。

21~25は面の対応が不明瞭な土器である。21はコシキ形土器の破片である。厚さが1.1~1.5cmと厚く、外面には細かなタテハケ、内面はヘラケズリを施す。橙褐色を呈す。22は低脚环の脚台部であろう。底径7.5cm、接合部の径4.6cmとこの種としてはやや大型である。淡黄褐色を呈す。23は鼓形器台の受け部である。復元口径21.9cm、受け部の高さ6.7cm、受け部の稜は下方に突出する。24は鼓形器台の脚台部である。復元底径21.0cm、筒部径8.6cm、脚台部高さ5.6cmを測る。25は鼓形器台である。器面の風化が著しく、天地は不明瞭である。復元径は15.1cmを測る。

加工段21の時期は、上面覆土出土の甕に新しい要素を持つ個体も散見される（13、14）ものの、



第301図 柳遺跡加工段22・加工段26断面実測図 S=1/60

多くの甕は大きく外反して開く特徴を持ち、口縁外面に擬凹線を施す個体が一定量含まれることから、塩津3期と考えている。

加工段22（第300図、第301図）

柳造跡東斜面南半の急斜面、標高約38m付近で検出された加工段である。加工段8からレベルでおよそ3m下方にあたる。床面の長さが検出時で約14mとなり大規模な加工段である。南端は明らかに壁が廻り込んで加工段が収束しているが、北端は床が自然地形とつながって消えており不明瞭である。ただ残存する壁が内側に廻り込む気配が見られることから長さにさほど大きな誤差はないと考えている。背後の甕は地形に沿って掘り込まれたらしく、わずかながら外溝している。検出時の壁の高さは60cm~90cmを測る。

床面は、検出時の残存がよい部分で幅5mほど残る。床は橙褐色または赤褐色系の粘質土（第301図I-J断面9層、K-L断面9層、11層）を貼って整えており、特に南半では少なくとも1度、床面の貼り替えが確認される。

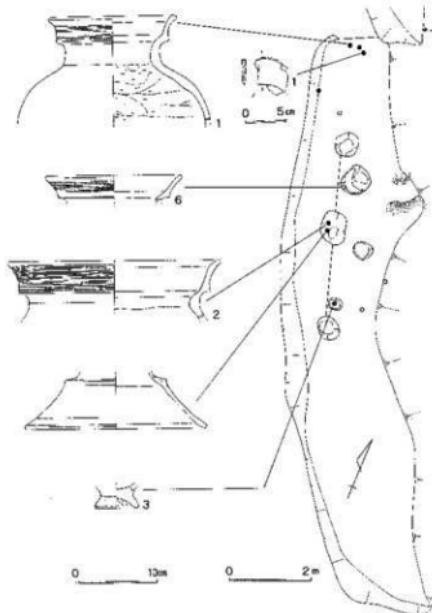
床面の北半には、柱穴様のピットが6穴確認された。これらのピットのうち、壁に近い3穴が直線状に並んでいる。柱間が柱穴の中心を測って北側が2.2m、南側が2.3mとわずかに違いがあるが、深さはほぼ等しく、斜面下方側（東側）の対応する柱列が流出によって失われた1間×2間の孤立柱建物を構成するものと考えて良いだろう。そうだとすれば、長辺側（桁行き）の長さが4.5mの建

物となる。

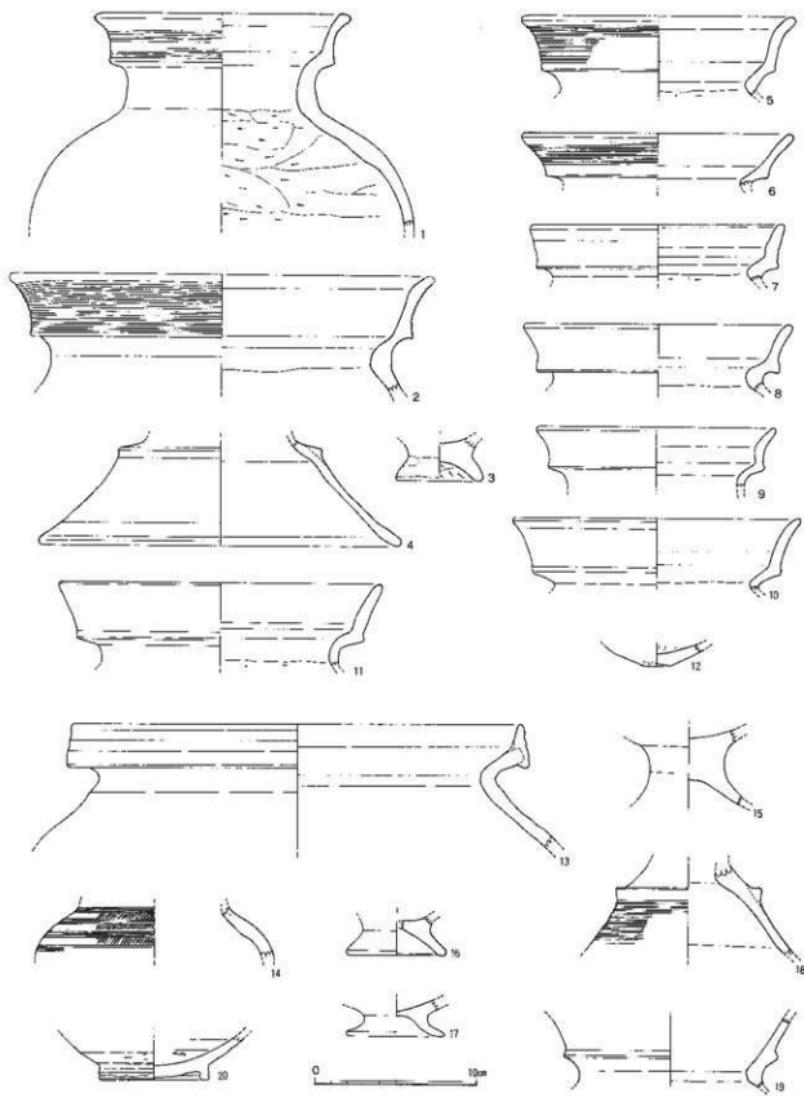
この柱列の柱穴の径は55cm~65cm（中央の柱穴は長細い。）、深さは検出面から70cm~75cmと深くしっかりしている。柱穴の平面形が、四角形に近く、上方の加工段6、加工段7、加工段8で検出された掘立柱建物跡の柱穴と同様の特徴である。柱穴の断面を見ると、柱底もしくは柱の抜跡と考えられる上層が観察されるものがあり、その幅は、20cm前後である。

床面北側の壁から2.5m程下方側には、焼けて赤変した焼土面が2ヶ所に認められる。一方床面の南半には、柱穴や焼土などは全く検出されなかった。

加工段22遺物出土状況（第302図）床面、柱穴内から遺物が出土している。床面では、加工段北端付近からまとまって遺物が出土し、図示したものでは鉄器（第309図1）と壺1が出土している。甕2は柱穴2付近の床面から、柱穴2内からは鼓形器台4が、柱穴6からは低脚環3が出土した。



第302図 加工段22遺物出土状況 S=1/120 遺物は1/6
●…床面出土 ○…覆土出土



第303図 柳遺跡加工段22出土遺物実測図 S = 1 / 3 (1~3…床面、4…P 2、5~20…覆土)

加工段22出土遺物(第303図、第309図1) 1は床面出土の壺である。全体的にやや分厚で、口縁の外面には擬凹線がみられる。口縁部の外面は外湾しており、端部は外方に膨らんで上端には面が見られる。口径15.8cmを測る。2は床面の柱穴2付近から出土した甕である。口縁は外反して立ち上がり、外面には擬凹線を施す。端部はわずかにかけているが、そのまま丸くおさまるのであろう。復元口径26.2cmを測る。3は柱穴6内から出土した低脚環の脚台部である。底径5.4cm、全体に分厚でつくりが粗く、脚部内面にはヘラケズリを施す。4は柱穴2内より出土した鼓形器台の脚台部だが、風化により調整の詳細は不明で、天地も不明瞭である。復元底径22.4cm、脚台部の高さ6.0cmを測る。

第309図1は床面で出土した鉄器である。幅3.2cm、厚さ5mmの湾曲した鉄片で、内湾する側に刃部が設けられているようである。破損しているため全形を知ることは出来ないが、その形態から鎌の破片であろうか。

5~20は覆土内出土の遺物である。5は加工段南半で出土した復元口径17.0cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方にほさまっすぐ立ち上がり、中途で折れ曲がって外方に開く。外面には擬凹線が施され、端部は丸くおさめる。6は加工段北半の覆土出土の復元口径16.8cm、口縁の外面に擬凹線を施す甕である。口縁の外面は若干外湾し、端部は丸くおさめる。7は南半の覆土出土の甕である。口縁は直立した後、若干外方に折れ曲がって立ち上がる。口縁の立ち上がりが2.8cmと短めで口縁に向かって厚みを減じて端部は丸くおさめる。復元口径15.6cmを測る。8は北半の覆土出土の復元口径16.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜が斜め下方に突き出し、口縁はやや外反して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。

9は南半覆土より出土した復元口径14.8cmの甕である。複合口縁部の稜はわずかに横方向に伸び、口縁は大きく外反して開く。口縁端部は丸くおさめている。10は北半の覆土出土の復元口径17.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜がわずかに横方向に膨らみ、口縁は外反気味に立ち上がる。口縁端部に向かってわずかながら厚さを減じていき、端部は丸くおさめる。11は復元口径20.0cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方に向けてほさまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。

12は甕または壺の底部である。底径1.8cmと底の面積は狭いが、わずかにくほんだ明瞭な平底である。13は復元口径28.0cmを測る大形の甕である。口縁は上下に拡張して内傾し、その外面には凹線状に強いヨコナデを施す。胴部はよく肩が張る形態になりそうだ。黄白色を呈す。この個体は他の土器に比してかなり古い様相を持つように見受けられる。14は南半の覆土出土の甕または壺の胴部片である。やや小形の個体で、頸部以下に4条単位の平行沈線を一定の間隔を開けて施し、その間に爪形の細かな刺突を連続して施している。内面はヘラケズリの後などでいるようで、丁寧なつくりである。

15は北半の覆土出土の高環である。環部と脚部の接合部付近に厚く粘土が詰まっており、器台状の器形を作った後に粘土を充填したのかも知れない。接合部の最小径4.6cm、白っぽい淡褐色を呈す。16、17は低脚環の脚台部である。16は底径6.2cm、脚は「ハ」字状に下り、端部は丸くおさめている。17は底径6.1cm、脚部は外方に開いて端部は丸くおさめている。

18は加工段22の下の流土から出土した鼓形器台である。風化が著しく詳細は不明だが、脚台部であろう。筒部の径が小さく、比較的背の高いタイプと考えられ、脚部外面には擬凹線がみられる。19は北半覆土より出土した土器で、鼓形器台の筒部であろう。筒部の径は11.2cmを測る。

20は縁軸陶器碗である。上部が欠落しているため全形は不明だが、高台は削りだしのいわゆる輪高台^⑩で、復元底径6.7cmを測る。釉薬はほぼ全面にかかるが、高台の底面と高台の内側接合部付近のみ無釉である。胎土は緻密で淡青灰色を呈す。9世紀～10世紀台のものであろうか。

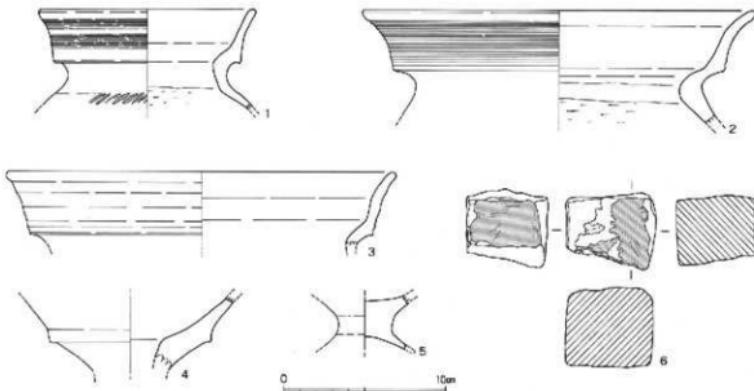
加工段22の時期は、床面および柱穴出土の土器に時期差が認められ、限定が難しい。床面でいえば1は塩津2期、2は塩津3期、柱穴出土の4は遡っても塩津4期であろう。覆土出土の土器も13と20を除外すれば、およそその幅のものが出てきている。ある程度の時期幅をもって使用されていたと考えた方がよいかも知れない。

加工段26（第300図、第301図）

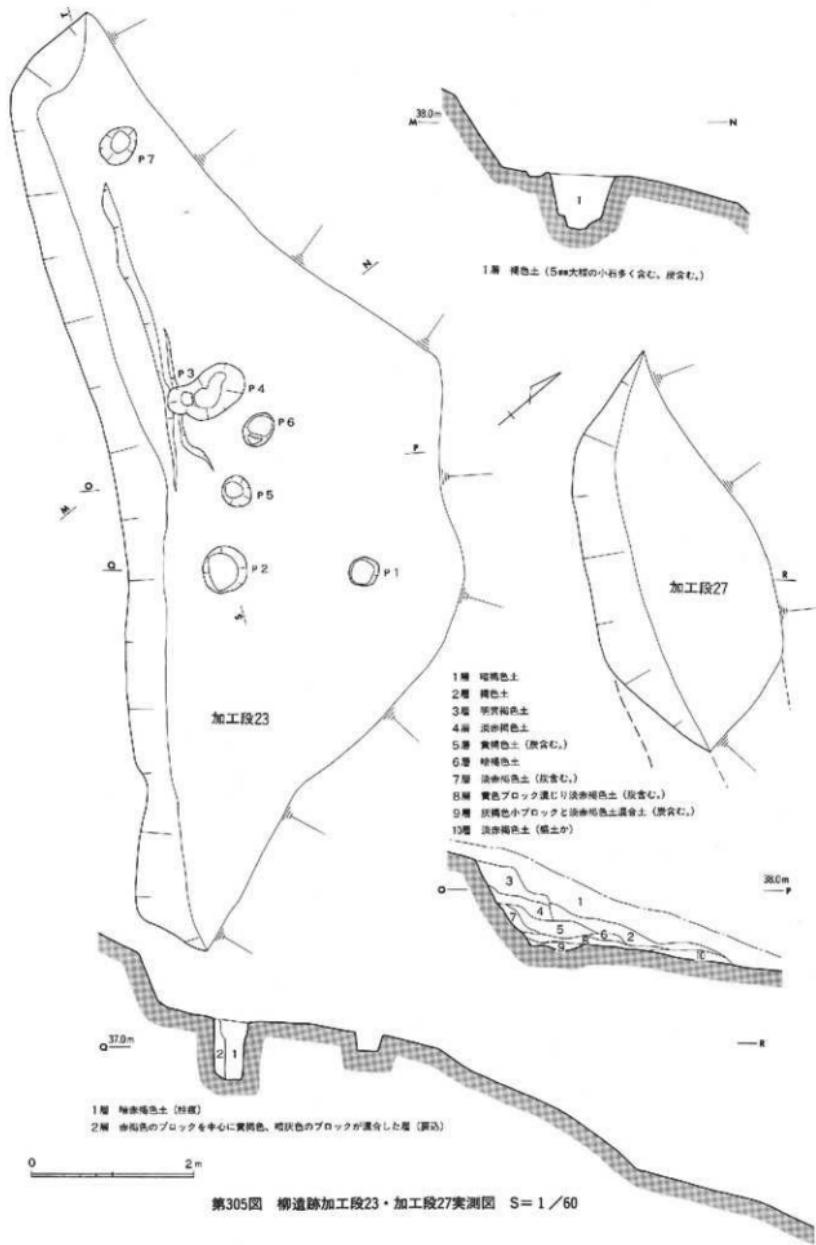
柳遺跡東斜面南半の急斜面、標高約36m付近で検出された加工段である。加工段22からレベルでおよそ2m下方にあたる。このあたりは基盤土の2次堆積土が地山となっているために、地山が軟らかく判別しにくい。そのため調査当初は加工段の掘り込みを認識できずに、北側の大部分を掘り飛ばす結果となってしまった。加工段の存在は土層観察用のベルトで認識され、その後掘削していなかった南側では検出することが出来た。

検出時の残存部分で長さ5.5m、幅は1.4mを測り、加工段22同様、細長い加工段であったかも知れない。床面はほぼ水平で、南端は加工段22と同じ位置で収束している。壁際の溝や柱穴、貼床の痕跡等は検出されていない。

加工段26出土遺物（第304図） いずれも覆土内出土の遺物である。1は復元口径13.4cmの壺である。複合口縁部の稜部分はわずかに下方に拡張し、口縁はやや外方に立ち上がる。口縁外面には細めの擬回線を施し、外湾している。頸部はかなり厚いが、口縁部は4.5mm前後と薄めで、口縁端部は丸くおさめる。頸部下方には、貝殻の腹縫による刺突をめぐらせている。2は復元口径24.4cmを測る複合口縁の壺である。口縁は外方に向かって立ち上がり、中途でさらに折れて開く。口縁外面は擬回線が施され、外湾している。口縁の厚さは先端に向かって次第に薄くなり、口縁端部は丸くおさめる。



第304図 柳遺跡加工段26出土遺物実測図 S=1/3 (1~6…覆土)



第305図 柳道跡加工段23・加工段27実測図 S=1/60

さめる。白っぽい淡黄褐色を呈す。3は、小片で口径の復元は不正確だが、24cm前後となる複合口縁部である。複合口縁部の稜はわずかに横に引き出し、口線は外方に向かってほぼまっすぐ立ち上がる。口縁外面はヨコナデで凹凸が見られ、端部付近ではわずかに外方に折り曲げて先端を丸くおさめている。淡褐色を呈す。

4は鼓形器台の受け部である。筒部径が比較的小さく、高さが高くなるタイプと思われるが、受け部外面に擬回線は認められない。橙褐色を呈す。5は低脚坏もしくは台付き鉢の脚部である。底部の厚さが2.1cmと非常に厚い。6は白色できめの細かい石材の砥石である。両側を欠損しており、本来は直方体に近い形状だったのだろう。4面のうち3面を研ぎ面として使用している。

加工段26の時期は、少量の遺物が全て覆土出土の上、その遺物も塩津2～塩津4期ととなり時間差が認められ、限定は困難である。ただ、加工段22のように長い期間利用していた可能性も考慮に入れる必要があろう。

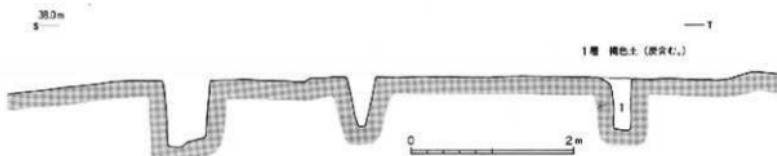
加工段23（第305図、第306図）

柳遺跡東斜面の中程に通る尾根筋の標高37.5m付近（頂上平坦面から約11m下方）で検出された加工段である。加工段9のレベルでおよそ4m下方にあたり、加工段22とは約50cmほどレベルを低くして北側に隣接する。

加工段を削りだした壁は、尾根地を断ち切って平坦面を作り出しており、若干内湾をしているものの直線に近く形成されている。北西側の壁は、斜面側に廻り込んで収束しているが、南東側は流出によって壁も床面も切られているため、全体の長さは不明である。ただ南側に隣接する加工段22とは、微妙に切り合いを避けて作られているように見える。そうだとすれば南東側もほぼ検出された端付近で収束していた可能性が高くなる。

検出時の残存部で長さは約11m、幅は尾根筋にあたる部分では残りがよく、3.8m残存している部分もある。床面は基本的に地山部分がそのまま利用されているようだが、斜面下方側で若干レベルが下がった部分には多少の盛土をして整えているようだ（第305図O-P断面10層）。壁際から15cm～40cm離れたところに、幅20cm前後、深さ5cm前後の溝が部分的に認められる。

床面からは柱穴らしきピットが、7穴検出されている。これらの柱穴だけでは、掘立柱建物を復元できないが、可能性を指摘できる柱列はある。まずP1、P2、P4は直角に交わって並ぶ。ただP2、P4は深さが70cm～80cmと深くてしっかりした柱穴だが、P1は35cmと浅い。またP2、P3、P7はほぼ一直線状に並ぶが、柱間がP2～P3間が2.25m、P3～P7間が3.3mと余りにアンバランスだ。いずれにしても床面は全て地山でしかも柱穴部分は幅もよく残り、対応する柱穴があればまず検出できる状況であったにもかかわらず、それが発見できていない事実は建物の成立



第306図 柳遺跡加工段23断面図 S=1/60

に否定的な要素である。しかしながら、P 2、P 3、P 7 は深くしっかりとした柱穴で、しかも P 2 は柱痕らしき上層も認められる。整然とした建物ではなくとも、何らかの建物は存在していた可能性は高いと考えている。

加工段23出土遺物(第308図、第309図2・3) 床面からは、ピット3、4の周辺で集中してかなりの遺物が出土している。1はP 3付近の床面から出土した壺である。口径部と底部の破片で、胴部付近は欠落しているが、胎土や色調の特徴から同一個体と考えられる。器壁の厚さが口縁部で8mm~11.5mm、頸部で10mm~14mm、胸部で7.5mm前後、底部付近で8mm~12mmと全体的に分厚で、胎土も3mm以下のかなり大きな砂粒を多く含み、粗製的印象を受ける個体である。複合口縁部の棱は分厚く横方向に突出し、口縁は外反して開く。口縁端部は失われているが、やや薄くなつて丸くおさまるのであろう。底部は底径2.6cmとわずかな平底だが、底面はしっかりとした平面である。内面はヘラケズリ、外面にはタテハケが見られる。橙褐色を呈す。

2はP 4の西側付近の床面から出土した壺である。複合口縁部の棱は横方向に引き出し、口縁はわずかに外反気味に立ち上がる。口縁端部付近は、内面を強くなつて薄めにし、外面はわずかに突き出すように処理している。口縁部の厚みは5.5mm前後、端部付近は3.5mm前後に薄くなる。復元口径17.4cmを測る。胸部の外面には、構状工具による平行沈線を施し、その下には振幅の比較的大きい波状文をめぐらせている。波状文の下方には縱方向のハケメが残っている。内面はヘラケズリで、砂は右方向に動いている。白っぽい淡褐色を呈す。

11はP 3付近の床面から出土した叩き石である。長さ10.9cm、幅9.1cm、厚さ8.9cmとかなり大形の河原石の両端を作業面として利用している。両端はかなり減って面を為しており、一部擦れています

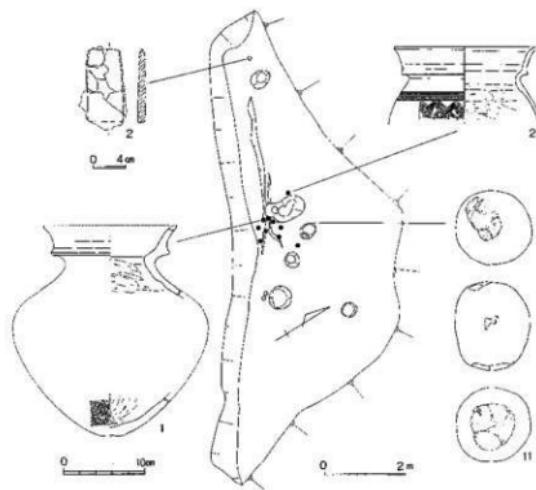
部分(図のトーン部分)もあることから、磨石としても使用したものだらう。

3~10、第308図3は覆土内より出土した遺物である。

3は口縁外面に擬凹線がみられる壺である。複合口縁部の棱は若干下方に伸び、口縁の残存部分はほぼ直立している。橙褐色を呈す。

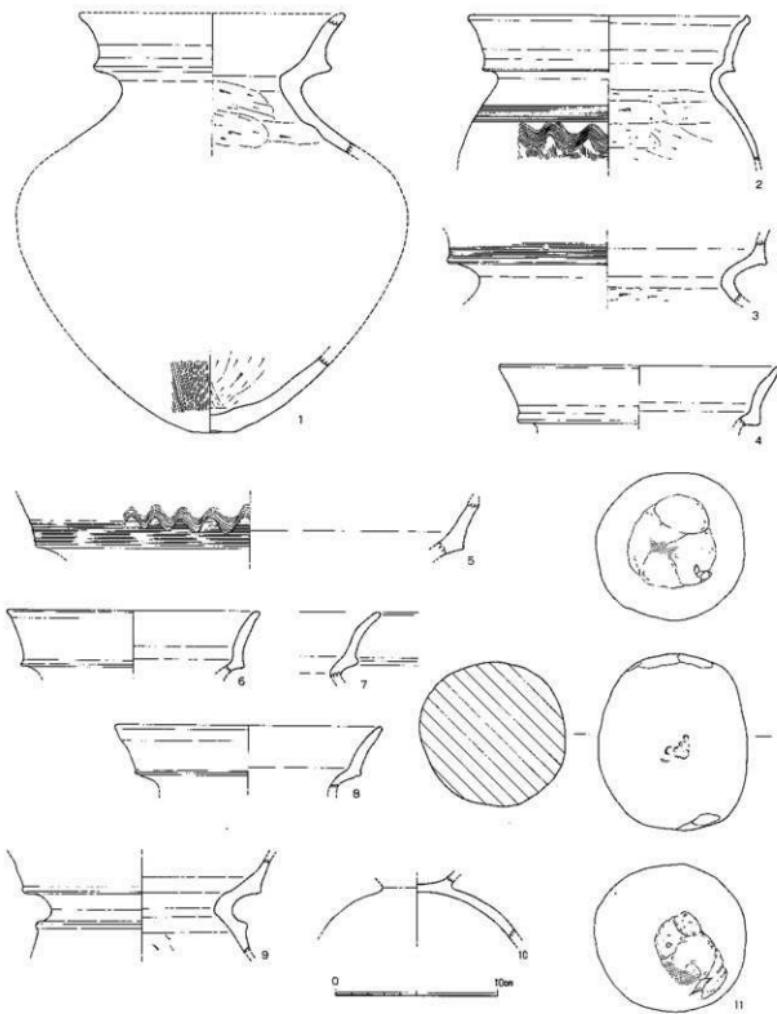
4は口径の復元は不正確だが、17cm前後の壺である。口縁はやや外反して立ち上がり、端部に向かって先が細くなつて先端は丸くおさめる。淡橙褐色を呈す。5

は、口縁端部が失われているが、復元径が30cm近くなると考えられる大形の壺で



第307図 柳遺跡加工段23遺物出土状況 S=1/120 遺物は1/6
●…床面出土 ○…覆土出土

ある。口縁外面の下半には擬凹線を施し、上半には擬凹線を切って柳状工具による波状文を丁寧に施している。白っぽい淡褐色を呈す。6は復元口径15.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜はやや横方向に引き出し、口縁は外反して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめており、黄色味がかった淡褐色を呈す。7は口径復元不可能な甕片である。複合口縁部の稜は横方向に出て、口縁は外反して



第308図 柳遺跡加工段23出土遺物実測図 S=1/3 (1, 2…床面、3~10…覆土、11…床面)

開く。口縁は薄手で、端部は丸くおさめる。白っぽい淡褐色を呈す。8は復元口径16.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向にわずかに膨らみ、口縁はあまり外反せずに立ち上がる。端部は先細りとなって丸くおさめる。

9は鼓形器台である。筒部径が11.1cm、筒部の高さが1.7cmで、筒部がかなり縮んだ形態である。淡橙褐色を呈す。10はつまみ部の内面を丁寧になでてあるため、蓋として図化したが、低脚坏の可能性もある。体部はポール状で、外面は丁寧になでている。接合部の径が4.3cm、淡褐色を呈す。

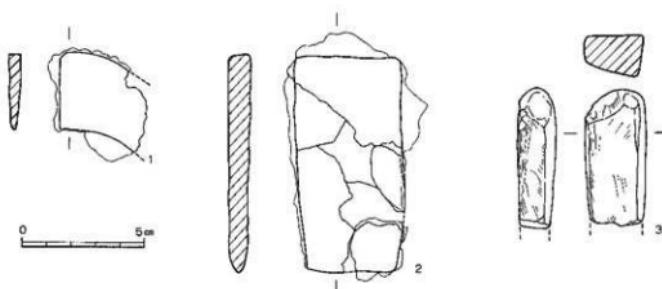
第309図2は加工段23の北西端付近の覆土より出土した鉄器である。調査時に破損しているが、大要は復元できる。長さが8.8cm、幅が3.6cm～4.4cm、厚さ0.9cmの短冊状を呈し、一端に刃部を設けていることから板状の鉄斧と考えられる。第309図3も加工段北西端付近の覆土内から出土した砥石である。白色の石製で、かなりきめが細かいことから仕上げ用の砥石であろう。一端を欠損しているが、長さ5.6cm、幅2.5cm、厚さ1.7cm、先端が丸みを帯びた直方体状で、ほぼ全面が使用されて擦痕が観察される。

加工段23の時期については、まず床面の上器で考えてみたい。1は粗製で分厚だが、塩津4期と考えられる。2は塩津4期の範疇で捉えられるであろうが、口縁端部に調整が加えられるなど塩津5期の要素も見ることが出来る。4期のうちでも新しい部類であろう。覆土出土の土器も3期の特徴を持つものも含むがおよそ4期の範囲内のものが多い。よって加工段23は塩津4期と考えられるが、使用期間はある程度幅があるかも知れない。

加工段27（第305図）

柳遺跡東斜面の中程に通る尾根筋の標高35.5m付近（頂上平坦面から約13m下方）で検出された加工段である。加工段23のレベルでおよそ2m下方にある。総的に残存状況が悪く、北西側は流出し、南東側は掘りすぎたきらいがある。結果的に掘り込み量が大きく床部分がよく残存している尾根筋にあたる部分のみが検出できている。

検出時の残存部分の長さが5m、幅が1.6mで、床面も傾斜した形でしか検出できていない。柱穴等の造構も検出されなかった。遺物も覆土内より弥生上器小片が出土しているのみで、図示できるものは出土していない。よって造構の時期も限定できない。



第309図 加工段22・加工段23出土遺物実測図 S=1/2 (1…加工段22床面、2、3…加工段23覆土)

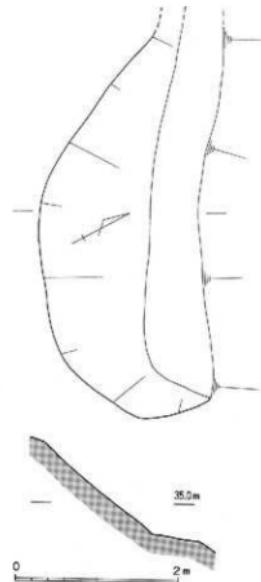
加工段24（第310図）

柳遺跡東斜面北半の谷状地形の南寄り、標高およそ34.5m部分で検出された加工段である。S 1 0 5 の約4m下方、加工段21の南東側にあたり、加工段27、S 1 07などとは同一レベルに並ぶ。この辺りは東斜面の中でも特に急な斜面にあたる部分である。

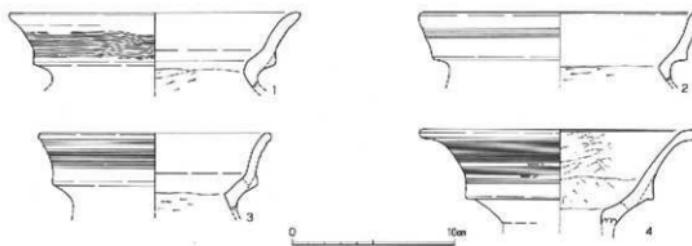
急斜面で流出が著しいことから、遺構の残存状態は非常に悪い。加工段の規模は、東側の端は壁が廻り込んで収束していくつかむことが出来たが、西側は流出して壁がほとんど残存していないため、端部を検出できなかった。よって加工段の規模は不明であるが、検出時の長さは4.3m、幅は0.8mである。

加工段24出土遺物（第311図） いずれも覆土内から出土している。1は復元口径18.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らませ、口縁はやや外反して立ち上がる。口縁外面には擬凹線を施す。擬凹線は少なくとも2単位認められ、部分的にくねっている。全体的に分厚だが、口縁端はやや先細りとなって先端は丸くおさめる。淡黄褐色を呈す。2は復元口径17.4cmを測る複合口縁の甕である。口縁はやや外方に開いてまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁外面には浅くて細い擬凹線が一部に施されている。口縁部から頸部にかけての内面は鴻曲して胴部との境の稜線にいたり、面は見られない。3は小片で復元値は不正確だが、復元口径14cmの甕である。口縁は外反して開き、外面には擬凹線を施している。口縁端部は丸くおさめている。暗褐色を呈す。4は鼓形器台の受け部である。受け部は外反して開き、口縁部付近でさらに水平に近い角度で開く。外面には擬凹線を施し、内面はヘラケズリの後上半にヘラミガキを行っている。復元口径は17.4cm、筒部は欠損していて不明瞭だが、およそ径が6.8cm程度となる。

加工段24の時期は、覆土出土の土器から判断すれば塙津2期～3期に対応する。



第310図 加工段24実測図 S=1/60



第311図 柳遺跡加工段24出土遺物実測図 S=1/3 (1~4…覆土)

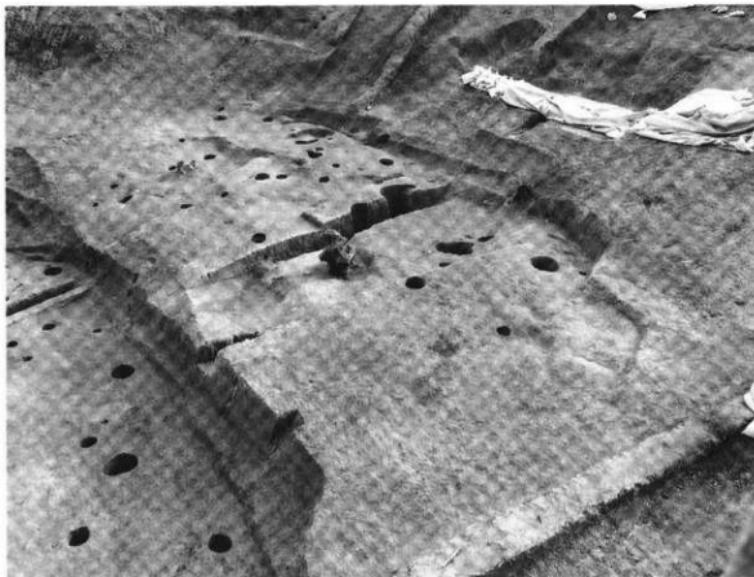
加工段25（第244図、第312図）

造構の位置と地形的特徴 柳遠跡東斜面北半の谷状地形の奥、地形が比較的緩やかとなる標高約33m付近で検出された加工段である。加工段21の直下にあたり、レベルでおよそ1.5m下方となる。東斜面では最も緩やかな斜面部だが、これは基盤が流出して2次的に堆積した土砂で形成された面である。よって他の部分と比べて地山が軟らかく、しかも流土や造構の覆土と色調が似通っており、造構の検出は難渋した。細かな造構が完全に検出できていないのはそのためである。

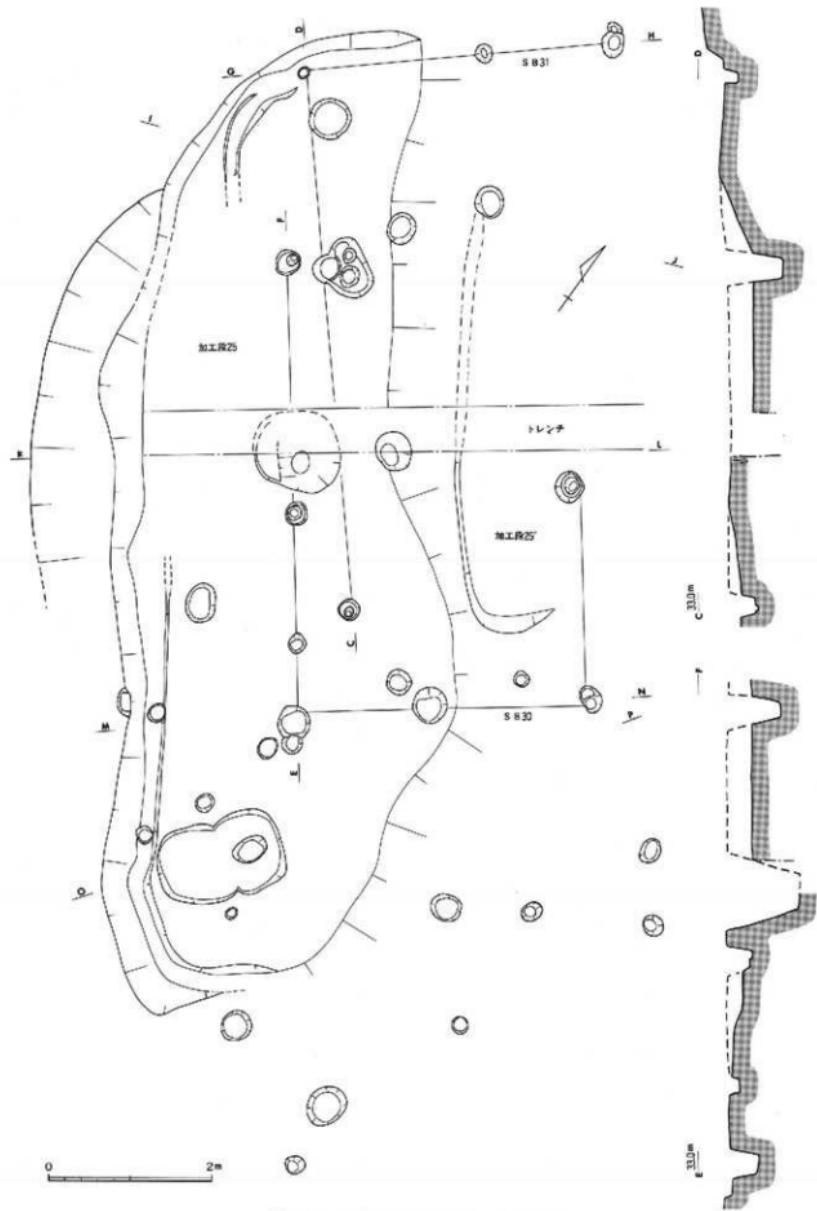
加工段の形状と規模 壁の両側をほぼおさえることが出来、造構の大要を把握できた。長さは床面で11.5m、背後の壁はほぼ直線状に伸びているので、およそ長方形に整形された加工段だったものと考えられる。

加工段南半では壁際に底面の幅20cm～25cm、深さが残りの良い部分で10cmの溝が検出されている。北半では検出できなかったが、これは前述したように地山の形質が覆土と判別しにくかったために認識できなかった可能性が強く、おそらく壁際には溝が続いていると推測される。北端付近では、壁際から若干離れた位置に幅25cm前後の溝が検出されている。これは方向を見ても南半の壁際の溝とはつながらず、壁の作り替えがあったことをうかがわせるものである。

加工段25の下方に浅い掘り込みが確認されており、加工段25' と呼ぶ。この段は加工段25のほぼ中央を貫くサブトレーナーの南側で検出され、トレーナーから2m程南側で壁が廻り込み収束している。ただトレーナーから北側は、先に掘削した際に認識できずに掘り飛ばしており、つながりをつかめしていない。ただ土層断面(I-J断面)で対応する段が確認でき、少なくとも長さ5mまでは続くこと



加工段25全量（北から）

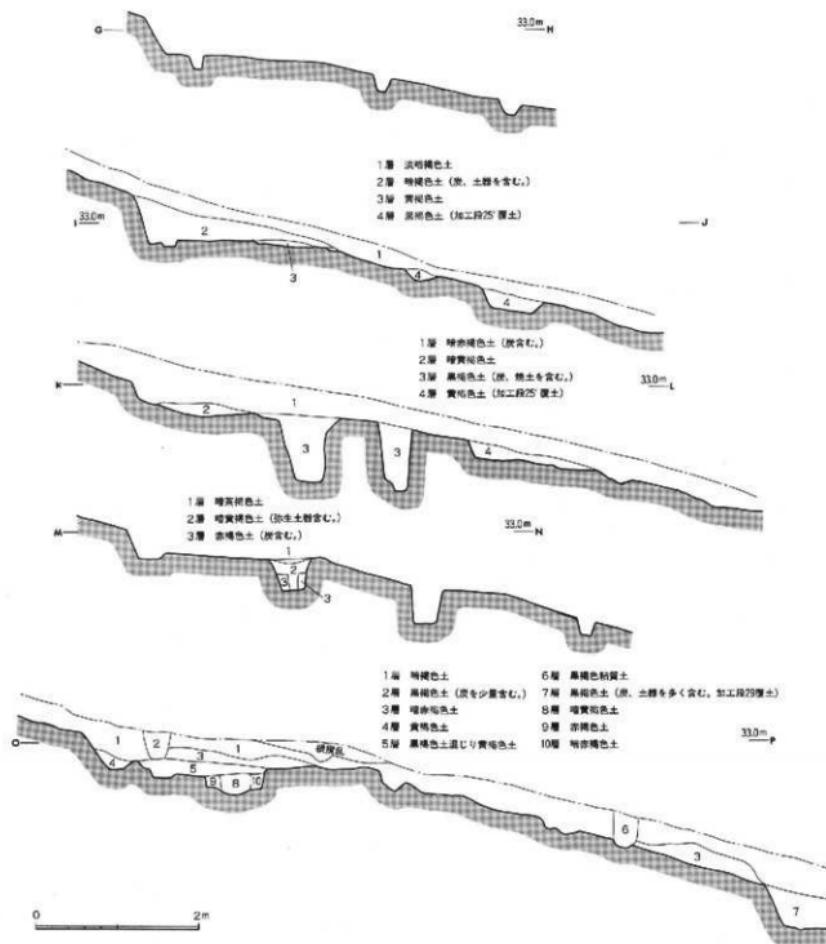


第312図 柳造跡加工段25実測図 S=1/60

がわかった。平坦面は幅1.5m残存しており、加工段25との前後関係は不明である。

さて平坦面からは多くの柱穴状のビットが検出された。これらの柱穴の配置を見ると、掘立柱建物を完全に組める配列は見あたらないものの、建物を構成する可能性がある配列を2つ指摘できる。以後この柱穴列の南側のものをSB30、北側のものをSB31と呼ぶ。

SB30 加工段25の壁からおよそ1.8m東側、中央から若干北寄りの位置に検出された掘立柱建物跡の可能性がある柱穴の配列である。北側の短辺に対応すべき柱穴2穴が検出されていないが、6穴の柱穴で2間×2間、5.7m×3.5mの長方形の建物を構成していた可能性がある。建物の長軸方向



第313図 柳遺跡加工段25断面図 S=1/60

は壁の方向と平行しており、N37°Wである。柱穴の直径は30~45cm、柱間は長辺側が3.2mと2.5m、短辺側が1.6mと1.9mと不揃いである。

S B31 S B30の北東側に若干位置をずらせて並ぶ柱穴群である。直径15cm~30cmの小形の柱穴によって構成される。北東側と南東側に対応すべき列が検出されず、5穴で2辺分のみの検出である。長辺側は3間と考えられるが、1穴はサブトレンチにちょうどあたって失われていると考える。建物の規模は6.8m×3.8mと大形となるが、柱間は不揃いである。建物の長軸方向は、S B30とはわずかにずれており、N39°Wである。

さてこれらの柱穴群は、上述したように柱穴間がともに不揃いであり、深さも統一性がない。この時期の擧立柱建物としてはかなり大型であることも建物を復元するには否定的な要素である。ただ、加工段の壁と同方向に復元されることや、その他の柱穴も含めて全体として眺めたときに、一定の方向性を持って並ぶ柱穴が多いことなどから、規則正しく柱の並ぶ建物ではなくとも、何らかの建物が建っていた可能性が高いものと考えたい。

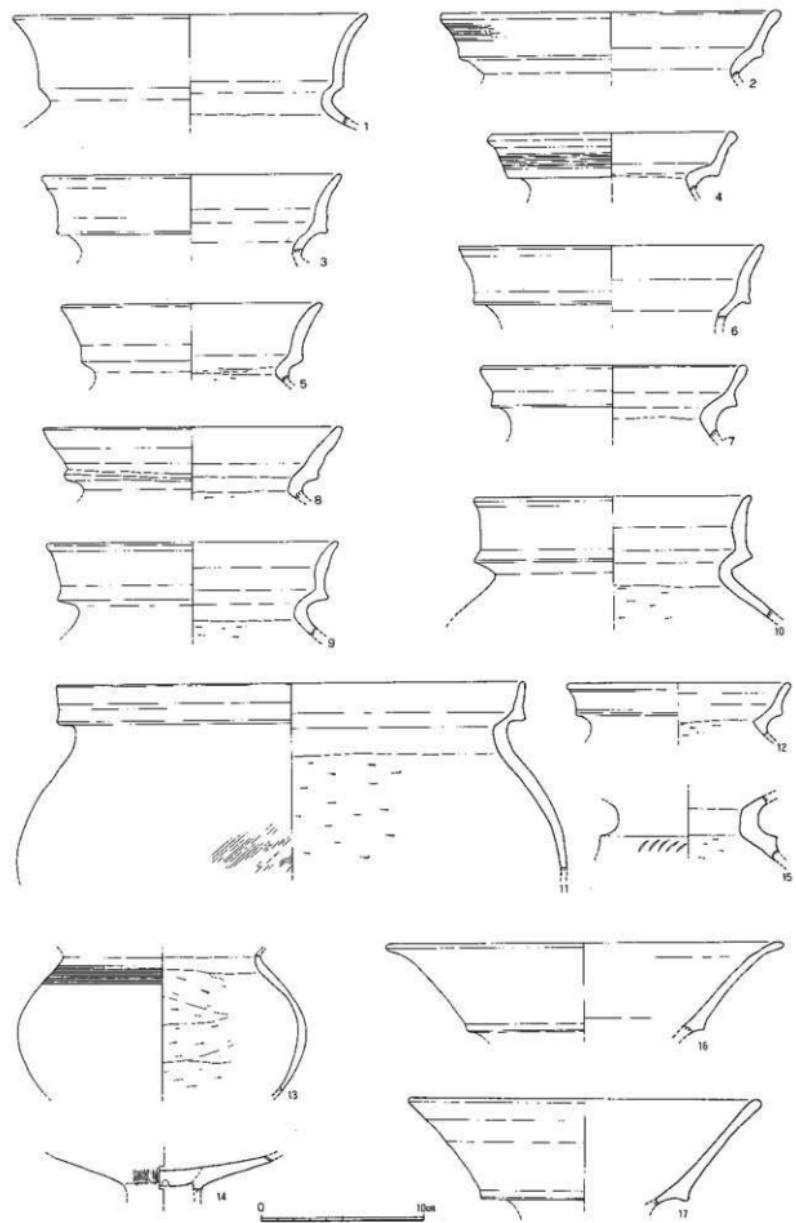
加工段25出土遺物（第314図、第315図18~21、第316図） 1は床面出土の複合口縁甕である。復元口径21.8cm、口縁の立ち上がりが4.7cmと長い。口縁は外反して開き、厚さが4cm~5.5cmと比較的薄手である。端部は先細りになり、先端は丸くおさめる。橙褐色を呈す。

2~21は覆土内出土の上器である。2は径の復元は不正確だが、口径21cm前後の複合口縁甕である。口縁の立ち上がりが比較的短い個体で、外面には風化で不明瞭だが擬凹線を施しているようだ。口縁外面は外湾し、端部はやや膨らんで丸くおさめる。3は復元口径18.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜の部分は下方につまみ出し、口縁は直立して立ち上がって中途で外方に折れる。端部に向かって次第に厚みを減じて、先端は丸くおさめる。橙褐色を呈す。4は復元口径15.4cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方に向かってまっすぐ立ち上がり、端部は外面が外方に折れて膨らむ。口縁部外面には擬凹線がみられる。暗橙褐色を呈す。

5は径の復元は不正確だが、復元口径16.1cmを測る甕である。厚めの口縁は外反して立ち上がり、端部は細くなっている丸くおさめる。橙褐色を呈す。6は復元口径18.5cmを測る複合口縁甕である。口縁は中途で折れ曲がって外方に開き、端部に向かっては細くなっている先端は丸くおさめる。橙褐色を呈す。7は復元口径16.4cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、口縁外面は大きく外湾する。端部は膨らんで丸くおさめている。8は復元口径18.5cmを測る複合口縁甕である。全体的に分厚で、特に複合口縁部の稜付近は直線を呈していない。口縁部は外方に開いて立ち上がり、外面はヨコナデにより凹凸が見られる。口縁端部は丸くおさめる。

9は復元口径18.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横に突出し、口縁は外反気味に立ち上がるが、さほど外方には開かない。内面は中途で折れて開き、端部に至る。口縁端部はわずかに外方に折れている。淡橙褐色を呈す。10は復元口径17.1cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁は外反気味にはほぼ直立する。ただ内面は中途で折れ曲がって端部にいたる。口縁端部はわずかに外方に折れており、先端は丸くおさめる。淡橙褐色を呈す。

11は復元口径28.8cmを測る大形の甕である。薄手の口縁はほぼ直立して立ち上がり、端部に向かっては次第に幅を減じ、先端は丸くおさめている。淡橙褐色を呈す。12は復元口径13.9cmを測る複合口縁甕である。口縁の立ち上がりは2cmと短く、外面は外湾する。端部は丸くおさめ、白っぽい淡褐色を呈す。13は甕の胸部である。器壁が2.5mm~5mmと薄くて、外面の頸部下辺にはヨコハケ

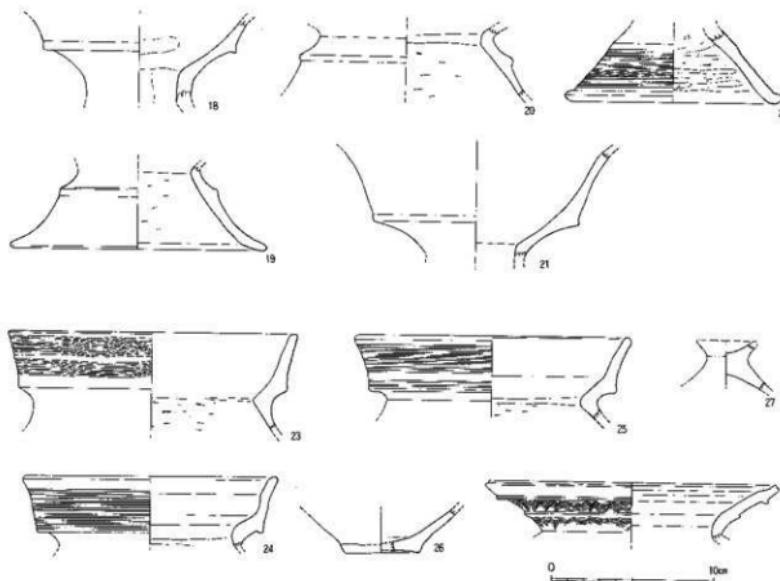


第314図 柳遺跡加工段25出土遺物実測図(1) S=1/3 (1…床面、2~17…覆土)

が見られる。復元胴径が17.8cm、比較的偏平な胴部形態となりそうである。

14は高坏である。坏部の底には円盤を充填するタイプで、底の下面の中心には小孔がみられる。脚柱部の接続部付近の径が4.6cm、外面にはハケメが見られる。淡褐色を呈す。15は鼓形器台の筒部である。器壁は1cm以上で厚く、筒部径8.5cmを測る。脚台部の上部外面には尖った工具で施文したと考えられる爪形の文様がめぐる。暗褐色を呈す。16は不正確な径復元だが、復元口径24.5cm前後の鼓形器台受け部である。受け部が外方に伸びて口縁付近でやや折れ曲がってさらに開き、丸くおさめる端部に至る。17は復元口径21.8cmの鼓形器台受け部である。受け部稜は斜め下に突き出し、受け部は外方にほぼまっすぐ伸びる。端部に向けては次第に膨らんで、先端は丸くおさめている。黄褐色を呈す。

18は鼓形器台の筒部から受け部にかけての破片である。筒部は器壁が1cmと厚く、径は6.4cmを測る。受け部の稜は斜め下に引き出している。19は鼓形器台の脚台部である。復元底径15.9cm、筒部径は7.5cmを測る。脚台部は「ハ」字状に下りて、幅付近でさらに外方に開き、端部は丸くおさめている。20は鼓形器台の筒部から脚台部の破片で、筒部が短いタイプである。復元筒径は10.1cm、淡褐色を呈す。21は鼓形器台の筒部から受け部にかけてである。筒部径がおよそ6cm程度、受け部は高めに伸びており、径の割りに高さのあるタイプである。22は器台の脚部であろう。脚台部と筒部の境はわずかに角度を変えるのみで、一般例に比べて不明瞭である。脚部は「ハ」字状に開いて、端部は外方につまみ出しており、下端には面がみられる。復元底径は13.5cm、脚部外面には擬凹線



第315図 柳遺跡加工段25出土遺物実測図(2) S=1/3 (18~21…覆土、23~28…加工段25下方)

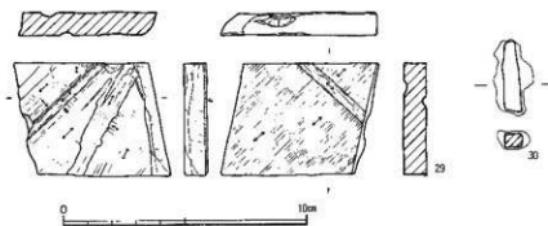
を施している。内面はヘラケズリだが、一部ヘラミガキを施している部分がある。

第316図29は加工段25の覆土内出土、黒色の緻密な堆積岩の石製品である。現状では $5.5\text{cm} \times 4.5\text{cm}$ 、厚さ1cmの平行四辺形を呈している。表裏両面ともに磨かれて平坦になっており、擦り切りによる溝が3条認められる。うち明瞭な表裏の2条の溝は、僅かにずれているがほぼ同位置、同角度で、両側からの擦り切りであったと推測される。側面は切断されたらしく、そのうち2面は擦り切り後断ち切られたことが確認できる。何らかの石製品の製作途上品と見るべきだろう。30は覆土内出土の鉄器である。現状で長さ2.8cmで断面は $7\text{mm} \times 5\text{mm}$ の長方形を呈す。何らかの鉄製品の基部分だろうか。

加工段25の時期は、床面出土の上器1から塩津3期と考える。他の覆土出土の土器を見ると2、4などが古い特徴を、14などが新しい特徴を持つが、その他の大部分は同様の時期の特徴を持っており、問題ないであろう。

加工段25下方出土遺物（第315図23～28） 23～28は加工段25の下方から出土した遺物である。出土位置を明確にはおさえられないため明言は出来ないが、加工段25'に関わる遺物かも知れない。23は復元口径17.8cmを測る複合口縁甕である。口縁はやや外方に向かってまっすぐ立ち上がり、外面には擬回線を施している。擬凹線は少なくとも2回に分けて施されており、直線にならずやくねっている。口縁部から頸部にかけての内面は平坦面を明瞭に持たず、頸部との境は「く」字状の屈曲する。24は復原口径15.8cmの、口縁外面に擬回線を施す甕である。複合口縁部の稜部分は下方に突出し、口縁はあまり外反せずに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。25は復元口径17.1cmを測る複合口縁甕である。口縁はわずかに外反して立ち上がり、外面には擬回線を施す。口縁端部は丸くおさめる。23、25は白っぽい淡褐色を呈す。26は甕または壺の底部である。復元底径4.8cmの明瞭な平底である。27は蓋として円化したが、低脚环の可能性もある。以上の土器は、加工段25出土の土器に比べて古い時期のものがまとまっている。加工段25の下方に存在する別の遺構、たとえば加工段25'に伴うもの可能性が高い。その時期は塩津1期～2期である。

28はやはり加工段25の下方から出土した須恵器である。壺の口縁部で、頸部は頸部から屈曲して開く。外面には突帯で区画された上下2段に櫛描波状文を施す。頸部と口縁部の境には突帯を設け、口縁端部には面を設けて1条の凹線を入れている。復元口径18.1を測る。5世紀台の比較的古い須恵器であろう。この遺物は他に同時期のものは全くないため、混入と考えている。下方にこの時期に近い竪穴住居跡（S III）もあり、その関連かも知れない。

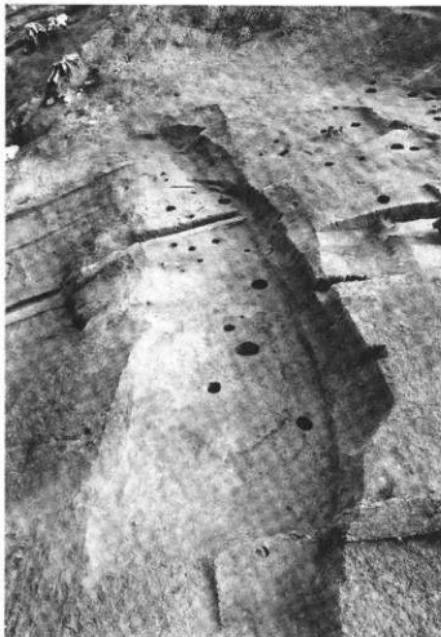


第316図 柳遺跡加工段25出土遺物実測図(3) S=1/2 (29, 30…覆土)

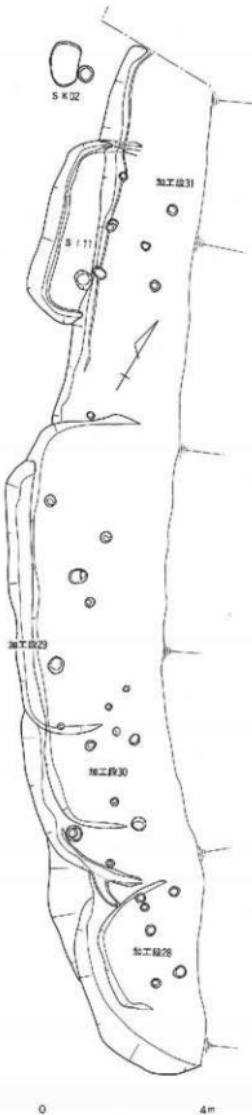
加工段28・加工段29・加工段30・加工段31・S I 11・S K 02の配置（第317図）

柳遺跡東斜面北半の谷部は、斜面の中腹以下になるとあまり弧状にくはまず、等高線のラインが直線的になる。こうした地形条件に合わせてか、標高31m付近の谷部では加工段がほぼ直線状に並んで検出された。床面がほぼ同一平面なので、前述した加工段6～10と同様、ひとつの大きな加工段のように見えるが、実際は壁の切りあいや土層観察による床面の切り合ひが認められ、少なくとも5つの遺構が重なり合っている。

5つの遺構の内訳は加工段が4、竪穴住居跡が1で、加工段は南から順に加工段28～加工段31と名づけ、竪穴住居跡はS I 11と名づけた。加工段28は最も南側で検出された加工段で、北側を加工段29によって切られている。加工段29と加工段30はほぼ同位置で重なって検出された。加工段29は長大な遺構で加工段30がその範囲内でおさまる形で重なっており、加工段30の床面が加工段29の覆土の上に続いて検出されている。よって加工



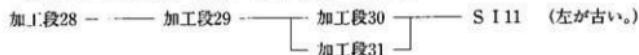
加工段28・29・30（北から）



第317図 加工段28、29、30、31、
S I 11、S K 02配置図 S = 1/120

段29が新しいことがわかる。加工段31は加工段29の北側に検出された。加工段31の床面が加工段30の覆土の上に続いて伸びており、加工段29の方が古い。S I 11は加工段31の斜面上方側（西側）を切って作られており、壁が加工段31の覆土を切り、床面も加工段31の覆土の上に続いていくことから、S I 11が新しい。S K 02はS I 11の北側に隣接して検出された。

以上のような切り合い関係から、各構造の前後関係を整理すると以下のようになる。



加工段28 (第318図)

東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に連なる遺構群のうち、南端にあたる加工段で、加工段25の下方になる。加工段の南端は、壁が廻り込んで収束するためつかむことが出来たが、北側は加工段29と重なっているため明らかには出来なかった。加工段29との前後関係は、土層断面等では両者を縦断する適当な箇所に観察用ベルトを設けていなかったため、明示できていない。ただ加工段28の床面が検出される以前の高さ（覆土内）で加工段29の南端の壁の肩を検出できたことから、加工段28がある程度埋まってから（埋めてから）加工段29の壁が切り込まれたことになり、加工段28が新しいことがわかる。

さて加工段28の長さは、検出時の残存部分で約5m、幅も斜面下方側が流出していく不明だが残存部で2.8mを測る。壁の内側には長さ2.8m、深さ15cm程の不定形の段が検出されたが、性格は不明である。また壁際から約2.5m離れた部分から、径およそ60cmほどの不正円形に焼けて赤変した焼上面が認められた。

床面からは、柱穴様のビットが6穴検出されたが、掘立柱建物跡を復元できるような明確な規則的配置はうかがえない。ただ、これらのビットの中には、深さが40cm以上のしっかりしたものも含まれており、何らかの建物が存在した可能性は高い。

加工段28出土遺物 (第319図) 1～7は覆土内出土の土器である。1は復元口径17.2cmを測る壺である。複合口縁部の稜部分はわずかに下方に垂下し、口縁は外方に向かって立ち上がる。口縁外面には擬凹線を施すが、上半は不明瞭であり、なで消しているかも知れない。口縁外面は外湾し、端部は膨らんで丸くおさめる。橙褐色を呈す。2は頸部が若干長くなりそうであり、壺であろうか。複合口縁部の稜部分は下方に垂下し、口縁は外方に立ち上がる。口縁部外面には下半に擬凹線、上半には竹管状の円形原体が押捺される。竹管文は2段に、上下が互い違いの位置に施されるようである。口縁端部は欠損しているが、口径は15cm前後になるだろう。

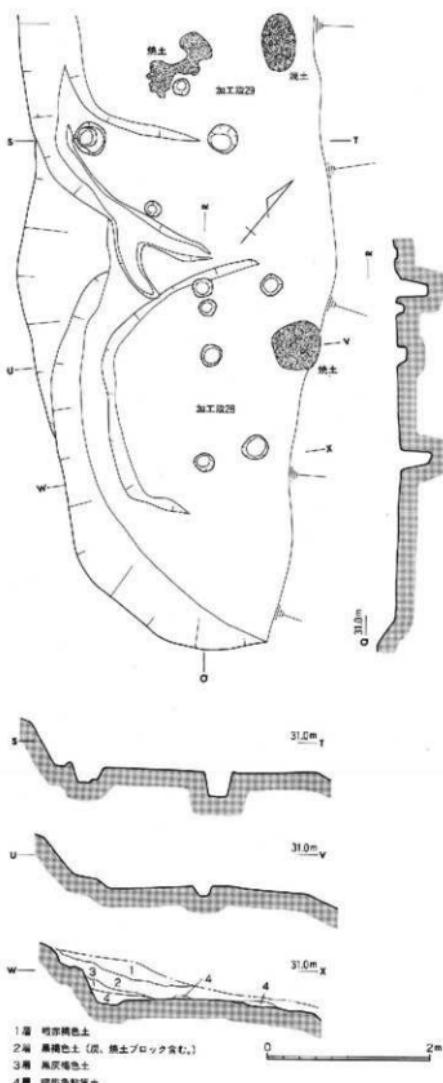
3は鼓形器台である。器面が風化しており、調整の詳細は不明で、天地は不明確だが脚台部として凶化した。復元底径15.4cm、脚台部の高さ4.4cm、筒部が細く長くなるタイプであろう。脚部外面には擬凹線を施し、外湾している。脚端は外面に向かって突き出すように膨らみ、先端にはやや膨らんだ面が見られる。4も鼓形器台で、3と同様天地は不明瞭だが、内面は丁寧な2次的調整が認められるようなので、受け部とした。やはり筒部が細長いタイプと考えられ、受け部外面には擬凹線が見られる。5は復元口径16.3cm、受け部の幅(高さ)3.1cm、筒部径7.4cmと、受け部の幅が狭い割に筒部の径が大きい感のある器台である。内面の上半はヘラケズリ後ヘラミガキらしき調整、下半はヘラケズリが見られる。受け部外面は外湾するが擬凹線は見られない。暗褐色を呈す。6は鼓

形器台の筒部である。筒部径が4.6cm、筒部高さが7.5cm以上となる細長い筒部である。橙褐色を呈す。7は高杯の杯部であろうか。杯部の中途に段を設け、そこから上方は大きく外反して立ち上がる。口縁端部はやや外側に向かって肥厚し、上端には微かに面を設けている。復元口径20.4cm、灰褐色を呈す。

8は床面から出土した石器で、磨製石斧の基部であろう。刀部側は欠損しており、長さ12.1cm以上、幅7.1cm、厚さ4.4cmを測る。基部の先端には面があり、敲打のためかやすり減っている。またこの端面から下方に向けて剝離した面が数面認められ、この面が上から強く叩かれた可能性がある。側面にはすり減ったり敲打された部分が數カ所認められ、何らかの柄等に装着された痕跡かも知れない。最終的には石斧としてではなく、他の用途（例えばたがねや楔のような上方から敲打する作業）に転用された可能性がある。

9は黒灰色の緻密な石材の性格不明の石製品である。少なくとも5片（原面ではない破損面が認められることから、これ以上に破片が存在していたことは間違いない。）に割れて出土し、しかも離れた位置から出土したので、使用時あるいは製作時に破損して破棄されたものだろう。現況で長さ15.5cm以上、幅4.1cm、厚さ1.8cmの短冊状を呈しており、四面を磨いている。短冊状の素材をさらに切断して何らかの石器を作成するためのものである可能性もあるが、図右面の下方に斜め方向に偏曲するラインが見られ、何らかの刃部を形成していたかも知れない。

加工段28の時期は、床面から土器



第318図 柳遺跡加工段28実測図 S=1/60

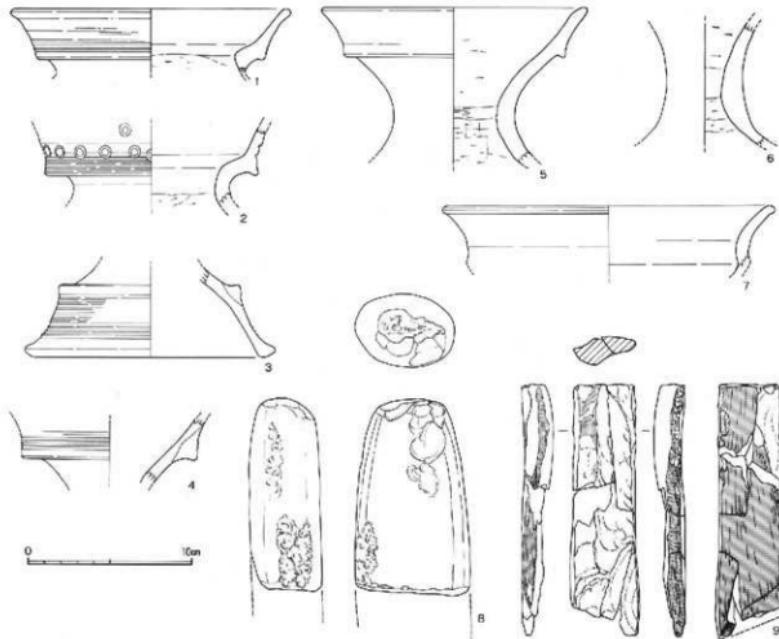
が出土していないため、覆土出土の土器から推察することになる。覆土の土器は時期的にはある程度まとまっており、およそ造構の時期と考えて大過ないであろう。甕1などは塩津2期の特徴を持つが、器台は1期の特徴を持つものがまとまっている。ある程度時期幅を取って塩津1期～2期と考えたい。

加工段29（第244図、第320図）

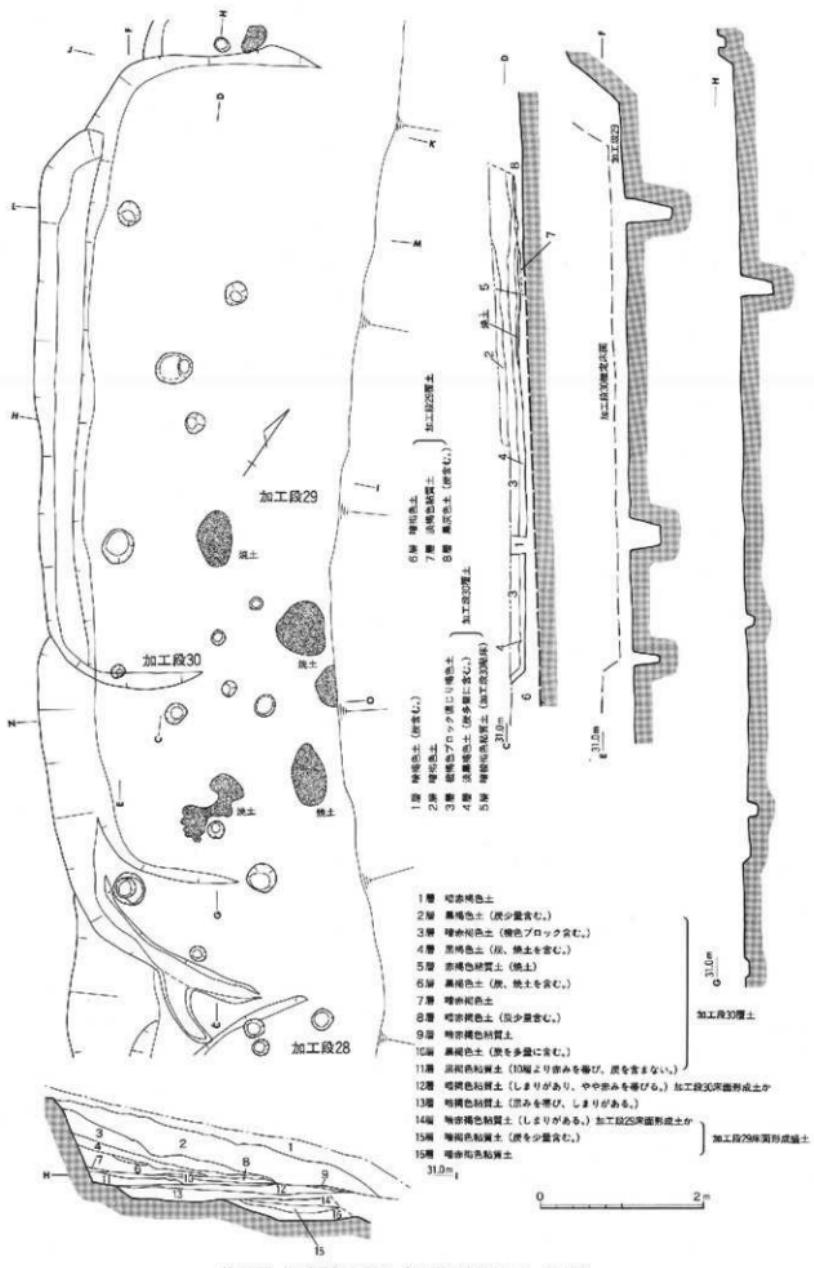
東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に達する造構群のうち、加工段28の北、加工段31の南側にあたり、それぞれと重なり合っている。またこの加工段の背後の斜面側を若干削り込んで加工段30も重なって作られている。各造構との前後関係は次の通りである。

まず加工段28とは、前述したとおり加工段29の壁が加工段28の覆土から切り込んでいることを平面的に確認しており、加工段29が新しい。加工段30は加工段29より高い位置に床面があり、加工段29の覆土の上に床面が続いている（第320図H-I断面）上、壁が同様に加工段29の覆土を切っている（第320図C-D断面）ことから、明らかに加工段29が古い。加工段31も加工段30と同様に床面が加工段29より高い位置にあり、その覆土の上に床面が続く（第321図J-K断面）ことから加工段29が古いことがわかった。

加工段29は北側を新しい加工段で切られているものの、床面の位置が若干低いこともあって壁を



第319図 柳遺跡加工段28出土遺物実測図 S=1/3 (8…床面、その他…覆土)



第320図 柳遺跡加工段29・加工段30実測図 S = 1 / 60

確認でき、床面の長さが確認できる数少ない加工段である。ただ南側は東側に廻り込む壁が2つ確認され、拡張もしくは縮小があった可能性がある。床面の長さは短い壁でとると10.3m、長い壁をとると11.5mとなり、いずれにしてもかなり長大な加工段となる。幅は斜面下方側が流出して不明だが、検出時の残存幅が2.9m~3.4mを測る。背後の壁はほぼ直線状に削られており、全体の形態は隅に丸みのある長方形だったと考えられる。

床面からは、大小合わせて15穴の柱穴様ピットが検出されたが、掘立柱建物を組めるような整然とした配列は認められない。ただなかには50cmを超える深さのピットもあり、柱が立っていたものもあると考えるのが自然であろう。整然とした柱組のものではなくとも、何らかの建物があった可能性は高い。なお、10cmほど上に床面のある加工段30に伴うピットが混在している可能性もある。

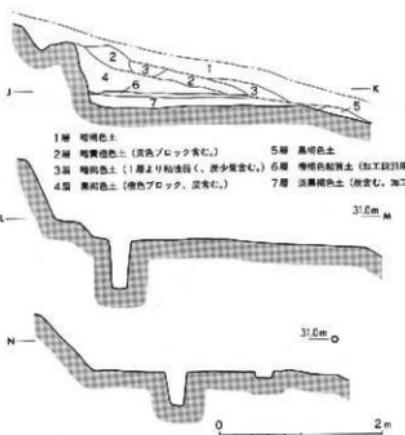
加工段の南半に集中して、焼けて床が赤変した焼土面が都合5ヶ所で検出されている。中心の空閑部をとりまくように焼土面が分布していることに意味があるかどうかは不明だが、このあたりで何らかの火を使う作業が行われたものかも知れない。

加工段29出土遺物(第322図) 1はピット内より出土した甕である。小片のため径の復元は不正確だが、復元口径20cm前後となる。複合口縁部の稜部分はわずかに下方に伸び、口縁は外方に向けて立ち上がる。口縁の外面には擬凹線が施され、外湾している。口縁端は膨らみ、上端には平坦面を設けている。頸部のくびれが小さい分、頸部内側の平坦面も不明瞭となっている。

2~9は覆土内から出土した土器である。2は復元口径18.0cmを測る複合口縁甕である。やや厚めのつくりで、口縁はやや外方に立ち上がる。口縁外面には擬凹線を施し、端部はやや薄くなつて丸くおさめる。口縁部から頸部にかけての内面は、明瞭な稜を持たずに、胴部との境で「く」字状に屈曲する。白っぽい淡褐色を呈す。3は復元口径22.8cmを測る甕である。頸部から口縁部にかけての厚みが0.8cm~1.4cmと厚手である。複合口縁部の稜部分は斜め下に拡張し、口縁はやや外方に立ち上がる。口縁外面には擬凹線を施し、外湾していく、端部は膨らんで丸くおさめている。淡橙褐色を呈す。4は復元口径19.8cmを測る複合口縁の甕である。頸部が内側によくくびれ、厚さが1.1mm~1.4mmと厚い。口縁は中途で折れ曲がるように外反し、端部はやや細くなつて丸くおさめる。口縁外面には擬凹線を施している。

5は復元口径17.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜部分はやや下方に伸び、口縁はわずかに外方に向けて立ち上がる。口縁外面は外湾して擬凹線を施し、端部は丸くおさめる。淡褐色を呈す。6は復元口径15.2cmを測る複合口縁の甕である。口縁はわずかに外反して立ち上がり、外面には擬凹線を施す。口縁部の厚さが5mm前後と薄めで、口縁端は丸くおさめる。頸部は内側によくくびれており、外面には刺突文が見られる。

7は復元口径15.2cmを測る甕である。複合口縁部の稜部分はやや下方に伸び、口縁はわずかに外方に向けて立ち上がる。口縁外面は外湾して擬凹線を施し、端部は丸くおさめる。淡褐色を呈す。8は復元口径15.2cmを測る複合口縁の甕である。口縁はわずかに外反して立ち上がり、外面には擬凹線を施す。口縁部の厚さが5mm前後と薄めで、口縁端は丸くおさめる。頸部は内側によくくびれており、外面には刺突文が見られる。

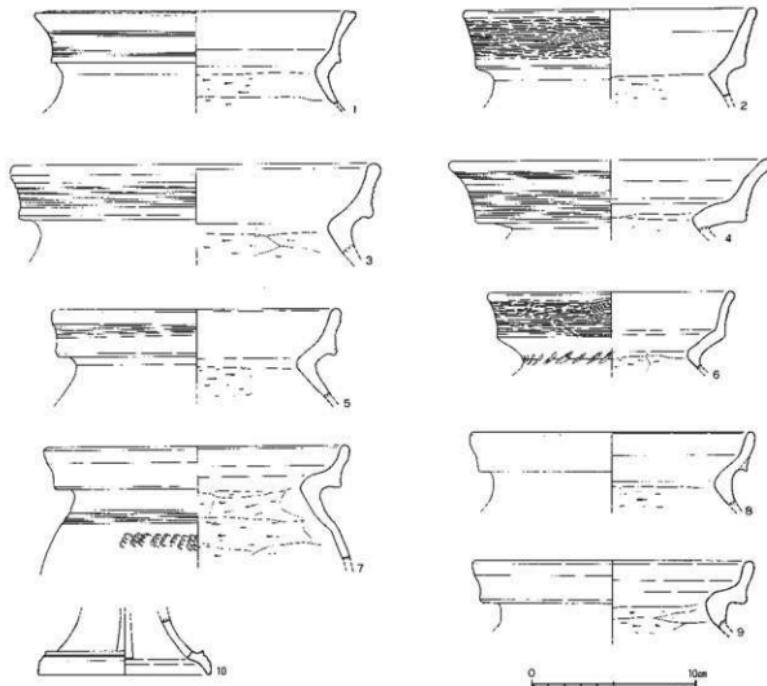


第321図 柳遺跡加工段29・加工段30・加工段31断面図 S=1/60

刺突の内側には縦方向の筋が見られるが、原体は不明である。橙褐色を呈す。

7は復元口径18.7cmを測る複合口縁の甕である。口縁はわずかに外方に向かって立ち上がり、端部は丸くおさめている。口縁外面は下半はヨコナデでやや外済しているが、上半は内反気味に立ち上がる。擬凹線は見られない。頸部は厚さ1cmと厚めで、頸部下方外面には平行沈線、その下には丸みのある「W」字状の刺突を施している。原体は貝であろうか？淡褐色を呈す。8も口縁外面に擬凹線が見られない甕である。複合口縁部の稜部分はやや下方に垂下し、口縁の立ち上がりは7と似て、上半はわずかながら内反気味である。黄褐色を呈す。9は復元口径17.3cmの外面に擬凹線を施さない複合口縁の甕である。口径が違う以外は、形態的には7とほとんど同じ特徴を持っている。淡褐色を呈す。

10は加工段29の下方流土から出土した須恵器高坏である。復元底径10.6cm、底端は下方に折れ、その上部には突帯を設けている。スカシは4方向に復元して図示したが、3方向の可能性もある。厚さが5mm前後と薄いつくりである。5世紀代の須恵器であろう。加工段29の近辺にはS111や下方の加工段33など、この期と推測される遺構も検出されており、その関連遺物であろう。

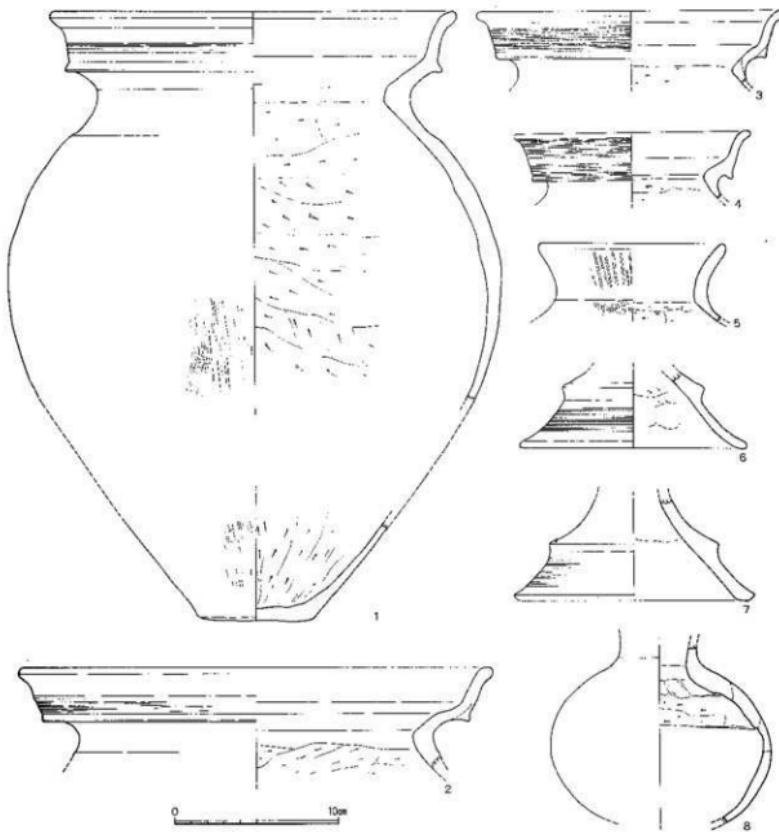


第322図 柳遺跡加工段29出土遺物実測図 S=1/3 (1…ピット内、2～9…覆土、10…加工段29下方)

加工段29の時期はピット内出土の遺物から埴津2期と考えられる。覆土内出土遺物も、古層のものも混じるが多くの矛盾しない遺物である。口縁外面に擬凹線の見られない甕3点も含まれるが、これも当該期で問題ないと考える。

加工段30（第320図、第321図）

東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に連なる造構群のうち、加工段29とその大部分を重なり合いながら、加工段29の背後の斜面を若干削りだして形成された加工段である。床面が加工段29の床よりも10cm～15cmばかり高い位置に形成され、加工段29の覆土の上に統一している。よって加工段29よりも新しいことは明らかで、背後の斜面を削った上砂で加工段29を埋めて床面を形成したのかもしれない。



第323図 柳遺跡加工段30・S+11出土遺物実測図
S=1/3 (1～3…加工段30床面、4～7…加工段30覆土、8…S+11覆土)

加工段30は、その南端は加工段29の覆土の中に壁の肩を確認したため明確であるが、北端は覆土のなかで肩を確認していない。しかし加工段29の背後を削り込んだ壁が既に東側に廻り込み始めており、それで北端もほぼ復元可能である。規模は長さが床面で6.5m程になるようで、背後の壁はほぼ直線状に伸びていることから、隅の丸い長方形状を呈していたものと思われる。壁は60°以上の急角度で、その高さも1.1mになる。

加工段29と重なる部分では、平面的に床面を検出できなかったため、柱穴等の施設の有無は明かでない。ただ加工段29の床面検出のピットのうち、壁際に近い2穴は、その位置関係から加工段30に伴うもの可能性もある。

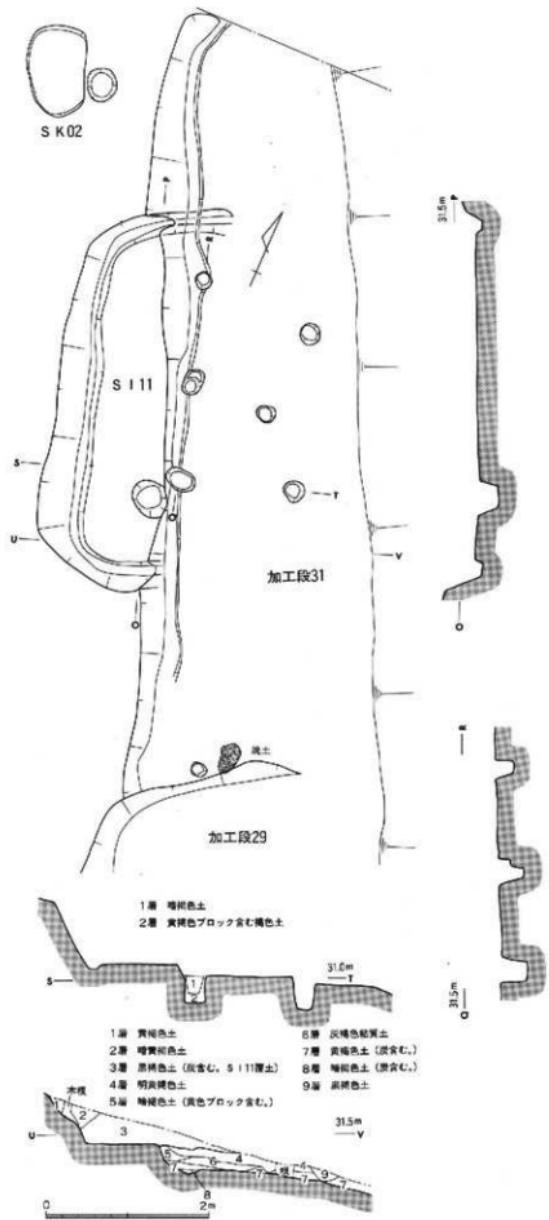
加工段30出土遺物（第323図） 1～3が床面出土の土器である。1は直接接合はしないものの、底部と上半部が同一個体と判断される壺で、ほぼ全形を知ることのできる数少ない個体である。復元口径25.0cm、胴部最大径約30cm、底径7.0cm、器高は37～38cm程度に復元できる。胴部の形態は、肩の張りは顕著ではなく、最大径は中央よりも上寄りに入る。底部は明瞭な平底を呈す。複合口縁部の稜は斜め下方向に突出し、口縁はやや外方にまっすぐ立ち上がった後、端部付近で折れ曲がって開く。口縁外面の一部には擬凹線がみられるが、あるいは擬凹線が見られない部分はなで消しているかも知れない。先端は丸くおさめている。淡黄褐色を呈す。2は復元口径29.2cmを測る大形の壺である。複合口縁部の稜は斜め下方向に若干伸び、口縁は外方にまっすぐ立ち上がって端部付近で外方に折れて開く。口縁外面の一部には擬凹線がみられ、その他の部分はなで消している可能性がある。淡茶褐色を呈す。3は口径19.0cmを測る複合口縁の壺である。口縁はやや外方に向かってまっすぐ立ち上がり、口縁端部近くで外方に折れて開く。外面には擬凹線を施し、口縁端部は丸くおさめる。

4～7は覆土内出土の土器である。4は復元口径14.5cmを測る壺である。複合口縁部の稜部分は下方に垂下し、口縁部はやや外方にまっすぐ立ち上がって、端部付近で外方に折れる。外面には浅い擬凹線を施し、口縁端部は丸くおさめる。橙褐色を呈す。5は口径11.5cmの単純口縁の壺である。口頸部はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面には縱方向のヘラミガキが見られる。灰褐色を呈す。6は鼓形器台の脚台である。復元口径14.0cm、脚は「ハ」字状に開いて下り、端部は丸くおさめる。外面には擬凹線を施している。7は鼓形器台である。器面が風化し調整が不明瞭で、天地も逆転する可能性がある。復元底径14.8cm、筒部が細くて長いタイプと考えられ、外面には擬凹線が施される。脚端は尖り気味で、下端には面が設けられる。

床面出土の3点の壺は基本的に同様の特徴を持つ。つまり口縁は外方にほぼまっすぐ立ち上がり、端部近くで外方に折れる。外面には擬凹線を施すがなで消しているものもあるようだ。覆土出土の壺4も同様である。これらの特徴は、口縁の外面が外湾して端部が膨らみ気味になる塩津2期の壺と、口縁全体が外反して端部は細り気味に丸くおさめる塩津3期の壺の中間的な特徴を有すと言えるかも知れない。覆土出土の器台はやや古相だが、加工段30の時期は塩津3期でも古い段階と位置づけたい。

加工段31（第324図）

東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に連なる造構群のうち、最も北側で検出された加工段である。調査区の北端でS I 08の下方にあたる。南側を加工段29と重なり合い、背後の斜面を切ってS I 11



第324図 柳遺跡加工段31・S111・SK02実測図 S=1/60

が重なる。切り合う造構との前後関係は、まず加工段29とは加工段31の床面が15cm~20cm高い位置にあり、加工段29の覆土の上に床面が続いている（第321図J-K断面）ことから加工段31が新しい。S111は加工段31よりも25cmほど高い位置に床面を形成しており、加工段31の覆土の上に床面が続く（第324図U-V断面）うえ、壁も加工段31の覆土を切り込んで検出されていることから、明らかに加工段31が古い。

加工段31は、背後の壁がほぼまっすぐ伸びる長大な加工段である。規模は、南側が加工段29と重なり、覆土中の壁の立ち上がりを確認できていないため明らかでない。ただ検出時の残存長で9.7mと長い。幅は斜面下方側（東側）が流出しているため不明だが、残存部で2.8mを測る。壁際には底面の幅が10cm~15cmの溝が検出されている。加工段29と重なる部分では、橙褐色粘質土を貼って床面を形成している（第321図J-K断面6層）。

床面からは、加工段の中央部付近に集中して柱穴様のピットが検出された。ただ壁際の3穴は、壁や溝と重なっており、その部分で

重なって検出されているS I 11に伴うビットの可能性がある。その他のビットも同様かも知れない。そうだとすれば、この加工段はほとんど柱穴のない造構となる。床面の南端、加工段29との境付近には、焼けて赤変した焼土面が認められた。

加工段31出土遺物（第325図） 床面から出土した2点の土器片を図化している。1は口縁端を欠くが、復元口径が14cm前後になると考えられる複合口縁甕である。口縁はやや外反気味に立ち上がるようで、外面に擬凹線は認められない。頸部付近の厚さが1cmと厚めだが口縁は4mm前後と決して厚くはない。2は小片で後の復元が不正確ではあるが、口径が20cmを超える甕である。複合口縁部の綾はわずかに横方向に引き出し、外面には擬凹線を施す。器壁の厚さが5mm以下と比較的薄い。

これらの土器は、いずれも口縁端部を欠くため時期決定がしにくい資料である。ただあえて限定すれば、2は口縁外面に擬凹線を持つが、かなり器壁が薄く、口縁が外反気味に立ち上がる。こうした特徴は同じ擬凹線を持つものでも新しい時期の特徴といえ、塩津3期と平行しそうである。1についてもその時期と考えて矛盾はない。

S I 11（第324図）

東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に連なる造構群のなかで、北端の加工段31と重なって検出された竪穴住居跡である。加工段31の壁と覆土を切り込んで形成されており、明らかにS I 11が新しい。造構の全容は不明だが、南北方向の長さが床面で4.15mで、隅がやや丸い方形を呈すようである。その規模と形態、壁の直下に壁体溝らしき溝がめぐることなどから竪穴住居跡と判断した。

柱穴は明らかにS I 11に伴うと判断されるのは南端の1穴だけだが、加工段31で検出されたビットの中にS I 11対応のビットが含まれると考えられる。特に北端のビットはその位置から主柱穴となる可能性が高い。そうであれば主柱穴間は2.6m、対応する残りの2穴は斜面下方側で流出したと考えて矛盾はない。

S I 11出土遺物（第323図8） 覆土から上器が1点出土している。胴径が13.5cmを測るほぼ球形の胴部に、径4.8cmほどの口頭部が取り付く壺である。胴部内面の上半はヘラケズリ、下半はなでている。赤褐色を呈す。あまり類品がなく、時期の判別がしがたいが、色調や胎土の特徴から古墳時代中期頃のものではないかと思われる。

S K 02（第324図）

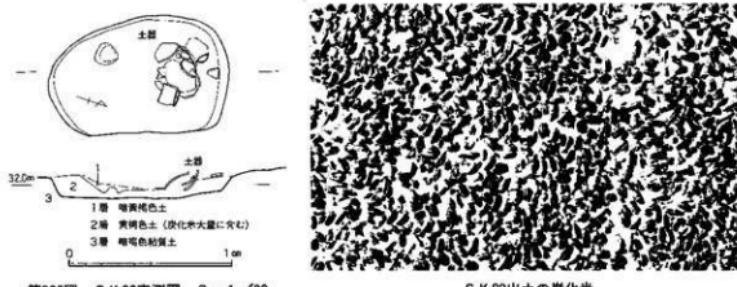
東斜面北半の谷状地形の標高31m付近に連なる造構群のなかで、S I 11の北西側、加工段31の上方の調査区北端付近で検出された土坑である。長さ1.14m、幅は斜面下方側が流出しており不明だが、検出時の残存部で0.74mの長楕円形を呈す。深さは検出面から10cm前後と浅いが、流出を考えれば本来はもっと深かったと推測される。



第325図 柳遺跡加工段31出土遺物実測図 S=1/3 (1, 2…床面)

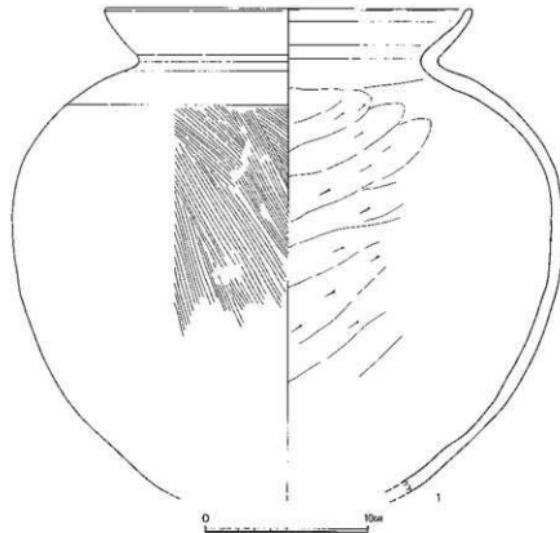
土坑の北半、底面からおよそ5cmほど上方で、土師質の甕が潰れたような状態でまとめて出土した。本来的な上坑の肩の高さが不明だけに確定は出来ないが、かなり底面に近い位置であることや、破片が重なり合って流入した状況とは考えにくいことなどから、この土器はSK02中に納められていた可能性が高いと考えられる。

この土坑の覆土内には、多量の炭化米が含まれていた。摘出できた炭化米は総重量341.98gである。上方の流出を考慮すると、さらに多くの炭化米が含まれていたであろう。炭化米は、その出土状況から甕の中に納められていた可能性もある。炭化米は無作為に100個を測定したところ別表に示すとおり基本的に短粒で、ジャボニカ種と考えられる^⑩。なお、出土炭化米の放射性炭素測定を行ったところ、BP1490年±100という結果を得ている(7.自然科学的分析参照)。



第326図 SK02実測図 S=1/30

SK02出土の炭化米



第327図 柳遺跡SK02出土遺物実測図 S=1/3

| 縦 | 横 | 厚み |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 0.471 | 0.268 | 0.185 | 0.481 | 0.294 | 0.181 | 0.472 | 0.293 | 0.189 | 0.49 | 0.27 | 0.19 |
| 0.471 | 0.271 | 0.194 | 0.447 | 0.286 | 0.192 | 0.509 | 0.279 | 0.2 | 0.45 | 0.238 | 0.18 |
| 0.482 | 0.272 | 0.194 | 0.517 | 0.281 | 0.21 | 0.445 | 0.271 | 0.179 | 0.469 | 0.259 | 0.19 |
| 0.48 | 0.268 | 0.19 | 0.452 | 0.259 | 0.19 | 0.518 | 0.255 | 0.165 | 0.49 | 0.299 | 0.2 |
| 0.511 | 0.293 | 0.229 | 0.48 | 0.321 | 0.202 | 0.461 | 0.26 | 0.172 | 0.411 | 0.283 | 0.19 |
| 0.523 | 0.281 | 0.209 | 0.48 | 0.26 | 0.231 | 0.449 | 0.272 | 0.212 | 0.497 | 0.269 | 0.19 |
| 0.452 | 0.29 | 0.21 | 0.469 | 0.262 | 0.216 | 0.458 | 0.265 | 0.185 | 0.47 | 0.273 | 0.171 |
| 0.5 | 0.28 | 0.186 | 0.489 | 0.318 | 0.2 | 0.451 | 0.265 | 0.18 | 0.412 | 0.25 | 0.19 |
| 0.492 | 0.293 | 0.184 | 0.456 | 0.281 | 0.2 | 0.479 | 0.276 | 0.2 | 0.435 | 0.27 | 0.171 |
| 0.465 | 0.311 | 0.198 | 0.478 | 0.27 | 0.185 | 0.389 | 0.249 | 0.166 | 0.46 | 0.265 | 0.153 |
| 0.5 | 0.278 | 0.189 | 0.5 | 0.288 | 0.189 | 0.404 | 0.282 | 0.166 | 0.439 | 0.271 | 0.189 |
| 0.46 | 0.25 | 0.17 | 0.509 | 0.271 | 0.19 | 0.441 | 0.256 | 0.182 | 0.449 | 0.22 | 0.15 |
| 0.449 | 0.289 | 0.193 | 0.419 | 0.252 | 0.189 | 0.462 | 0.268 | 0.185 | 0.46 | 0.261 | 0.172 |
| 0.449 | 0.262 | 0.209 | 0.442 | 0.292 | 0.202 | 0.485 | 0.273 | 0.165 | 0.45 | 0.249 | 0.179 |
| 0.475 | 0.295 | 0.19 | 0.469 | 0.238 | 0.159 | 0.466 | 0.284 | 0.218 | 0.462 | 0.261 | 0.175 |
| 0.48 | 0.259 | 0.2 | 0.489 | 0.308 | 0.189 | 0.432 | 0.242 | 0.2 | 0.442 | 0.269 | 0.161 |
| 0.478 | 0.3 | 0.24 | 0.445 | 0.282 | 0.18 | 0.45 | 0.252 | 0.155 | 0.488 | 0.279 | 0.192 |
| 0.48 | 0.282 | 0.23 | 0.459 | 0.275 | 0.196 | 0.5 | 0.268 | 0.2 | 0.42 | 0.28 | 0.166 |
| 0.48 | 0.278 | 0.17 | 0.47 | 0.3 | 0.191 | 0.465 | 0.269 | 0.185 | 0.465 | 0.24 | 0.13 |
| 0.42 | 0.258 | 0.2 | 0.478 | 0.272 | 0.172 | 0.48 | 0.272 | 0.18 | 0.441 | 0.27 | 0.165 |
| 0.481 | 0.268 | 0.18 | 0.448 | 0.32 | 0.235 | 0.4 | 0.23 | 0.17 | 0.448 | 0.25 | 0.169 |
| 0.439 | 0.248 | 0.16 | 0.481 | 0.26 | 0.17 | 0.421 | 0.258 | 0.186 | 0.455 | 0.279 | 0.178 |
| 0.499 | 0.28 | 0.189 | 0.509 | 0.296 | 0.2 | 0.414 | 0.255 | 0.167 | 0.479 | 0.25 | 0.171 |
| 0.459 | 0.279 | 0.22 | 0.451 | 0.261 | 0.18 | 0.445 | 0.251 | 0.18 | 0.43 | 0.268 | 0.169 |
| 0.489 | 0.29 | 0.21 | 0.492 | 0.271 | 0.2 | 0.412 | 0.251 | 0.17 | 0.463 | 0.281 | 0.189 |
| 0.39 | 0.281 | 0.188 | 0.518 | 0.319 | 0.2 | 0.49 | 0.282 | 0.18 | 0.47 | 0.3 | 0.187 |
| 0.43 | 0.27 | 0.201 | 0.488 | 0.438 | 0.19 | 0.419 | 0.272 | 0.207 | 0.455 | 0.27 | 0.177 |
| 0.462 | 0.271 | 0.19 | 0.492 | 0.302 | 0.189 | 0.496 | 0.285 | 0.191 | 0.466 | 0.261 | 0.2 |
| 0.46 | 0.28 | 0.22 | 0.492 | 0.28 | 0.198 | 0.419 | 0.271 | 0.202 | 0.491 | 0.281 | 0.199 |
| 0.448 | 0.278 | 0.215 | 0.447 | 0.276 | 0.18 | 0.486 | 0.288 | 0.215 | 0.41 | 0.25 | 0.17 |
| 0.47 | 0.27 | 0.212 | 0.423 | 0.28 | 0.19 | 0.47 | 0.287 | 0.199 | 0.498 | 0.285 | 0.189 |
| 0.49 | 0.22 | 0.148 | 0.485 | 0.3 | 0.21 | 0.5 | 0.342 | 0.209 | 0.41 | 0.245 | 0.2 |
| 0.452 | 0.278 | 0.19 | 0.481 | 0.282 | 0.175 | 0.482 | 0.3 | 0.212 | 0.47 | 0.25 | 0.153 |
| 0.47 | 0.241 | 0.195 | 0.448 | 0.259 | 0.182 | 0.498 | 0.342 | 0.211 | 0.245 | 0.265 | 0.191 |
| 0.408 | 0.261 | 0.185 | 0.499 | 0.298 | 0.195 | 0.501 | 0.258 | 0.185 | 0.495 | 0.293 | 0.2 |
| 0.458 | 0.288 | 0.212 | 0.449 | 0.218 | 0.145 | 0.461 | 0.265 | 0.186 | 0.421 | 0.245 | 0.189 |
| 0.5 | 0.307 | 0.22 | 0.482 | 0.27 | 0.177 | 0.448 | 0.278 | 0.22 | 0.45 | 0.28 | 0.21 |
| 0.48 | 0.3 | 0.213 | 0.511 | 0.265 | 0.197 | 0.476 | 0.255 | 0.189 | | | |
| 0.474 | 0.256 | 0.198 | 0.5 | 0.28 | 0.191 | 0.5 | 0.269 | 0.15 | | | |
| 0.499 | 0.296 | 0.2 | 0.488 | 0.261 | 0.195 | 0.479 | 0.273 | 0.2 | 平均 | | |
| 0.459 | 0.28 | 0.198 | 0.501 | 0.291 | 0.205 | 0.489 | 0.291 | 0.17 | 0.474 | 0.282 | 0.189 |

柳遺跡 SK02出土炭化米 計測表 (単位cm)

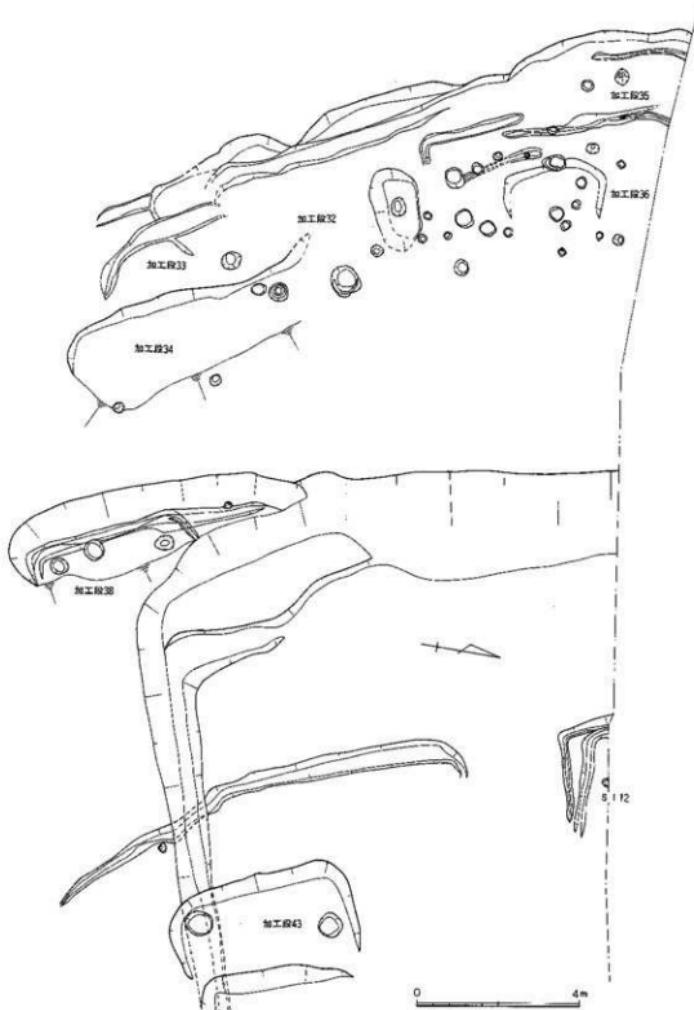
S K02から出土した上器は(第327図)、口径22.6cm、胴部最大径34.0cmを測る甌である。口径部が「く」字状に折れて開くいわゆる単純口縁の甌だが、頸部の折れの部分は屈曲はせず、丸みを持つて曲がっている。口縁部はわずかに内湾気味に立ち上がり、端部付近で若干内側に折れている。先端は丸く納めている。胴部は最大径が中央よりやや上方にある肩の張った形態で、底部は失われていて形態は不明である。胴部外面は斜め方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。

この土器の時期は、一般的に見ると古墳時代中期頃の特徴を持つものであるが、弥生時代後期末の近畿地方の影響を受けた土器と見ることもでき、特定が難しい。隣接するS I11は古墳時代中期前後、上方のS I08は弥生時代後期末と、周辺の遺構も双方の時期があり、どちらとも言えない。



第328図 柳遺跡東斜面下半の遺構配置図 S = 1/300

胸部のプロポーションはやや尖底氣味に下方に向かうように見え、弥生時代末を思わせるが肝心の底部がない。一方¹⁴C年代は5世紀と、古墳時代中期の年代が得られており、そちらの可能性が高いかも知れない。



第329図 加工段32・加工段33・加工段34・加工段35・加工段36・加工段38・加工段43・S 12配置図 S = 1 / 120

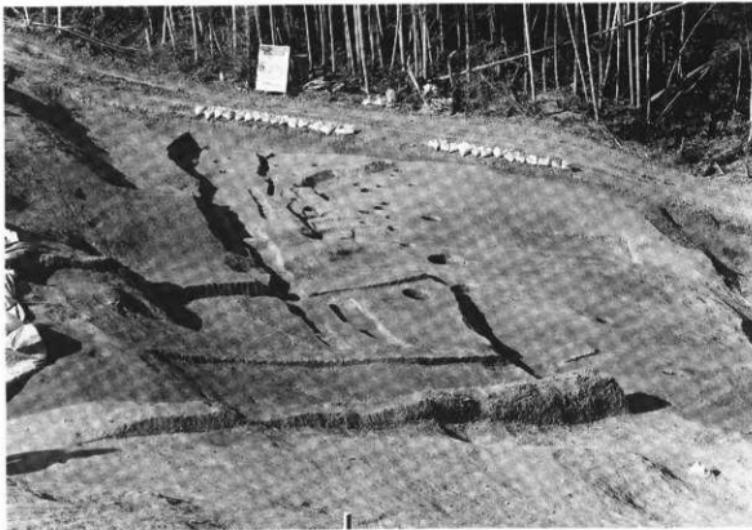
加工段32・加工段33・加工段34・加工段35・加工段36の配置（第330図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高27m～28m付近で造構が集中して重なり合って検出された。加工段の壁面が重なり合うだけでなく、床面には壁際に廻っていたと推測される幅の狭い溝も多く検出され、同じ場所で何度も建て替えや作り替えがあったことがうかがえる。これら全てに加工段として名称を付けるとあまりに複雑となるとともに、全体像が全くつかめない小規模な造構も多い。よってここでは明確な壁や比較的長く残存する溝によって区画されたおもだつた造構に加工段の名称を付けることとした。

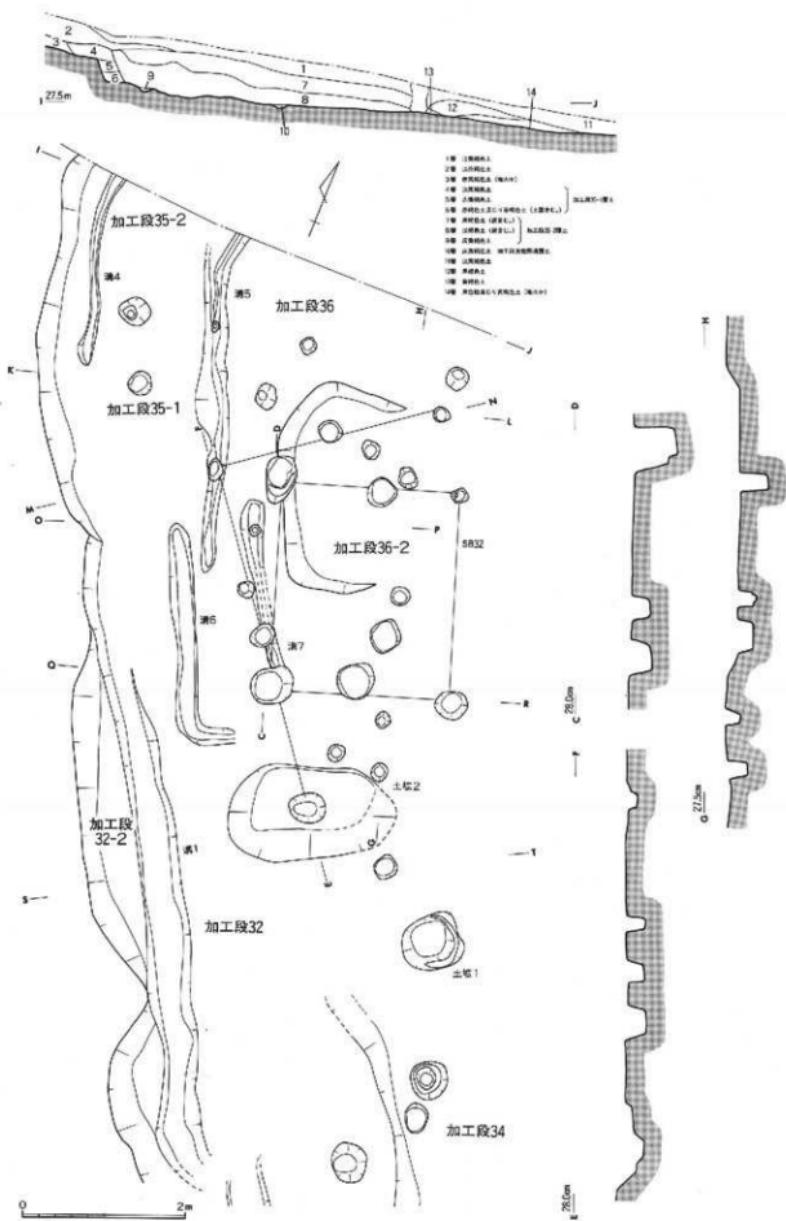
これらの造構群のほぼ中央で検出された壁と溝が長く残存している加工段を加工段32とし、その南側の溝で区画された造構を加工段33、さらにその一段下方で検出された造構を加工段34と呼ぶこととする。造構群の北側は特に壁と溝が重なり合っているが、加工段32の北側に引き続いて検出された加工段を加工段35、その一段下の長い溝で区画された造構を加工段36とした。溝や小規模な壁は、加工段35、36の枝番や溝番号で区別することとした。

加工段32（第329図、第330図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高27m～28m付近に連なる造構群のなかで、ほぼ中央で検出された比較的長い背後の壁と溝で区画された加工段である。壁は南側は自然に消滅しているものの廻り込んで収束する気配で、ほぼ端と見て良い。北側は隣接する加工段35の壁と切り合っており、端は不明である。検出時の残存長が7.8mで、壁はほぼまっすぐ伸びており、隅に丸みのある長方形の掘り込みであったと推測される。



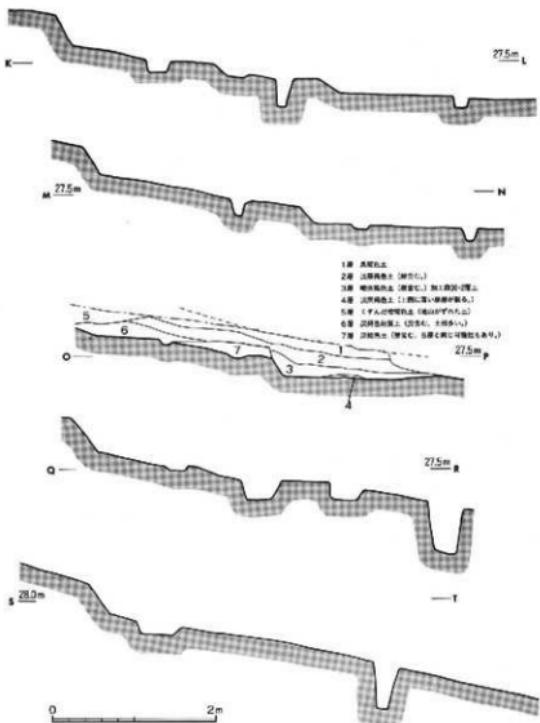
加工段32～加工段36全景 南から



第330図 柳遺跡加工段32・加工段35・加工段36実測図 S=1/60

壁際には底面の幅が30cm前後と比較的幅の広い溝（溝1）が設けられている。北側に向かっては自然に消滅しているが、本来は壁際全体にあったものだろう。平坦面には柱穴や土坑、溝などの遺構が検出されたが、多くの遺構が重なり合っており、これらが本来加工段32に伴った施設であるかどうかは判断が難しい。ただ、加工段32の位置、方向に合致する建物は少なくとも復元できないので、構造的にしっかりととした据立柱建物などが建っていた可能性は少ない。

加工段32の平坦面北側には2条の短い溝状遺構が検出された。上方（西側）のものを溝6、下方のものを溝7と呼ぶ。溝6は、加工段32の壁際から80cm～90cm離れた位置で検出された、加工段32の壁とはほぼ同方向に伸びる溝である。溝の南側は丸みを持ちながらもほぼ直角に折れて下方に向かい、北側は長さ2.8m程のところで途切れている。検出時の深さ5cmに満たない浅い溝なので検出できなかつた可能性が強く、本来はもっと長く続いていたものかも知れない。溝6の東側で検出された後に述べるSB32が、方向や位置関係が比較的合致しており、この建物に伴う加工段の壁際の溝痕跡である可能性がある。



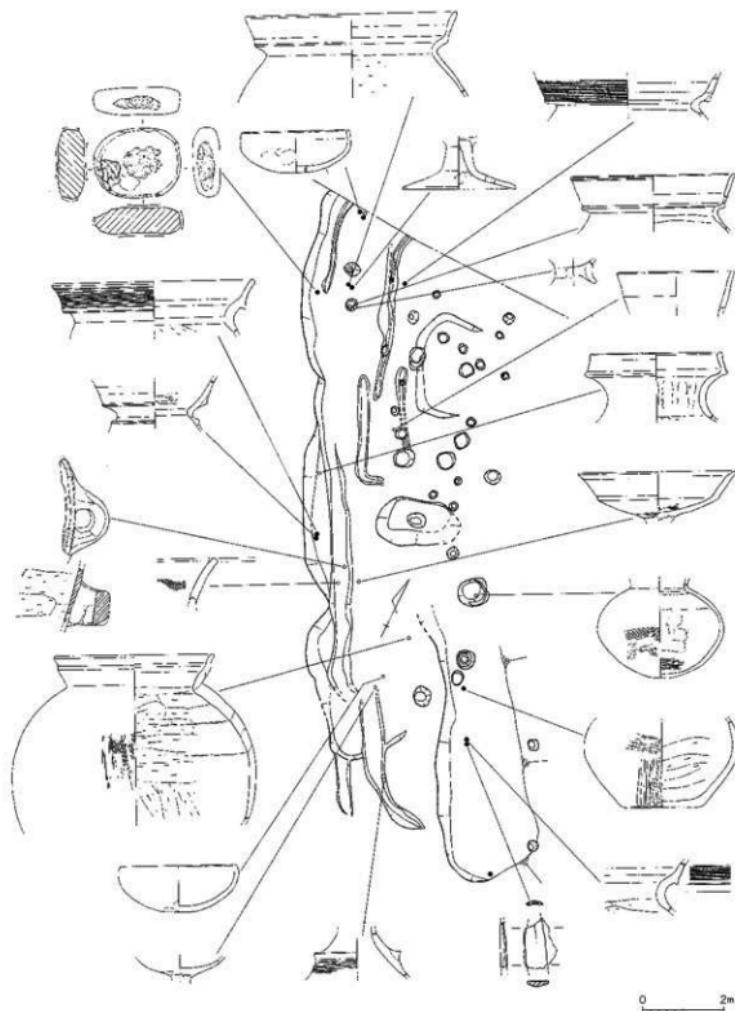
第331図 柳遺跡加工段32・加工段35・加工段36断面図 S=1/60

溝7は溝6の70cm～90cm東側で検出された直線状の溝で、溝6や加工段32の壁とは方向を若干異にする。南側はピットと重なってその先は検出できず、北側は自然に消滅している。溝6に増して検出面からの深さが浅い溝だけに、本来はもっと長く続いていたものが検出できなかつたのだろう。検出時の残存長が2.2m、幅が20cm前後である。

加工段32の平坦面のほぼ中央で、長楕円形に復元できる土坑（土坑2）が検出された。遺構の下方側（東側）が流出により検出できなかつたため、正確な規模、形態は不明だが、長さ2m前後、幅1.1m程の規模になると考えられる。検出面からの深さは10cm～30cmで、遺物は全く出土しておらず、

性格等は不明である。

加工段32の壁の背後に、残存平坦面の幅50cm程の狭い範囲で加工段が検出されている。これを加工段32-2と呼ぶ。残存長は4.2m程で、壁は直線的ではなくわずかながら曲線状に伸びるようである。加工段32との前後関係の手がかりはない。



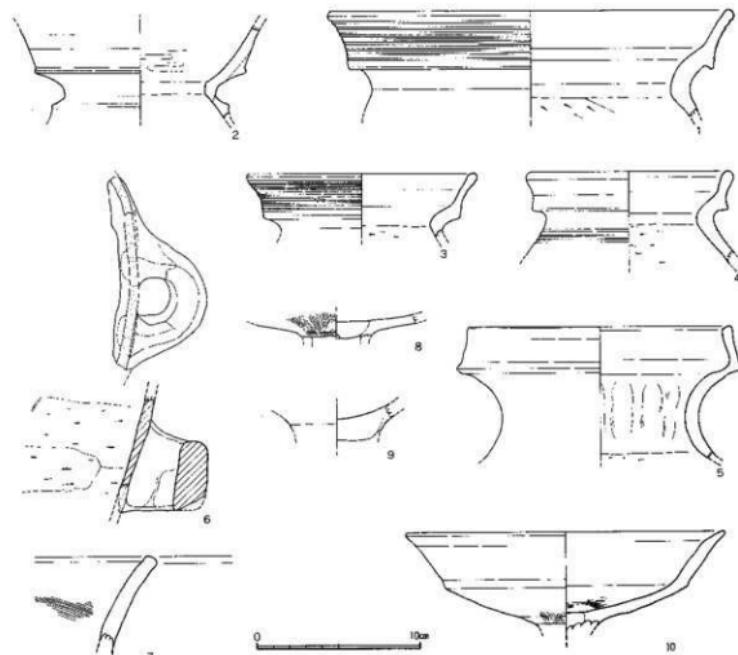
第332図 加工段32・加工段33・加工段34・加工段35・加工段36遺物出土状況 S=1/120 (遺物は1/6)

S B 32 加工段32の平坦面の北端付近、溝6のおよそ1m東側で検出された、1間×1間の掘立柱建物を復元できる柱穴の並びである。復元される建物の規模は2.6m×2.2m、柱穴の直径が20cm～50cmとばらつきがあることが建物として復元する上で躊躇する要素である。復元通りの建物であったとすると、前述したように溝6と方向、位置関係がほぼ合致しており、相対応する可能性が高い。

加工段32遺物出土状況（第332図） 何度も記してきたように、加工段32は南北に遺構が重なっており、加工段32に伴う出土遺物も明確に分別が難しい状況である。ただ、壁際や壁際の溝あたりの遺物はほぼ加工段32に伴うと判断して間違ないと考えられる。

加工段32の覆土上中溝付近からは、コシキ形土器の把手と底部付近の破片および高环が出土した。加工段32の上方に切り合った加工段32-2では、壁際の床面から弥生土器壺と鼓形器台の破片が出土した。近接して出土しているが、後に述べるように若干両者には時期差が認められる。また同じ壁際の覆土中から弥生土器壺が出土した。

加工段32出土遺物（第333図、第336図2） 1、2は加工段32-2の床面から出土した弥生土器である。1は復元口径25.0cmを測る壺である。複合口縁部の後の部分は下方に垂下し、口縁は外方に向けて立ち上がる。口縁外面には擬凹線が施され、外湾しており、端部はわずかに膨らんで丸くお



第333図 柳遺跡加工段32出土遺物実測図 S=1/3 (1, 2…床面、3~10…覆土)

さめている。頸部は厚さ1.1cmとかなり厚い。2は鼓形器台である。筒部の径9.2cm、筒部高さ2.0cmを測り、筒部がかなり縮約してきている個体である。受け部、脚台部とともに外面はヨコナデ、受け部内面にはヘラミガキを施している。

5は加工段32-2の覆土より出土した壺である。復元口径16.2cm、口縁部は内傾して立ち上がり、上端部には平坦面が見られる。複合口縁部の稜は横方向に突き出し気味で、内面の屈曲部は丸みを帯びている。頸部は比較的長く、内面にはシボリ痕もしくは縦方向のナデ痕かと思われる痕跡が見られる。淡黄褐色を呈す。

3、4は加工段32の覆土出土の甕である。3は復元口径14.2cmを測る複合口縁甕である。口縁外面には擬凹線を施し、外湾している。口縁端部はやや膨らんで丸くおさめている。橙褐色を呈す。

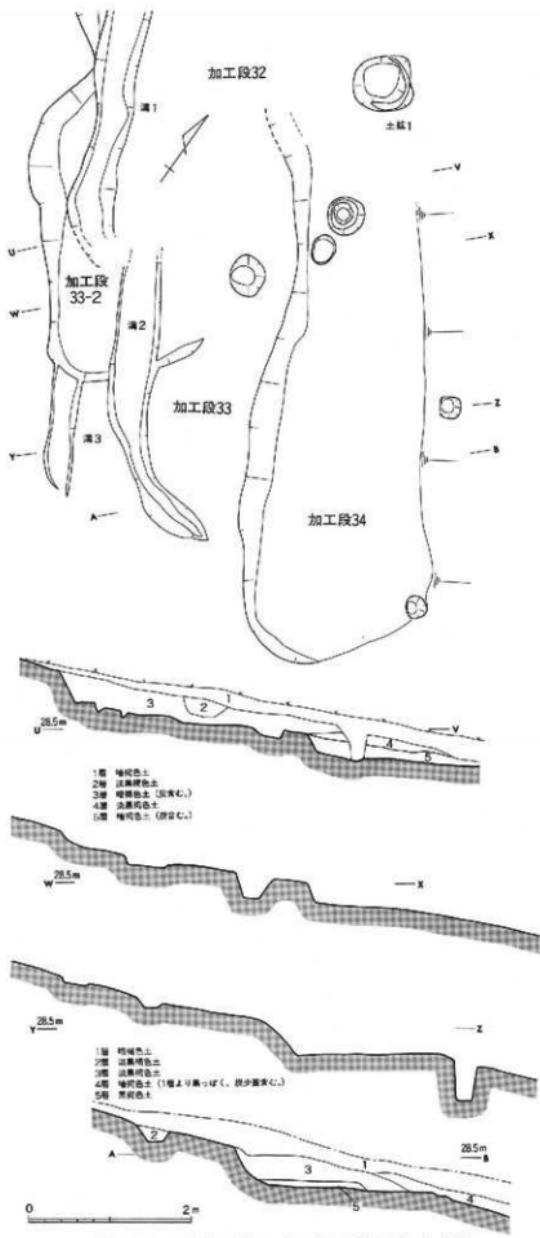
4は復元口径12.6cmを測る複合口縁甕である。口径の割に厚みのある個体である。口縁はやや外方に立ち上がり、外面に擬凹線は見られないが外湾している。端部はやや膨らんで丸くおさめている。頸部下方には4条単位の平行沈線が施されている。

6、7は加工段32の壁際付近の覆土から出土したコシキ形土器片である。6は把手の破片で、外面のハケメが孔の方向と平行に入っていることや、内面のヘラケズリの方向から、上方の横方向の把手と推測される。孔の径は2.2cm~2.9cmで、把手は器壁に穴を開けて差し込んでいる。器壁は部分的に4mmとかなり薄く作られている。白っぽい淡褐色を呈す。7は端部に向かって広がっており、底部にあたる破片だろう。内面にはハケメが見られ、白っぽい淡褐色を呈す。6と同一個体の可能性が高い。

8~10は覆土内から出土した高環である。8は接合部付近しか残っていないが、大きく開く环部に円筒形の脚柱部が付く高環であろう。环部の底には円盤を充填し、その下面の中心には小孔が見られる。脚柱部の径は4.2cmに復元できる。外面にはハケメを施している。9は底面は剥離面(接合面)で、底部全体に接合する脚部が付属するものと考えられる。高環ではなく、低脚環の類の可能性もある。復元される脚接合部付近の径は5cm前後である。10は径の復元値は不正確だが、20cm前後の口径となる高環環部である。中段付近に明瞭な段を設け、口縁端部付近で外方に折れて端部は丸くおさめている。内外面の一部にハケメが見られる。脚部の接合部付近の径は3.5cm前後に復元されるが、これも不正確である。橙褐色地に白い層状の縞模様のはいる胎土である。

第336図2は加工段32の覆土より出土した碧玉製の剝片である。濃緑色部分と淡緑色部分が入りじった碧玉で、長さ2cm、幅2.4cm、厚さ0.65cm、平坦打面から打たれた不定形の剝片である。縁辺にわずかに2次的な剝離が見られるが、大きな2次加工は施していない。玉作関連の遺物であろう。なお、蛍光X線分析によりこの碧玉は玉湯町花仙山産という分析結果が出ている(本書7、薦科氏分析参照)。

加工段32の時期であるが、まず加工段32-2は床面から上器が出土しておりその時期から特定可能である。しかし床面で近接した2点の土器には時期差が見られる。つまり1は塩津2期の特徴を持つが2は遅っても塩津3~4期である。この程度の型式差のある土器は共存すると考えるが、遺構に時期差を認めるかであるが、今のところ結論は明確ではなく、遺構の時期は塩津2期~3期と幅を持って考えておきたい。加工段32は床面からの土器の出土ではなく、覆土出土の上器から類推しなければならない。覆土出土の上器は大きく塩津2期(3、4)のものと塩津5期(5~9)のものに二分できる。前者は加工段32-2の時期に近く、加工段32はどちらかといえば塩津5期の可能



第334図 柳遺跡加工段33・加工段34実測図 S=1/60

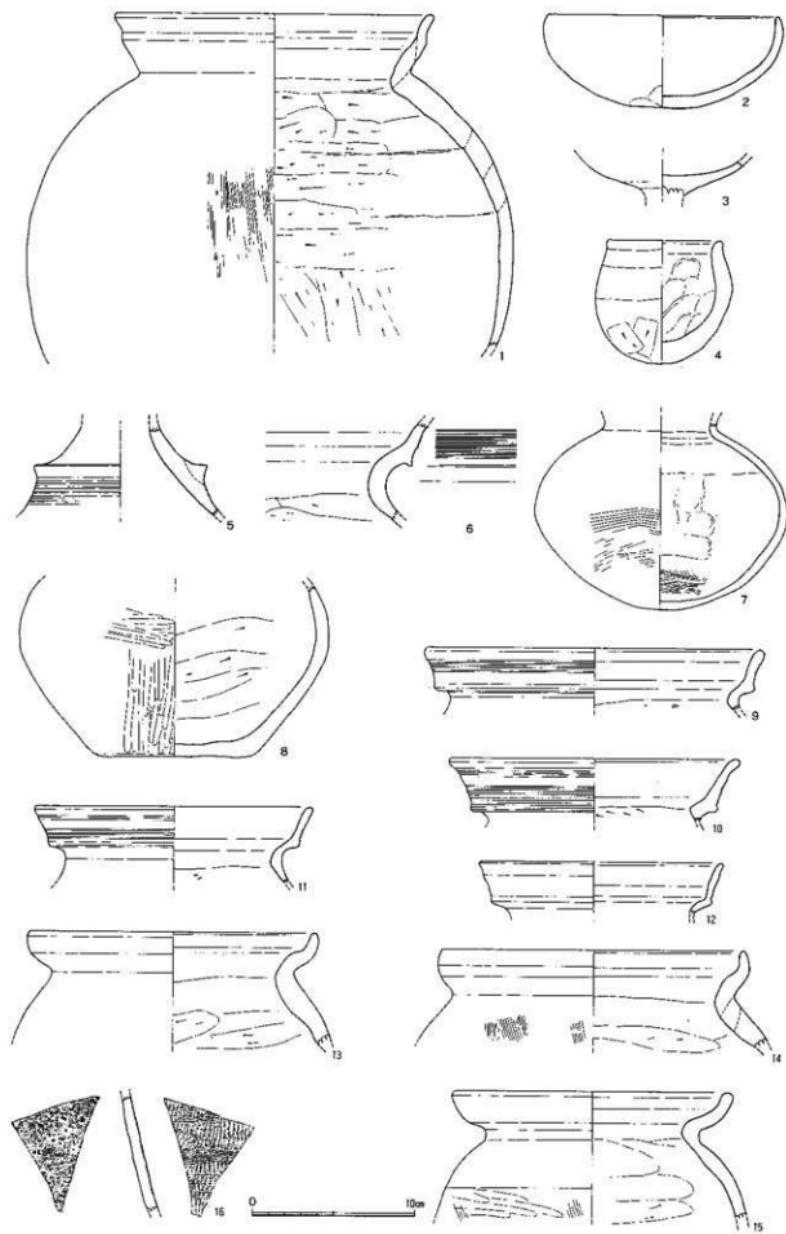
性が高いと考える。なお10は古墳時代中期下る可能性がある。これは隣接する加工段33周辺から多く出土する土器と同時期で、それに関連した遺物と考えたい。

加工段33（第334図）

柳遺跡東斜面北半の谷状地形の標高約27m~28m付近に集中する遺構群のうち、南側で検出された遺構で、加工段32の南側、後述する加工段34の西上方に位置する。溝2によって区画された遺構を加工段33と呼ぶ。

溝2は、検出時で長さ2.7m程検出されている。南側は湾曲しながら斜面下方側にまわり込み、収束するようであるが、北側は自然に消滅しており、全体の長さはつかめない。ただ加工段32側にまで伸びていた可能性が高い。溝の内側の平坦面には、ピットが1穴見られるのみで、他に遺構は検出されていない。

加工段33（溝2）の背後には、加工段32の背後部分から伸びてくる加工段が見られる。これを加工段33-2と呼ぶ。壁のあり方からすると長さ3.5m程度の小規模な加工段



第335図 柳遺跡加工段33・加工段34出土遺物実測図
 S=1/3 (1~5…加工段33覆土、6、8…加工段34上面、
 7…加工段34土坑内、9~15…加工段34覆土、16…加工段34下方)

のようだが、全容は不明であり、また加工段32、33との前後関係も不明である。またこの加工段33-2から南に溝が短い間検出されている（溝3）が、これも時期や切り合い関係は不明である。

加工段33出土遺物（第335図1～5） 溝2付近の覆土および溝2より北側付近で土器が出土している。1は口径19.7cmを測る土師器甕である。口縁の中程に段状のアクセントを設けて、複合口縁を意識したつくりとなっているが、全体的に丸みを帯び、シャープさに欠ける。肩部はほぼ球形を呈し、外面はハケメ後ナデ、内面はヘラケズリを施す。

2は復元口径14.4cmを測るポール状の土師器環である。底面は丸底で、口縁端はわずかに内側に入り、先端は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明瞭だが、底部外面は手持ちでヘラケズリを施している可能性がある。橙褐色地に白い層状の縞模様が入る胎土である。3はポール状の環部に、脚柱部径2.3cmの脚部が付く高环である。淡褐色地に白い縞模様が層状に入る胎土である。4は口径7.1cm、高さ7.6cmの小形の手づくね状の土器である。底部は丸底で口縁付近でわずかにくびれ、端部は丸くおさめる。内面は強いナデ、外面の底部は削っている。

5は鼓形器台である。脚台部として図示しているが、器面の風化で調整が不明なため、天地は不明瞭である。筒部が比較的細くて長く伸びるタイプで、脚台部の外面には擬凹線を施す。

加工段33の時期であるが、覆土出土の遺物が5を除いてまとまった時期であり、それらの土師器の時期、古墳時代中期と考えている。

加工段34（第334図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高27m～28m付近の遺構群の南端で検出された加工段で、加工段33のすぐ下方（東側）にあたる。壁の高さが残りの良い南側だと50cmと、比較的明確な壁で区画された加工段である。南にいくほど壁の残存高が高いため、南端は壁が東側にまわり込んで加工段が収束するのか確認できるが、北側は高さが低くなつて自然に消滅する。よって本来の規模は不明だが、北側にさらに続いているものと考えられる。

検出時の残存長は6.6m、斜面下方側も流出して幅は不明だが残存幅が2.2mを測る。壁は若干うねるもの、ほぼまっすぐ伸び、丸みを帯びた長方形に削り込まれた加工段であったろう。壁内側の平坦面には4穴のビットと、柱穴としてはやや大きい土坑1が検出されたが、建物を復元できるような規則的な柱穴の並びは見られない。ただ第334図Y-Z断面に現れているビットは、深くてしっかりしている上、四角い平面形は加工段6、7で建物を構成する柱穴とよく似ており、何らかの建物があった可能性もある。加工段の南端付近で検出されたビットも丸みが強いが同様のものかも知れない。

加工段34出土遺物（第335図6～15） 6、8は床面から出土した土器である。6は加工段34のはば中央、壁際から約40cm離れた地点の床面から出土した甕である。小片のため口径の復元は出来なかった。

複合口縁部の稜部分は若干下方につまみ出し、口縁は外方に立ち上がって、中途でさらに折れるように外方に開くようである。口縁外面には擬凹線を施している。

8は加工段34のやや北側の壁際近い床面から出土した甕または壺の底部である。完全な平底で、底径10.0cm



第335図 加工段32・加工段34出土遺物実測図
S=1/2 (1…加工段34床面、2…加工段32覆土)

を測る。胴部はやや偏平で、最大径は19.1cmである。外面下半には縱方向のヘラミガキ、上半には横方向のヘラミガキが見られる。

7は土坑1内から出土した壺または壺の胴部である。最大径が15.5cm、胴部の高さが11.0cmと偏平な球形の胴部だが、底部にはわずかながら平底の痕跡を見いだすことが出来る。外面には粗めのハケメが見られ、内面はヘラケズリの後なでているようであり、厚さが3.5mm～5mmと薄い。口縁部は欠損していて不明だが、胴部と接続する部分は径6.8cmを測り、やや外方に向かって立ち上がるようである。

9～15は加工段34の覆土から出土した土器である。9は小片のため径の復元が不正確だが、口径21cm前後に復元できる壺である。口縁外面には擬凹線を施し、外湾して口縁端部は丸くおさめる。10は復元口径18.0cmを測る複合口縁壺である。口縁は外方に向かって立ち上がり、外面は擬凹線を施し、外湾している。口縁端部付近はわずかに外方に折れ気味で、先端は丸くおさめる。11は復元口径17.2cmを測る複合口縁壺である。器壁が5mm前後とやや薄手で、口縁は外方に立ち上がり、端部は丸く納める。口縁外面には擬凹線を施している。12は復元口径16.1cmを測る壺である。厚さが3～4.5mmと薄手の口縁で、複合口縁部の稜の直上付近で一度薄くなり、上方に立ち上がると若干厚みを増して口縁端部に至る。端部はわずかに外方に折れるようにおさめている。

13～15は、複合口縁の特徴を痕跡的に残す壺である。複合口縁といつても、外面はほとんど内湾して折れ曲がるに過ぎず、ほとんど棱線は認められない。いずれも器壁が厚手である。15は胴部外面にヘラミガキを施している。16は加工段34の下方から出土した須恵器である。壺の胴部と考えられ、外面には平行タタキの後カキメが施される。内面はタタキ痕をなで消しているらしく、平滑である。器壁が6mm前後と比較的薄い個体である。

第336図1は、床面から出土した鉄器である。縁辺両側に刃部があり、横断面は浅いU字形を呈す。先端部と茎は欠損しているが鍔と考えられる。刃部幅1.1cmを測る。

加工段34の時期は、床面出土の壺6が小片で口縁端部も失われ限定は難しく、塩津2期～3期の幅を持って考えたいが、口縁部が中途で外方に折れ気味になるのは3期に近い特徴といえる。同じ床面の8は、この時期で矛盾はないであろう。覆土出土の遺物を見ると、9～11は床面出土の上器の時期と大差ないが、13～16は明らかに古墳時代中期のもので、上方の加工段33に関連する遺物であろう。一方土坑1出土の7は、類例が少ない資料だが、その形態から弥生時代後期末辺りと考えるのが適當かと思われる。時期の対応から考えるとこの遺構は加工段32に伴うものかも知れない。覆土出土の12も同様の時期で塩津5期であろう。

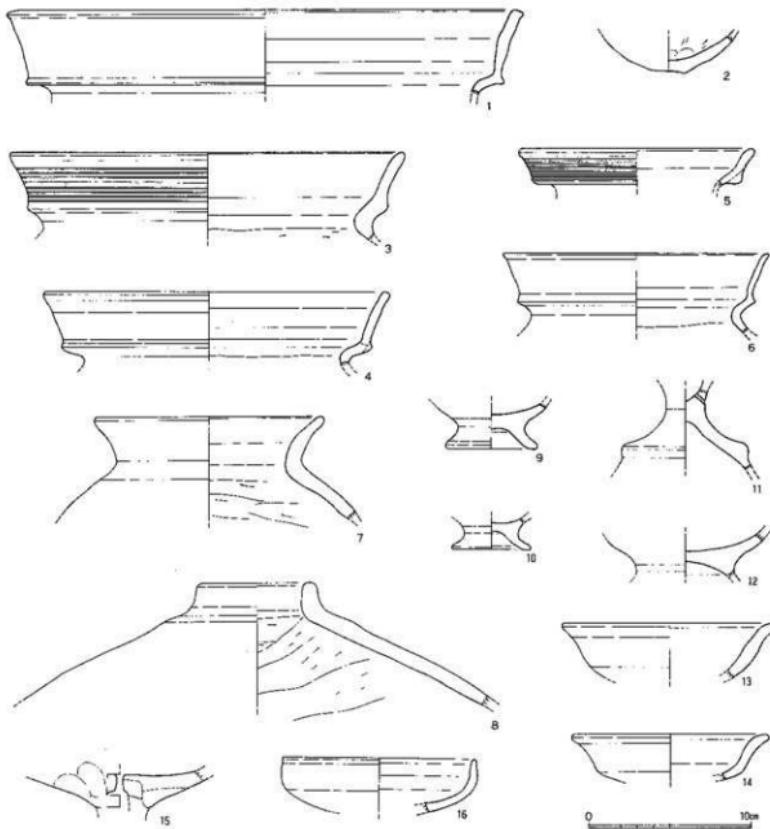
加工段34南側出土遺物（第337図）

加工段34の南側は、引き続いて比較的緩やかな斜面となっている。この部分からかなり多くの遺物が出土し、調査中も何らかの遺構の存在を想定していたが、結局明確な遺構を検出することが出来なかった。ただ、この加工段34南側付近のすぐ上方には遺構はなく、5m以上離れた加工段28から流れてきたとしたは余りに多くの遺物が出土したことから、何らかの施設が存在した可能性が高いと判断している。

1は復元口径32.0cmを測る大形の壺である。複合口縁部の稜が横方向に引き出され、口縁はやや外方に向かってまっすぐ立ち上がる。口縁は稜付近で薄くなり、上方に立ち上がるとやや厚みを増す。口縁端部は外方に若干引き出しており、上端には平坦面が見られる。白っぽい淡黄褐色を呈す。

2は甕または壺の底部である。底には1.8cmほどの小さな平底が残り、内面には指頭圧痕が見られる。3は復元口径24.4cmを測る甕である。口縁外面には擬凹線を施し、外湾している。口縁端部は丸くおさめている。4は復元口径22.4cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方に開いてまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめている。淡黄褐色を呈す。5は径の復元が不正確だが、14cm前後の口径となる甕である。口縁外面には擬凹線を施して外湾している。口縁の立ち上がりが比較的短く、端部はやや膨らんで丸くおさめる。暗褐色を呈す。6は復元口径16.4cmを測る甕である。口縁の厚さが3mm前後と非常に薄い個体で、口縁はやや外方に向けてまっすぐ立ち上がり、端部はわずかに外方に折れるような調整を行っている。複合口縁部の稜は横方向に伸びる。淡黄褐色を呈す。

7は復元口径14.2cmを測る単純口縁の甕である。胴部から口縁部にかけては曲線をもって折れ曲がり、口縁はやや外反して開く。口縁端は丸くおさめている。8は壺であろうか。胴部は大きく張



第337図 柳遺跡加工段34南側出土遺物実測図 S=1/3

っており、口径7.4cm、立ち上がりの高さ1.5cmの小さな口頭部が付く。淡黄褐色を呈す。当地では類例の少ない珍しい形態である。

11はつまみにあたる部分に孔が開いているので蓋であろう。筒部が細くて長い鼓形器台を小型にした形で、あまり大きな口径にはならない。13、14は高環であろうか。ともに口縁端部付近で外方に折れ曲がり端部を丸くおさめる共通の特徴を持つが、14の方がつくりがシャープである。復元口径は13が13.2cm、14が12.2cmを測る。15は高环の接合部付近である。脚部と環部の接合は差し込み式で、環部中心に小孔が貫通している。淡橙褐色地に白い縞が層状に入る胎土である。16は復元口径12.0cmを測るポール状の坏である。口縁部はつまみ上げるようにして細くなり、端部は丸くおさめている。淡橙褐色を呈す。

これらの遺物は大きく3つの時期に分けることが出来る。ひとつは塩津1期～2期のもので3、5、11が対応する。もうひとつは塩津5期のもので1、2、4、6などが対応する。7は古墳時代の壺にも見えるが、あるいは畿内系の甕の可能性もあり、そうであれば5期に対応するものだろう。さらにひとつは古墳時代中期の土器で、13～16が対応する。この加工段34南側に造構が存在したとすれば、この3時期の可能性があるわけだが、塩津1～2期、古墳時代中期は隣接する加工段33、34の時期に近く、5期の造構は隣接していない。よって5期の可能性がいちばん高くなるが、積極的な根拠はない。

加工段35（第330図、第331図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約27m～28m付近に連なる造構群の中で、最も北側で検出された加工段である。北側は調査区境となって未調査区に伸びていき、南側は加工段32と切り合っている。加工段31の下方にある。

さて加工段31は、近接して2つの加工段が切り合っている。第330図I-J断面を見るとわかるが、西側（斜面上方側）に地山をカットした壁があり、そこから約25cm東側（斜面下方側）に別の壁が切り込んでいる。前者（西側）を加工段35-1、後者（東側）を加工段35-2と呼ぶこととする。両者の前後関係は、加工段35-2が加工段35-1の覆土をカットしていることから、明らかに加工段35-1が古い。しかも壁の切り込み面が加工段35-2が高い位置にあることから、両者の間にはかなりの時間差がある可能性がある。

加工段35-1 加工段32の壁と切り合って地山をカットした壁により区画された加工段で、北側は前述したように未調査区に続くため、全容は不明である。検出時の残存長は4.8m、壁はわずかに弧状を呈し、壁際には溝は検出されていない。平坦面には柱穴用のピットが2穴検出されたが、後に述べる加工段35-2に伴うものの可能性もある。ただいずれにしても、掘立柱建物が構成できるような柱の並びはないといえる。

加工段35-2 加工段35-1の覆土を切って形成された加工段で、調査区北端の土層断面（I-J断面）で確認された。平面的には全く検出することが出来なかつたため、規模や形態は全く不明だが、あるいは壁際から20cm離れて検出された溝4がこの加工段35-2に伴う可能性もある。そうだとすれば加工段35-1とは平行して、少なくとも2.4mは南側に伸びることとなる。

加工段35出土遺物（第338図） 1はほぼ中央の床面から出土した復元口径26.2cmを測る甕である。複合口縁部の稜の直上付近でやや器壁が薄くなり、そこから口縁はやや外方に向かってまっすぐ立

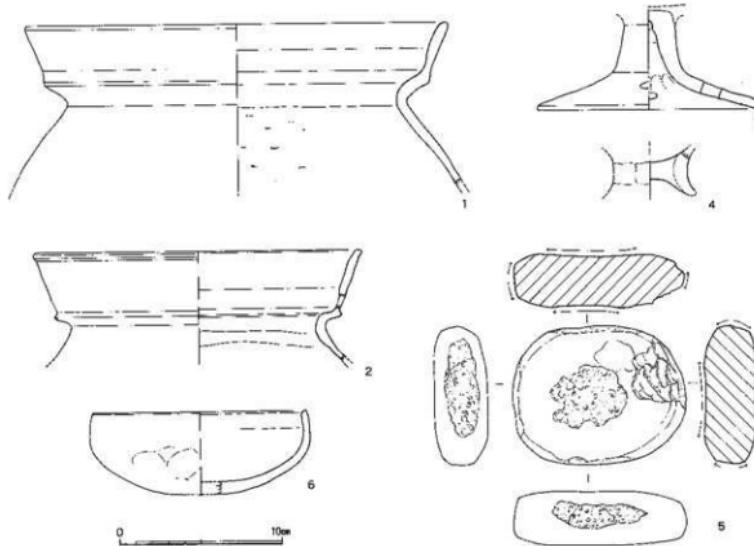
ち上がる。端部は風化のため表面が剥がれ、不明瞭である。淡灰褐色を呈す。2は覆土内から出土した復元口径22.0cmを測る甌である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、その直上は器壁が2mmと非常に薄くなり、そこから口縁は外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部はわずかに外方に引き出して、上端には面が見られる。

3は1と近接して床面から出土した高環の脚部である。上部は剝離面で、いわゆる差し込み法で環部と接合されたことがわかる。脚柱部はわずかに開くものの円筒状で、中途で屈曲して大きく裾に向かって開く。脚端部は丸くおさめており、円孔が開けられる。底径は13.9cm、概して微細な胎土で、白っぽい淡褐色を呈す。当地では類例の少ない形態である。

5は加工段35-1の床面で出土した細粒凝灰岩製の叩き石である。長さ10.7cm、幅8.5cm、厚さ3.35cm、偏平な円碟の側面に敲打による「減り」が観察されるとともに、表裏の平坦な面の中心にもくぼみが見られ、台石としても利用されたことがうかがえる。

6は調査区際の加工段35-2の床面から出土した坏である。復元口径13.2cmを測り、ポール状を呈す。器面の風化が著しく、調整は不明瞭だが、底部外面はヘラケズリが施されたようである。橙色地に白色の継が層状に入る胎七である。

加工段35の時期であるが、まず確実に加工段35-2に伴うと判断されるのが6である。これは古墳時代中期と考えられ、加工段35-2が加工段35-1とタイムラグがあると判断されること整合している。他の土器は時期的にまとまった特徴を持ち、基本的に加工段35-1の時期を示しているとみて良いだろう。これらの時期は塩津5期と考えられ、類例の少ない3も外来系とすれば、他の造構での外米系が伴う時期と同様で矛盾はない。

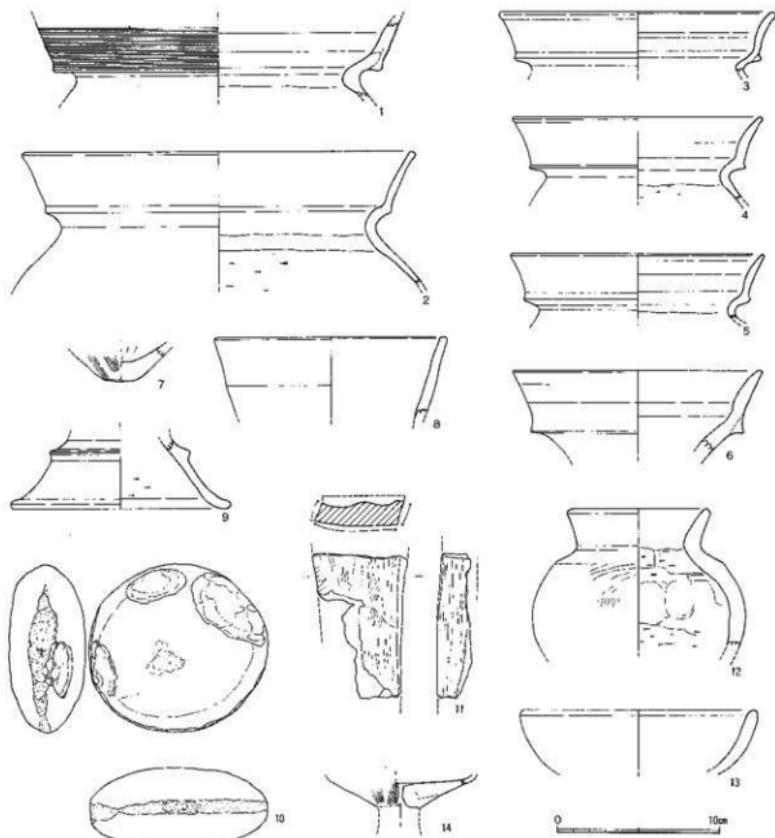


第338図 柳遺跡加工段35出土遺物実測図
S=1/3 (1…加工段35-1床面、2~5…加工段35-1覆土、6…加工段35-2床面)

加工段36（第329図、第330図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約27m～28m付近に連なる造構群の中で、最も北側で検出された加工段である。加工段35の下方で検出された溝5によって区画された部分を加工段36と呼ぶ。北側は調査区となつて未調査区に伸びていき、南側は加工段32と切り合つてゐる。溝5の内側にはさらに小規模な段が検出され、これを加工段36-2と呼ぶこととする。

さて溝5は、検出時の残存長が4.2mで、南側は自然に消滅しているが、さらに先に続いていた可能性がある。底面の幅10cm前後の細い溝で、北側の調査区境付近で二股に分かれ、一方はそのまままっすぐ伸び、もう一方は約70°の角度で東側に折れている。



第339図 柳遺跡加工段36出土遺物実測図 S=1/2 (1…床面、2～14…覆土)

この溝5が加工段の壁の壁際の溝であったとすると、溝の肩の西側に壁が立ち上がっていらない事実から、加工段35-2よりは古い遺構ということになる。平坦面からはピットがかなり検出されたが、加工段32の項でもふれたように特に南側は複数の遺構が重なっていて、複雑な様相を呈し、加工段36に伴うかどうか明瞭でない。

加工段36-2 溝5の内側約60cmのところに、長さ2.2m程の小規模な段が検出され加工段36-2と呼んでいる。この加工段は壁が加工段36の床を形成する層を切って形作られていることから、加工段36より新しいものである。

加工段36出土遺物（第339回） 1は壁際付近の床面から出土した甕である。口縁は外方に向けてほとんどまっすぐ立ち上がるが、内面を見ると中途でさらに外方に折れる気配である。口縁外面には擬凹線を施しており、不正確な復元だが口径はおよそ23cm前後となる。

2~14は覆土から出土した遺物である。2は径の復元は不正確だが、口径24cm前後となる甕である。口縁は厚さ3mm~4mmとその大きさに比して非常に薄いつくりで、外方にほぼまっすぐ立ち上がり、端部は外方にわずかに膨らんで上端に面が見られる。胴部内面は砂が右に動くヘラケズリで、白っぽい淡黄褐色を呈す。3は径の復元が不正確だが、口径17cm前後の甕である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、口縁はわずかに外反して立ち上がる。稜付近は器壁が僅くなってしまい、口縁端はわずかながら外方へ膨らむ。4は復元口径15.4cmの甕である。複合口縁部の稜はわずかに横方向につまみ出し、口縁は外反して立ち上がる。端部は先細りになりながら丸くおさめるが、わずかに外方に向かってアクセントを付けている。胴部内面は砂が右に動くヘラケズリで、白っぽい淡褐色を呈す。5は復元口径15.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、口縁は外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端は細くなってしまくおさめるが、外面上にわずかながらアクセントが見られる。淡黄褐色を呈す。

6は器台であろうか。器面が風化して調査が観察できず、天地は不明瞭である。復元口径15.4cm、淡橙褐色を呈す。7は甕または壺の底部である。径2cm前後の小さな平底で、底の厚さは1.2cmと比較的厚い。8は直口壺の口縁であろう。やや外方に開いてまっすぐ立ち上がっており、端部はわずかに面を持ち気味である。9は鼓形器台の脚台部である。復元底径13.6cm、脚台の高さ3.5cmと小形の器台である。

10は叩き石である。長さ11.0cm、幅10.4cm、厚さ4.7cm、ほぼ円形の偏平な河原石を素材としており、側面が敲打により潰れて帶状に平坦な面がめぐる。表面には敲打の際に生じたと思われる剥離面が數面認められる。11は砥石である。欠損していて全形は不明だが、造存する3面には研いでできた擦痕が認められる。

12は復元口径8.8cm、胴部最大径13.1cmを測る小形の直口壺である。全体的に厚手で、口縁部はやや外方に向かってまっすぐ立ち上がる。胴部はほぼ球形で、外面は粗いハケメ、内面はヘラケズリだが中央付近はヘラケズリの後なのでいる。淡褐色を呈す。13は復元口径14.4cmの甕である。ボーラー状を呈し、全体に厚手である。橙褐色を呈す。14は高杯である。杯部と脚部の接合はいわゆる差し込み法で、杯部中心と脚部の間に小孔が貫通している。軸部の径は2.6cm、杯部外面にはハケメが見られ、橙色を呈す。

加工段36の時期は、床面出土の1が外面に擬凹線があり、口縁端が失われて不明瞭だが口縁が中途で折れて聞く傾向が見られることから埴津3期と考えたい。覆土出土の土器を見ると、複数の時

期のものが混じり合っているが、2～5は塙津4期の新しい段階から5期の特徴を持ち、すぐ上方の加工段35-1と近い時期の遺物、12～14は古墳時代中期で同じく上方の加工段35-2と同時期のものである。それぞれの造構に関わる遺物と考えるべきだろう。

加工段37（第340図）

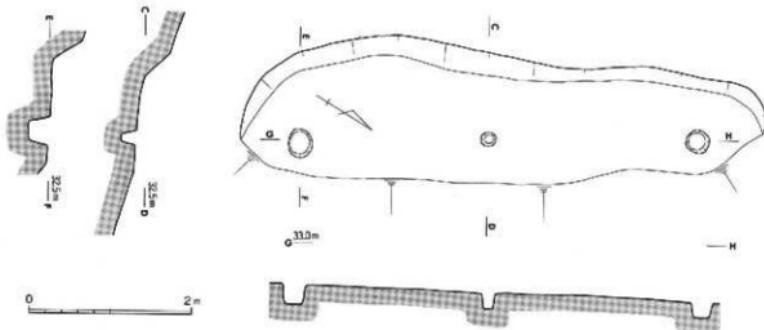
柳遠跡東斜面南半の急な斜面、標高32.5m付近で検出された加工段である。加工段27のレベルで約2.5m、水平距離で約5m下方にあたり、加工段25とほぼ同一のレベルにあたる。

急斜面にあたるために遺構の残存状況は良くないが、壁の両側がまわり込み始めており、作り出された平坦面のおよその長さはつかむことが出来る。検出時の残存部で長さ6.4m、幅は急斜面でかなり流出したとみえ、1.5mしか残存していない。

平坦面からは柱穴用のビットが3穴検出された。この3穴は2.5m間隔で一直線上に並んでおり、しかもその方向、位置ともに加工段37の壁と合致している。対応する東側の柱列は検出されていないが、これは流出状況からすれば当然で、加工段37にはおそらく1間×2間の掘立柱建物が建っていた可能性が高いと考えられる。とすれば長辺が5mのかなり大形の建物となる。柱列の方向はN 30° Wである。柱穴の直径は、両側の柱穴が30cm前後、中央の柱穴が直径15cm前後で、深さは20cm～30cmと通常の掘立柱建物と比べて浅いのは気になる。

加工段37出土遺物（第341図） 1は床面出土の複合口縁甕である。径の復元は不正確だが、口径17cm前後で、口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜の突出はあまりない。外面には煤が付着する。

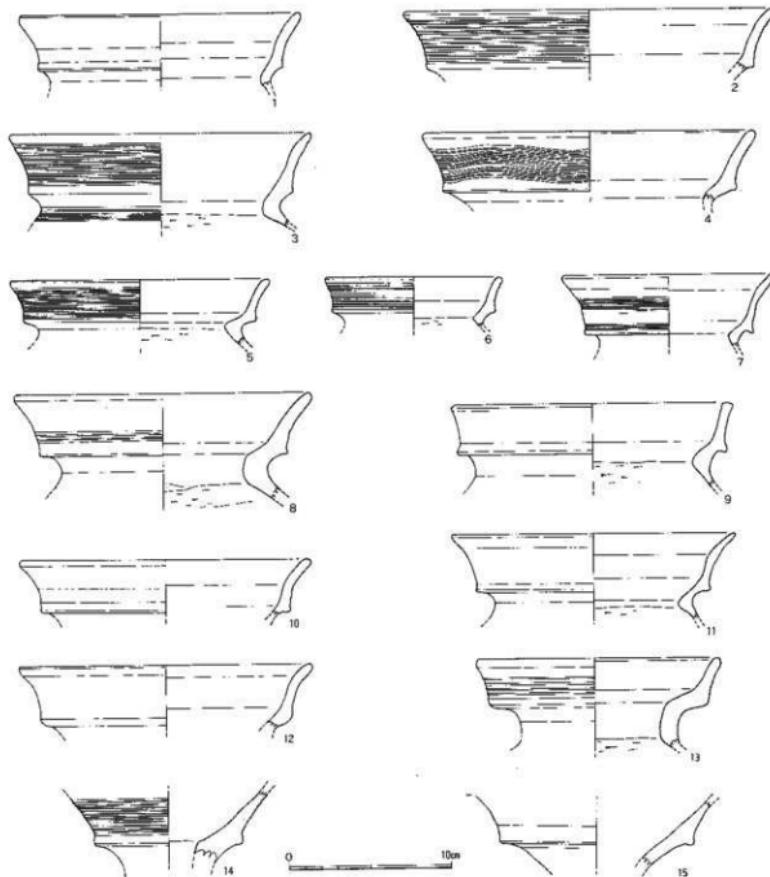
2～15は覆土内より出土した土器である。2は径の復元は不正確だが、口径23cm前後の複合口縁甕である。口縁はやや外反して立ち上がり、口縁外面には擬凹線を施している。口縁端は丸くおさめる。淡褐色を呈す。3は口径17.6cmを測る複合口縁甕である。口縁は外反気味に立ち上がり、外面には擬凹線を施している。口縁は端部に向かって次第に細くなり、先端は丸くおさめる。頸部以下にも柳状工具により平行沈線を施している。4は復元口径20.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に若干突き出し、口縁は外方に向かって立ち上がる。口縁外面には擬凹線を施すが、直



第340図 柳遠跡加工段37実測図 S=1/60

線状ではなくくねっている。端部に向かってほとんど厚みを変えず先端は丸くおさめる。淡灰褐色を呈す。5は復元口径16.0cmを測る複合口縁の甕である。口縁には擬凹線を施し、外面は外溝している。口縁端部は丸くおさめる。橙褐色を呈す。

6は口径11.0cmの小形の複合口縁甕である。口縁は外反して立ち上がり、外面には10状の浅い擬凹線を施す。口縁端部は丸くおさめている。橙褐色を呈す。7は復元口径13.2cmを測る甕である。複合口縁部の稜部分は下方に垂下し、口縁は外反して立ち上がる。口縁部の厚さは3mm~5mmと薄手で、外面には2段にわたって細くて浅い擬凹線を施している。口縁端部は丸くおさめている。8は口径18.5cmの複合口縁甕である。全般的に厚手で、特に頸部は1.5cmと厚い。口縁部は外反気味に



第341図 柳遺跡加工段37出土遺物実測図 S=1/3 (1…床面、2~15…覆土)

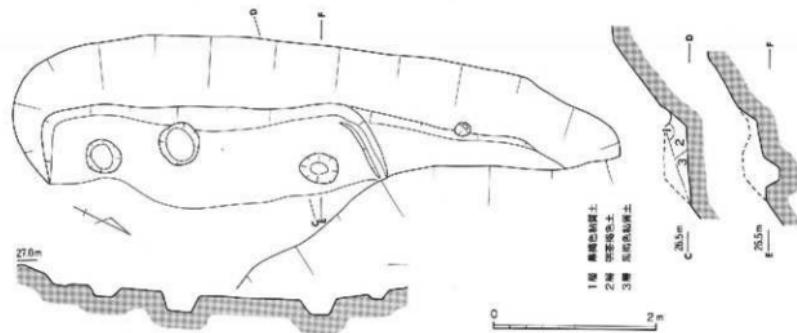
立ち上がり、外面には一部擬凹線が見られるが、風化が著しく不明瞭で本来は全面に施されていたものかも知れない。口縁端部に向かってはやや薄くなっている、端部は丸くおさめる。9は復元口径17.4cmを測る甌である。複合口縁部の稜は斜め下に突き出し、口縁はわずかに外方に立ち上がる。口縁外面は外湾し、端部はやや膨らんで上端に丸みのある面を有す。口縁外面は風化が著しく擬凹線は見えないが、この形態の口縁は通例擬凹線が見られ、外面も湾曲していることからすると本来は施されていたかも知れない。白っぽい淡褐色を呈す。

10は径の復元が不正確だが、口径18cm前後の複合口縁甌である。口縁は中途で外方に折れ曲がるように外反し、端部は丸くおさめている。口縁の厚さは5mm前後とやや薄手である。11は復元口径17.6cmを測る甌である。複合口縁部の稜はやや横方向に引き出し、口縁は外方に立ち上がって中途でさらに折れて外方に開く。口縁の厚さが3mm～5mmと薄手で、特に口縁端部に向かって薄くなり、先端は丸くおさめる。ただ風化で表面が剥落気味であり、詳細は不明である。7とよく似ているだけに口縁外面に擬凹線があった可能性もある。白っぽい淡褐色を呈す。

12は復元口径18.7cmを測る複合口縁甌である。口縁は外反し、端部はやや膨らんで先端は丸くおさめる。橙褐色を呈す。13は復元口径14.6cmを測る複合口縁の壺である。口縁はやや外方に立ち上がり、外面にはやや間隔の広い擬凹線を施して外湾している。端部は丸くおさめている。ややくらい黄褐色を呈す。

14、15は鼓形器台である。14は受け部外面に擬凹線を施すもので、筒部が比較的細く長めの個体である。橙褐色を呈す。15は表面が風化しているため調整が不明瞭で、天地が逆転している可能性がある。擬凹線は認められず、白っぽい淡黄褐色を呈す。

加工段37の時期であるが、床面出土の甌1は、塩津3期～4期の範囲で、これだけでは時期の限定は難しい。さらに覆土の土器を見ると、口縁外面に擬凹線を持つものが日立つ。若干古い特徴を持つもの（4、5、9など）もあるが、多くは口縁全体が外反して端部が膨らまない塩津3期の特徴を持つもので、より新しい要素を持つ土器は見られない。よって加工段37は塩津4期には下らず、塩津3期と考えたい。



第342図 柳遺跡加工段38（古）実測図 S=1/60

加工段38（第328図、第329図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約27m付近で検出された加工段である。谷部ではやや斜面の傾斜が急になる部分であります。北半を「L」字形による大きな溝に切られて残存状態はあまり良くない。ちなみにこの溝はかなり下方にまで続くが、表土段階で既に観察できた遺構であり、かなり新しい時期に形成されたものである。

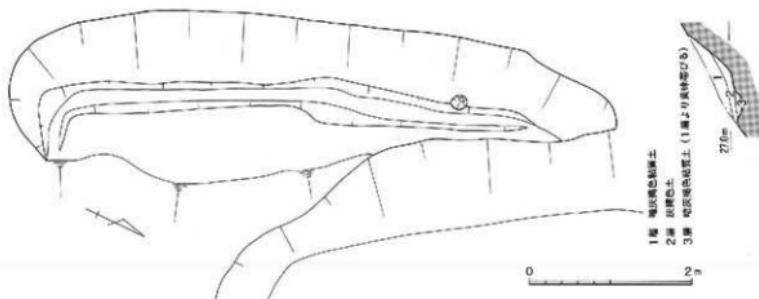
加工段38は、床面が上下2段に検出されている。上の面は下の床に土を持って形成されていることから、明らかに上方の床面が新しい。よって下の面を加工段38古、上の面を加工段38新と呼ぶことにとする。

加工段38古（第342図） 斜面に沿った長さがほぼ4mの加工段である。検出時の残存幅は0.9mで残存状況はあまり良くない。背後の壁はほぼまっすぐに削り込まれ、南側はほぼ直角に、北側はやや鈍角にまわり込んで収束している。北側の壁際には底面の幅が10cmに満たない溝が検出されたが、他の部分では明らかに出来ていない。

床面からは3穴の柱穴状のビットが検出された。ただそのうちの中央の1穴は壁を切り込んでいるので、この加工段と直接の関係はない可能性が高い。両端の2穴はともに壁のコーナー部分に対称的に配置されており、この加工段に伴うものと見て間違いないだろう。柱穴の直径は45cm前後、深さは10cm～20cmとあまり深くないため、構造的にそうしかったした建物は建っていないかったかも知れない。柱間は柱穴の中心で測って2.7mである。

加工段38新（第343図） 加工段38古の壁面をより緩い角度で上方から掘り込んで、以前の床面に盛土を行い約25～30cm嵩上げして形成された加工段である。壁はほぼ直線的に伸び、南側はほぼ直角に東にまわり込むが、北側は後世の大きな掘り込みによって切られて明かではない。ただ壁の北側も若干まわり込む気配があり、さほど長くは続かないと思われる。検出時の残存長が6.3m、残存幅が1.1mで、特に北側の残存度が良くない。全体の形はコーナーに丸みのある長方形の掘り込みであったろう。

壁際には、底面の幅が15cm～20cm、深さ10cm程度の溝が設けられており、壁面がまわり込むのと対応して東に曲がって続いており、壁際を全周めぐっていたのであろう。床面には柱穴等は検出されなかった。



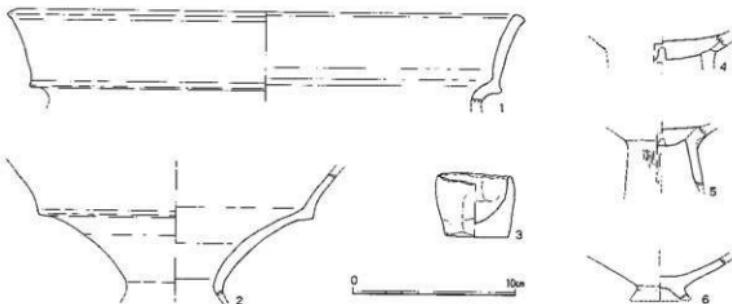
第343図 柳遺跡加工段38（新）実測図 S=1/60

加工段38出土遺物（第344図、第350図1） 第344図1～6はいずれも覆土から出土した土器である。1は径の復元が不正確だが、口径32cm前後に復元される大形の壺である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、その直上は内外面から強くなられて、厚さ5mmと薄くなっている。その上は6mm前後に厚みを増してやや外方に向かって立ち上がり、上端には平坦面を設けている。白っぽい淡黄褐色を呈す。2は器台であろうか、あるいは二重口縁の壺の可能性もある。器壁の厚みが4mm～6mm程度と全体的に薄いつくりで、当地で一般的に見られる鼓形器台と比べるとかなり薄い。口縁端が欠損しているため口径は不明だが、22cm前後になるものと思われる。淡黄褐色を呈す。外来系の上器である可能性もある。

3は口径4.6cm前後、底径3.4cm前後、器高3.9cm前後の小形手づくね風のミニチュア土器である。内外面ともナデとおさえて凸凹し、口縁も波打っているが、底面は平坦である。白っぽい淡褐色を呈す。4、5は高環である。4は環部の底に充填された円盤部分で、底面下の中心に小孔が見られる。剥離痕の観察から、脚柱部の径が6.5cm前後に復元され、一般例に比べてかなり大形の高環である。淡褐色を呈す。5は当地で通有に見られる高環で、環部の底には円盤が充填され、その中心には小孔が見られる。脚柱部の接合部付近の径は4.3cmで、外面にはハケメが見られる。白っぽい淡黄褐色を呈す。6は低脚环であろう。接合部の径3.0cm、底径は不明だが3.8cm前後になる小形の個体だろう。淡褐色を呈す。

第350図1は加工段38古の床面から出土した鉄器である。その形状から鎌と考えられる。刃部の先端は欠損しているが、刃部現存長1.9cm、両縁の刃は湾曲しており、鎌がある。刃部は茎に近い部分で若干幅を広げており、1.15cmを測る。そこから刃部先端に向けては刃がやや内湾気味で、使い減りであろうか。茎は現状で長さ8.8cmとかなり長い。茎の横断面形は長方形で幅9～10mm、厚さ4mmを測る。全長は残存部で10.8cm、復元すると11.2cm前後になるだろう。

加工段38の時期は覆土出土の土器で判断するしかないが、その時期的特徴は比較的まとまってい。2、3は類例が少なく時期判断しかねるが、他の土器は、端部に調整を施して面を持つ大形壺の特徴や、円盤充填で底部中心に小孔のある高環が複数存在することなどから、塩津5期と見て良いだろう。



第344図 柳遺跡加工段38出土遺物実測図 S=1/3 (1～6…覆土)

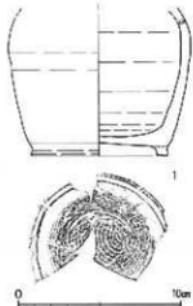
S K03 (第345図)

柳遺跡東斜面南半の急な斜面、標高32m付近で検出された土壙である。加工段37の南東側、後に述べる加工段39、加工段40の上方にあたる。

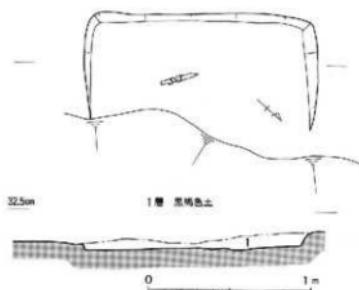
底面で長さ1.34m、幅は斜面下方側(北東側)が流出して不明だが、検出時の残存部で0.65mを測る比較的整った形の長方形の土壙である。流出のため深さは10cm弱と浅く、内部には黒褐色土が入っていた。

土壙のほぼ中央やや南東寄りの底面で、鉄製短刀が1本出土した。軸が土壙の長軸とややずれて、北西に切先に向けて置かれていた。この鉄刀は切先が欠損しているが、残存長18.9cm、復元長20cm前後と推測される(第347図)。刃部の残存長が12.2cm、幅が茎に接する部分で2.7cmで切っ先に向かって刃部側、背側ともに幅を狭めていく。背の厚さは6mm~8mmである。茎は長さ6.6cm、幅が刃部に接する辺りで2.6cmと刃部と同様の幅で間がない。厚さは7mmとこれも刃部と変わらない。基部の少なくとも片側は、「L」字状に切り込みが入っている。茎には木質が見られる。

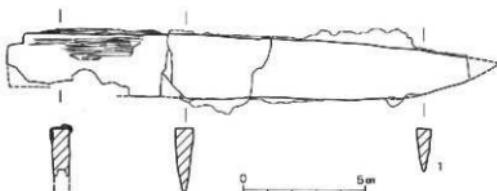
S K03そのものからは鉄刀以外の遺物は出土しなかったが、下方の流土中より須恵器壺が出土している(第345図)。この壺は、周間にS K03以外に造構がないことや、この土壙がかなり流出していることから、S K03から流れたものの可能性が高いと判断している。この壺は、肩部より上を失っているが、胴部は円筒形に近い形で平底の底部の縁に高台が付く。底径8.5cm、最大径11.3cmで、底面には回転糸切り痕が残る。



第345図 S K03下方出土遺物実測図 S = 1 / 3



第346図 柳遺跡 S K03遺物出土状況 S = 1 / 30

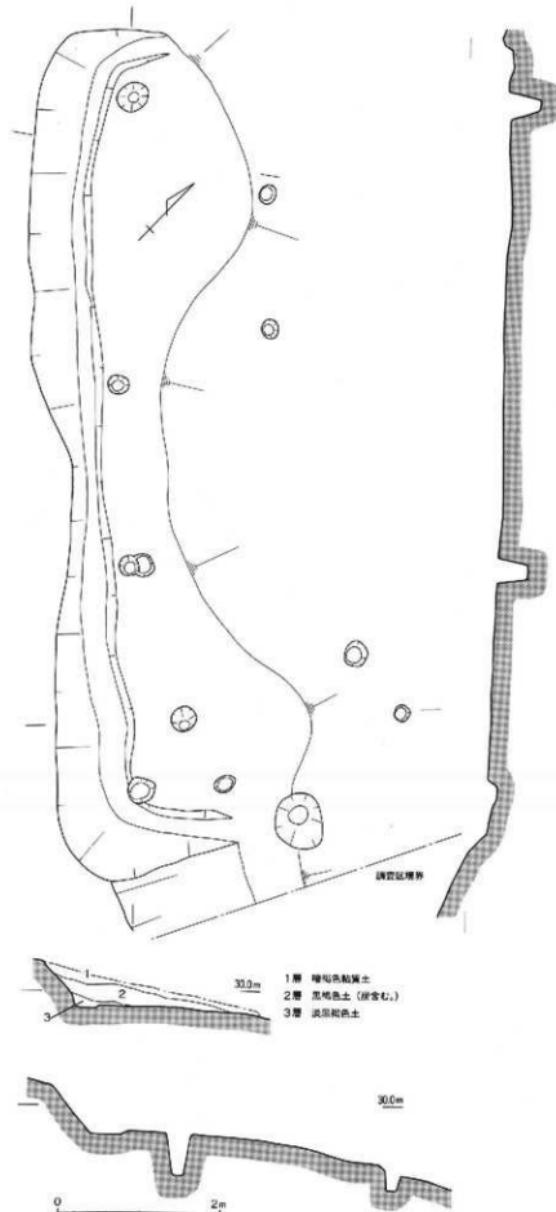


第347図 柳遺跡 S K03出土遺物実測図 S = 1 / 2

さてSK03の性格であるが、形態が整った長方形であること、規模が適当なこと、副葬品らしき鉄刀が底面から出土していること、須恵器壺が伴う可能性が高いこと、周間に同時期の造構が全く存在しないことなどから、土塚墓の可能性が高いと考えている。時期は須恵器壺が伴うとすれば、平安時代前期頃と見て大過ないだろう。

加工段39（第348図）
柳遺跡東斜面南半の急斜面、標高29.5m付近で検出された加工段である。すぐ上方には急斜面からか造構は検出されておらず、上方直近の加工段26はレベルで6.5m、水平距離で約15m上方にあたる。後述する加工段40が北西に隣接している。

加工段39は、壁の両側が確認される本遺跡では数少ない加工段である。長さが壁際で10.05m、溝内側で9.5mとかなり長大きな加工段といえる。背後の壁は直線的に掘り込まれており、両端は直角に近い角度で壁がまわり込んでいる。平面形としてはコーナーに丸みのある長方形に掘り込まれたも



第348図 柳遺跡加工段39実測図 S=1/60

のである。斜面下方側は流出しており、幅は確定できないが、検出時の残存幅は残りの良い部分で2.6mを測る。

壁際には底面の幅が15cm～30cmの溝がめぐっている。床面にはかなりの柱穴状のビットが検出された。壁際付近に比較的規則性を持つ並ぶように見える柱穴列もあるが、明瞭に掘立柱建物を復元することは出来ない。何らかの建物が建てられていた可能性は極めて高いが、規則性に基づく整然とした建物ではなかったのであろう。

加工段39からは覆土内より弥生土器小片が出土しているものの、岡化できるような土器は出土しなかった。よって造構の時期は決定できないが、この加工段39に類似した造構、例えば加工段7、加工段11、加工段25、加工段31、加工段32、加工段38新など、コーナーに丸みのある長方形に削り込み、壁際に同様の溝がめぐる加工段は全て弥生時代後期後半～後期末と考えられ、この加工段39も同様の時期の可能性が高いと考えている。

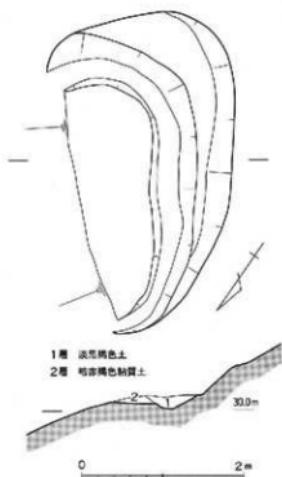
加工段40（第349図）

柳遺跡東斜面南半の急斜面、標高約30m付近で検出された加工段である。加工段39の北西に隣接し、加工段37のレベルで約2.5m、水平距離で約5m下方にあたる。

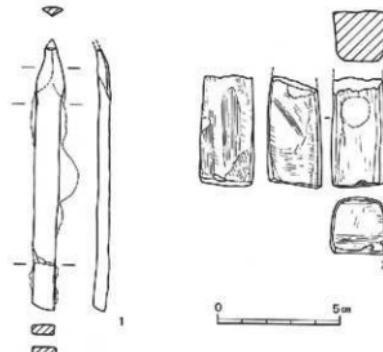
加工段40は壁の両端が確認されており、長さが壁際で3.5mと小規模な加工段である。背後の壁は若干丸みを帯びて掘り込まれ、平坦面の幅は斜面下方側が流出して不明だが、検出時の残存部で1.4mを測る。壁際には底面の幅15～25cmの溝がめぐっている。この溝は平坦面の地山の上に乗る土砂（第349図土層断面2層）を切って掘り込まれており、床面は盛土をして整えられたことがわかるとともにこの溝が深さ20cmとこの種の溝としては深いこともわかる。

加工段40出土遺物（第350図2） 第350図2は加工段40の

覆土から出土した砥石である。硅長岩製で一端が欠損しているが、現状で長さ4.6cm、幅2.3cm、厚さ2.2cmを測る。ほぼ直方体で、残存する5面は全て研ぎ面として利用され、



第349図 加工段40実測図 S=1/60



第350図 柳遺跡加工段38・加工段40出土遺物実測図
S=1/2 (1…加工段38床面、2…加工段40覆土)

擦痕が観察される。横断面は片面の角がとれて、角張った薄鉢状を呈している。きめが細かく、仕上げ用の砥石であろう。

加工段40から土器は覆土内から弥生土器小片が出土したのみで、図示できるものはない。よって時期は確定できない。ただ前後の遺構の状況から、弥生時代後期後半～後期末葉の遺構である可能性が高いと考えている。

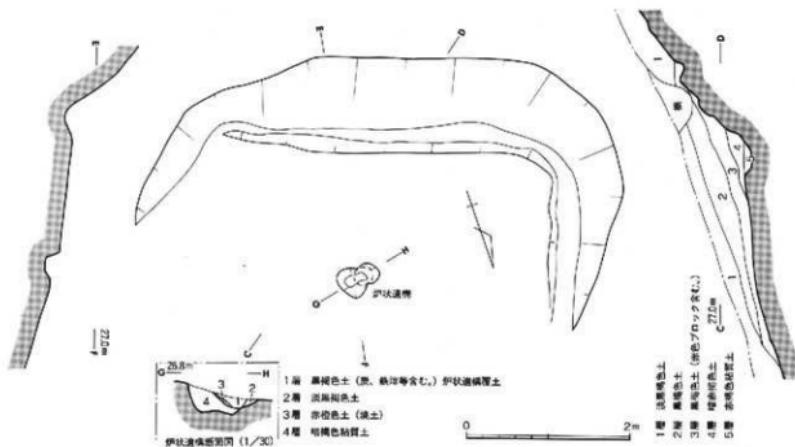
加工段41（第351図）

柳跡東斜面南半の急斜面、標高約27m付近で検出された加工段である。加工段39、加工段40のレベルで約2m～2.5m、水平距離で約5m下方の位置にある。

加工段41は背後の壁はほぼ直線状に切り込み、西側はほぼ直角に壁がまわり込んで斜面下方側（北側）に伸びていく。一方東側は鈍角に折れて不明瞭になりながら消滅する。これは加工段41の東側付近は地山が軟らかく出しやすいのに加えて、覆土との区別のつきにくい土であったことから明確に検出できなかったからで、本来は西側と同様に直角に曲がっていた可能性がある。後述する溝がちょうど壁が折れる辺りで消えるのも全く同じ理由である。規模は、長さが仮に東側が直角に曲がっていたとするなら4.8m後に復元できる。幅は残存部で2.5m程度である。

壁際には底面の幅10cm～30cmの溝がまわっている。概して背後の壁際は幅が狭く、側面にまわり込んだ辺りは幅が広い。東側で溝が途切るのは、前述したように流出して検出が困難であったためである。

炉状遺構 加工段41の床面のほぼ中央に炉状の遺構が検出された。検出段階では、瓢箪状のビット状落ち込みが確認され、その中央に特に黒色味が強い範囲が円形に認められた。そこで瓢箪形の長軸にあわせて半載して掘削したところ、黒色土の中から多量の炭とともに鉄滓が出土、あわせて中心部の黒色範囲の縁辺が薄く焼けていることが判明し、何らかの製鉄関係の炉である可能性を考



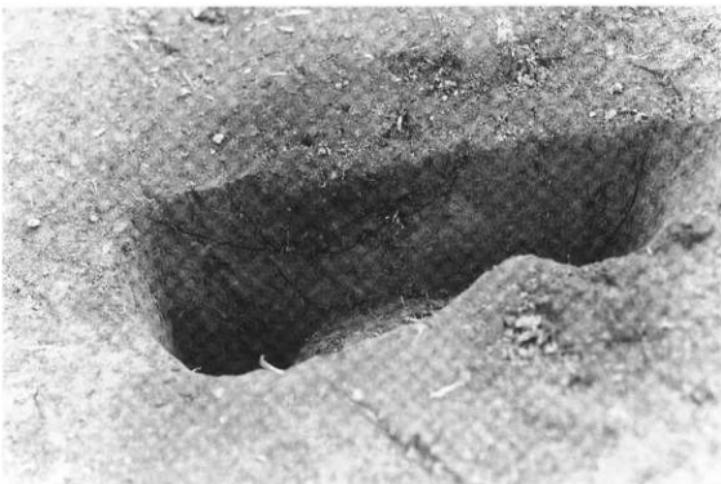
第351図 柳跡加工段41実測図 S=1/60 (炉状遺構断面図は1/30)

慮して炉内の覆土を全て持ち帰って精査することとした。整理段階でこの土砂を洗浄分別したところ、鐵造剝片、粒状滓、炉壁小片などが数多く検出され、鐵冶炉であったことが判明した。

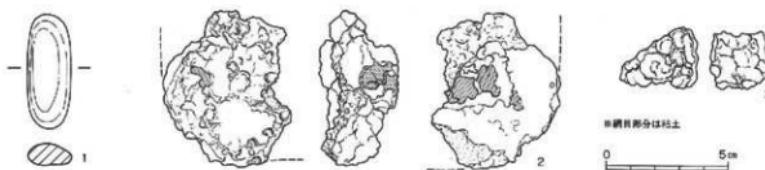
炉の構造は、まず径40cm～50cm、深さ18cmほどの不定形の土坑が掘られ、それが埋まつた（埋められた）後に径20cm、深さ10cmほどの小穴が掘られて炉とされたようである。炉の下方の土坑が何らかの地下構造になるかどうかは不明である。炉の側面は、一部が最大5cmばかり焼けて赤変しているだけで、さほど強く被火したようには見えない。ただ覆土内には多くの炭や鐵冶関係遺物が詰まつてゐることは前述したとおりである。

さて炉内で検出できた鐵冶関係資料は以下の通りである。

| 物名 | 点数 | 重量(g) | 遺物 | 点数 | 重量 |
|-------|----|--------|---------------|----|---------|
| 鐵造剝片 | 多数 | 8.98 g | 楕形滓(第352図2) | 1点 | 85.49 g |
| 粒状滓 | 8点 | 1.10 g | 羽口溶解物(第352図3) | 1点 | 7.81 g |
| 疑似粒状滓 | 1点 | 0.47 g | 炉壁小片 | 多数 | |



加工段41 炉状遺構断面



第352図 加工段41・加工段42出土遺物実測図 S=1/2 (1…加工段42覆土、2、3…加工段41炉状ピット内)

柳造跡加工段41炉状造構出土鍛造鋼片計測表

単位 (mm)

| NO | 長さ | 幅 | 厚さ | NO | 長さ | 幅 | 厚さ | NO | 長さ | 幅 | 厚さ |
|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 4.0 | 2.8 | 0.2 | 35 | 1.6 | 1.2 | 0.1 | 69 | 3.8 | 3.4 | 0.6 |
| 2 | 3.8 | 3.8 | 1.0 | 36 | 5.4 | 4.0 | 0.4 | 70 | 3.8 | 3.0 | 0.8 |
| 3 | 2.6 | 1.6 | 0.2 | 37 | 2.2 | 1.6 | 0.2 | 71 | 3.0 | 2.0 | 0.1 |
| 4 | 3.8 | 2.2 | 0.2 | 38 | 2.4 | 1.8 | 0.2 | 72 | 8.4 | 6.0 | 0.8 |
| 5 | 2.4 | 2.4 | 0.2 | 39 | 2.2 | 1.6 | 0.1 | 73 | 5.0 | 3.0 | 0.8 |
| 6 | 3.6 | 3.4 | 0.2 | 40 | 2.8 | 1.4 | 0.6 | 74 | 3.0 | 2.4 | 0.2 |
| 7 | 6.0 | 4.0 | 0.6 | 41 | 1.6 | 1.2 | 0.2 | 75 | 4.0 | 4.0 | 0.2 |
| 8 | 3.2 | 2.0 | 0.2 | 42 | 3.4 | 3.0 | 0.2 | 76 | 7.0 | 3.6 | 1.0 |
| 9 | 2.0 | 1.8 | 0.2 | 43 | 4.6 | 2.2 | 0.2 | 77 | 3.6 | 3.0 | 0.4 |
| 10 | 4.2 | 3.2 | 0.4 | 44 | 3.0 | 2.8 | 0.3 | 78 | 6.0 | 3.2 | 0.6 |
| 11 | 5.8 | 4.2 | 0.2 | 45 | 4.6 | 2.8 | 0.4 | 79 | 7.0 | 3.6 | 0.8 |
| 12 | 3.0 | 1.8 | 0.1 | 46 | 4.6 | 2.2 | 0.1 | 80 | 4.6 | 2.0 | 0.4 |
| 13 | 5.4 | 3.0 | 0.4 | 47 | 2.4 | 1.8 | 0.3 | 81 | 4.2 | 2.4 | 0.4 |
| 14 | 5.2 | 4.0 | 0.2 | 48 | 1.6 | 0.8 | 0.2 | 82 | 4.6 | 3.4 | 0.4 |
| 15 | 5.0 | 3.2 | 0.2 | 49 | 3.4 | 2.4 | 0.4 | 83 | 4.8 | 2.8 | 0.2 |
| 16 | 2.4 | 2.2 | 0.5 | 50 | 3.0 | 1.8 | 0.2 | 84 | 4.0 | 3.6 | 0.2 |
| 17 | 4.2 | 2.0 | 0.2 | 51 | 4.2 | 3.0 | 0.2 | 85 | 3.8 | 1.8 | 0.2 |
| 18 | 3.2 | 2.0 | 0.2 | 52 | 2.0 | 1.4 | 0.6 | 86 | 4.0 | 2.8 | 0.4 |
| 19 | 3.0 | 1.6 | 1.0 | 53 | 3.0 | 1.6 | 0.2 | 87 | 7.8 | 5.0 | 0.8 |
| 20 | 4.0 | 3.6 | 0.6 | 54 | 2.2 | 1.6 | 0.1 | 88 | 4.2 | 2.0 | 0.6 |
| 21 | 2.6 | 2.2 | 0.2 | 55 | 6.2 | 6.0 | 1.0 | 89 | 4.8 | 4.0 | 1.0 |
| 22 | 3.6 | 3.4 | 0.8 | 56 | 1.8 | 1.6 | 0.1 | 90 | 5.8 | 4.2 | 1.0 |
| 23 | 3.6 | 2.2 | 1.2 | 57 | 3.4 | 2.4 | 0.6 | 91 | 5.0 | 2.4 | 0.8 |
| 24 | 3.0 | 1.4 | 0.4 | 58 | 3.4 | 1.8 | 0.2 | 92 | 3.0 | 2.4 | 0.4 |
| 25 | 2.8 | 1.6 | 0.4 | 59 | 4.6 | 3.6 | 0.4 | 93 | 3.2 | 3.0 | 0.4 |
| 26 | 2.2 | 1.6 | 0.8 | 60 | 2.0 | 1.8 | 0.2 | 94 | 4.8 | 3.4 | 1.2 |
| 27 | 2.0 | 1.6 | 0.2 | 61 | 4.2 | 2.8 | 0.2 | 95 | 4.8 | 3.0 | 0.2 |
| 28 | 2.0 | 1.4 | 0.1 | 62 | 4.6 | 3.0 | 0.2 | 96 | 3.8 | 3.0 | 0.6 |
| 29 | 2.6 | 2.6 | 0.2 | 63 | 6.0 | 5.2 | 1.2 | 97 | 3.4 | 2.0 | 0.2 |
| 30 | 4.4 | 2.4 | 0.4 | 64 | 5.4 | 2.6 | 0.4 | 98 | 3.4 | 3.0 | 0.2 |
| 31 | 3.2 | 1.2 | 0.2 | 65 | 5.0 | 4.0 | 1.0 | 99 | 5.0 | 1.6 | 0.2 |
| 32 | 3.8 | 1.8 | 0.6 | 66 | 3.2 | 2.2 | 0.4 | 100 | 3.6 | 2.4 | 0.4 |
| 33 | 2.2 | 2.2 | 0.1 | 67 | 6.2 | 3.6 | 0.6 | | | | |
| 34 | 1.8 | 1.0 | 0.1 | 68 | 6.0 | 2.6 | 0.2 | | | | |

第352図2は楕形鍛冶炉である。周縁は発泡状を呈すが底は比較的平滑で楕形を呈す。粘土が少量付着し(図の網目部分)、表面は結晶化して光沢がある。大澤正己氏の分析によると、鉄素材は鉱石系に想定されるということである(7. 自然科学的分析、大澤報告参照)。

3は全体が発泡状を呈す軽い滓で、羽口溶解物¹⁰の可能性がある。鍛造剝片は全体的に黒みがかかるているのか特徴である。なお鍛造剝片は100点を任意抽出し、その法量の計測を行っており、その結果は別表の通りである。

さてこの鍛冶炉を含む加工段41の時期であるが、床面からの遺物の出土ではなく、また覆土からも弥生土器小片が出土しただけで、岡化できるような資料はなかった。よって時期は不明と言わざるを得ないが、周囲の遺構の状況からみると可能性があるのは弥生時代後期後半～後期末と5世紀末頃の2者である。ただ5世紀末頃の遺構は東斜面の北半の谷部にしか検出されておらず、その点で弥生時代後期の可能性が高いと考えられる。また鍛造剝片が黒っぽい色調を呈すのも、それを傍証するとの指摘もある¹¹。

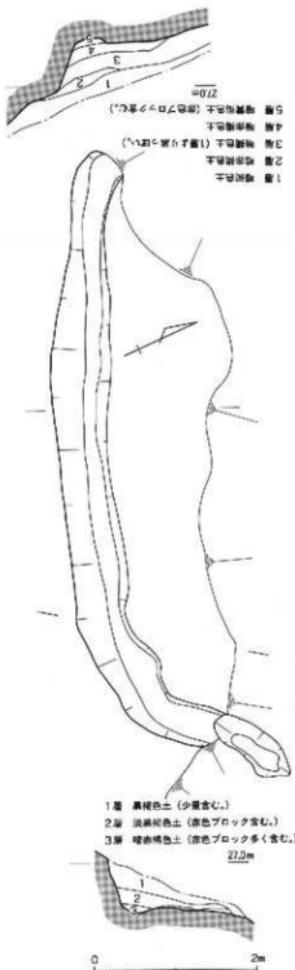
加工段42(第353図)

柳遺跡東斜面の北半谷部と南半急斜面の中間部あたり、標高26.5m付近で検出された加工段である。急斜面で遺構の残存状況は良くないが、壁の両端は幸うして検出されている。背後の壁はわずかながら湾曲するものは直線状に掘り込まれ、東側は斜面下方側にまわり込んで収束する。西側は大きく流出しているが、壁のまわり込みが観察でき、平坦面の長さは約7.3mとなる。平坦面の幅は斜面下方側の流出でつかめないが、検出時の残存幅は1.8mである。

壁際には底面の幅15cm～25cmの浅い溝がめぐっている。床面から柱穴等の遺構は全く検出されなかった。

加工段42出土遺物(第354図) 1は床面から出土した壺である。復元口径15.6cm、複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、口縁は外方に開いてまっすぐ立ち上がる。口縁外面にはくねった擬凹線を施し、端部はそのままの厚さで丸くおさめる。口縁は厚さ5mm前後でほとんど厚さを変えず、口縁部から頸部にかけての内面は、ほとんど偏曲点を持たずにまっすぐ伸びている。胴部は器壁が4mm前後のかなり薄めで、外面には櫛状工具による平行沈線の間に刺突状の連続弧状沈線を互い違いに施している。橙褐色を呈す。

2～5は覆土内出土の土器である。2は復元口径20.0cmを測る複合口縁壺である。口縁は外反して立ち上がり、口縁の



第353図 加工段42実測図 S=1/60

厚さは5mm～8mm、端部に向かって徐々に細くなっている。口縁端部付近の外面には、幅4mmほどの面を設け、そこには1条の浅い沈線が施されている。淡灰褐色を呈す。3は復元口径20.0cmの甌である。複合口縁部の稜は横方向につまみ出し、口縁は外方にまっすぐ立ち上がる。口縁の厚さは6mm前後、口縁端部は丸くおさめる。淡褐色を呈す。4は復元口径18.8cmの複合口縁甌である。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。淡褐色を呈す。

5は鼓形器台である。受け部として圓化しているが、器面が風化して調整が不明瞭なため、天地は逆転する可能性がある。外面には擬凹線を施している。淡赤褐色を呈す。第352図1は黒色の堆積岩の玉石状小円盤である。擦痕等は認められないが、通常この辺りで産出される石ではなく、何らかの目的で搬入されたものだろう。

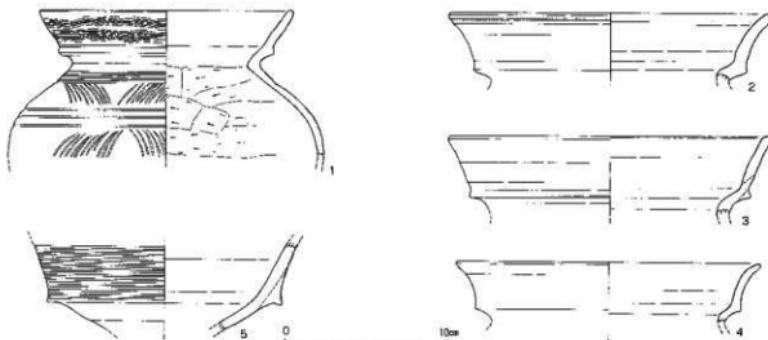
加工段42の時期であるが、床面出土の甌1の特徴は塩津2期と考えられるが、口縁端部に膨らみがみられることなど新しい要素もみられる。覆土の土器も、甌はいずれも擬凹線はみられないことも新しい要素である。こうした状況を勘案して、加工段42の時期は、塩津2期～塩津3期と幅を持って考えておきたい。

加工段43（第355図）

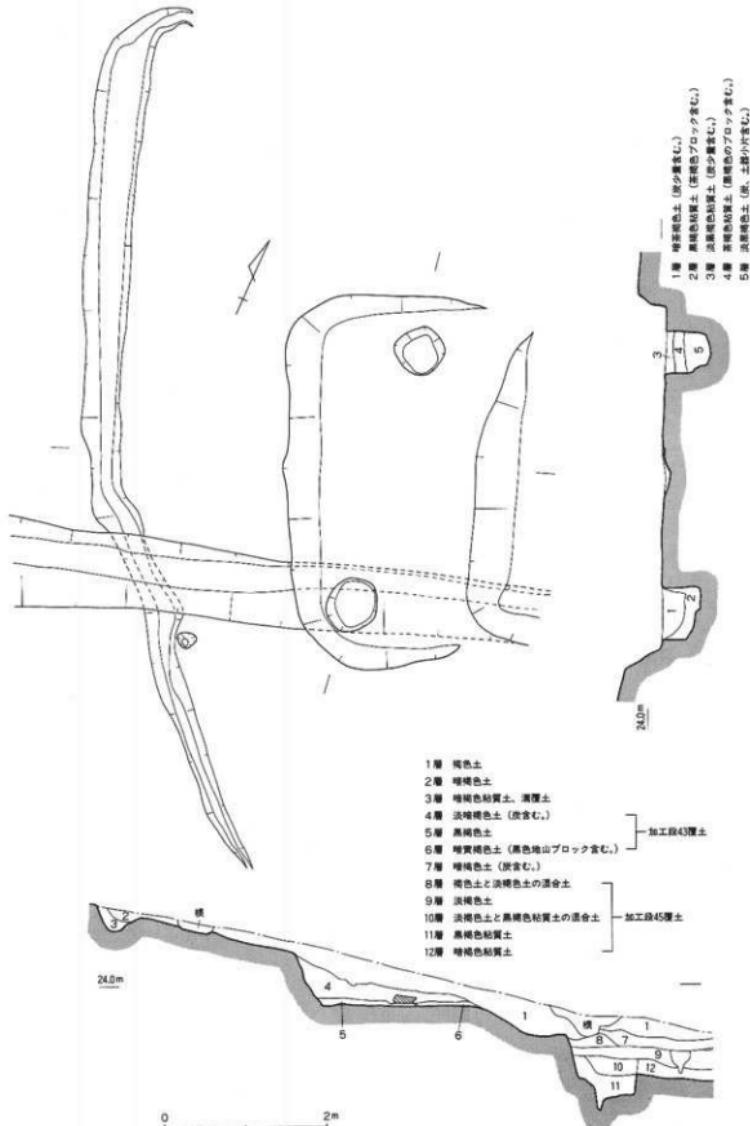
柳道跡東斜面北半の谷部、標高約24mの比較的緩やかな斜面で検出された加工段である。斜面下方側は失われているが、長さ4.2mの隅円方形もしくは隅円長方形に加工されたものだろう。規模、形態は竪穴住居跡のそれに近いが、壁体溝が全く検出されていないことから、加工段とした。

床面からは2穴の柱穴状ビットが検出された。直径が60cm～65cmと大形のビットで、深さは45～50cmを測る。いずれも断面の土層には柱痕状の層は認められず、特に北側のビットは水平に土層が堆積していて、意図的に埋められた可能性もある。柱間は中心で測って3.3mであるが、柱穴を結ぶラインと加工段の壁の方向にはずれがある。これらの柱穴と加工段43が全く無関係とは考えにくく、加工段とは方向のずれる建物が建っていた可能性を考えておきたい。

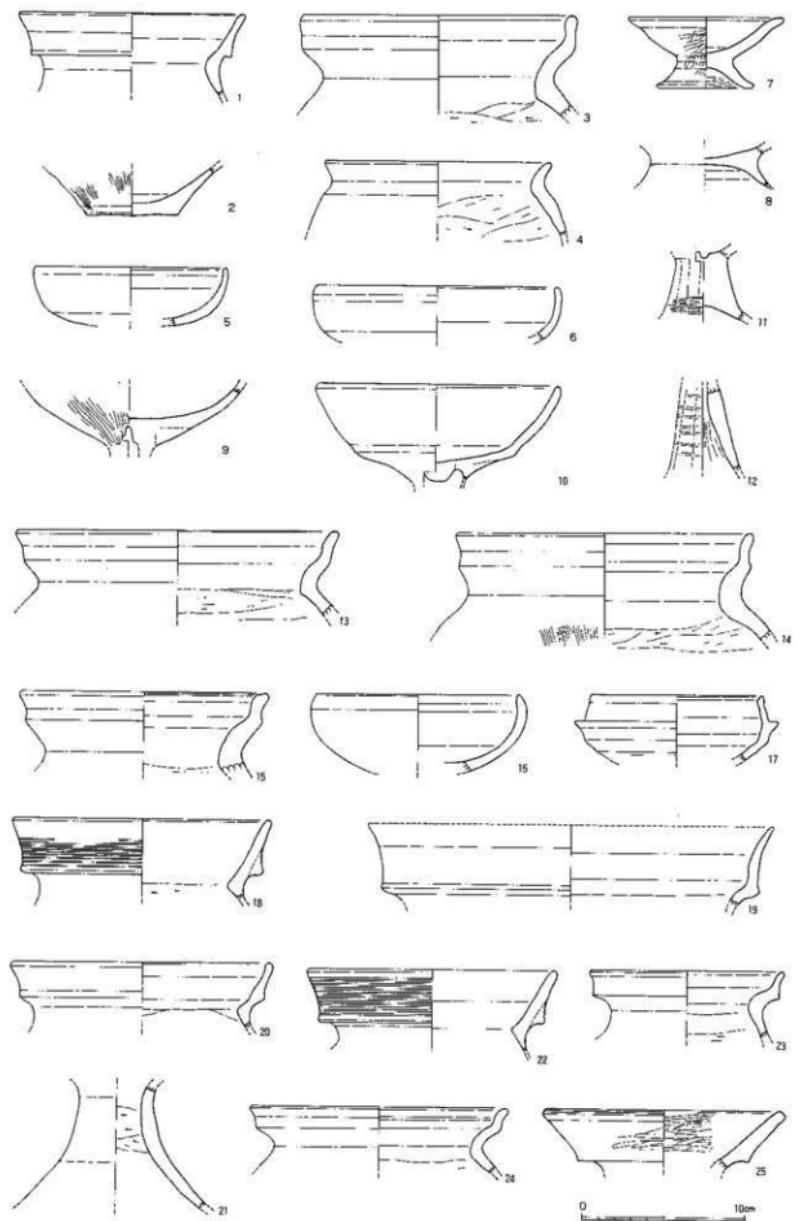
加工段43の上方（西側）約3mの部分に、加工段33を大きく取り囲むように溝が検出された。この溝は全長11mを測り、北端はほぼ直角にまわり込んで収束するが、南端は自然に消滅してさらに



第354図 柳道跡加工段42出土遺物実測図 S=1/3 (1…床面、2～5…覆土)



第355図 柳遺跡加工段43実測図 S=1/60



第356図 横造跡加工段43出土遺物実測図
 $S = 1/3$ (1~12…覆土、13~18…上方溝内、19~21…溝東下方、22~25…加工段43下方)

続いていたかも知れない。溝の北半は等高線に沿ってほぼ直線的に伸びているが、南半は若干折れ曲がって幅も狭くなる。

溝の性格は、加工段43の周囲を区画する、あるいは周囲からの雨水等の浸入を防ぐためのものと考えるのが順当だろう。溝と加工段43を縦貫して下に続く溝は、表土段階から観察されたものであり、かなり新しい時期に掘られた溝である。

加工段43出土遺物（第356図） 1～12は加工段43の覆土内から出土した上器である。1は復元口径14.0cmを測る弥生土器甕である。複合口縁部の稜部分は若干下方に垂下し、口縁外側は外湾する。口縁部から頸部にかけての内面には偏曲点がなく、ほぼまっすぐ伸び、口縁端部は丸くおさめている。2は弥生土器甕もしくは壺の底部である。明瞭な平底で、復元底径5.8cmを測る。

3は復元口径17.2cmを測る土師器甕である。頸部から口縁部にかけて丸みを持ちながらも屈曲し、複合口縁の形態を残している。口縁端はやや膨らんで丸くおさめている。暗茶褐色を呈す。4は復元口径14.0cmの土師器単純口縁甕である。口縁は外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。5は復元口径12.0cmの土師器环である。ポール状を呈し、端部は薄くなつて内側にわずかに面を設ける。表面には赤色顔料が塗られている。6は復元口径14.8cmを測る土師器环である。底部付近は失われているが、ポール状を呈すのだろう。橙褐色を呈す。

7は口径9.6cm、底径6.0cm、器高4.4cmの弥生上器低脚環である。口縁があまり広がらないタイプで、口縁端は外方に折り曲げるようになって先端は丸くおさめている。脚台部は「ハ」字状に開き、端部はやや開いて先端に面を設ける。外面および脚台部内面にはヘラミガキがみられる。橙褐色を呈す。8は短い脚台がつくもので、台付き鉢の類であろうか。

9は土師器高环である。环部は上半を欠損しているが、ポール状の环部であろう。脚部との接合は差し込み法と考えられ、底部下面の中心には2段に孔が開いている。外面にはハケメがみられる。橙褐色を呈す。10は口径15.2cmを測る土師器高环である。环部は中途で折れ曲がって稜線を持つタイプで、口縁端部は丸くおさめる。脚部は环部に差し込まれていたらしく、ちょうど脚部が剝げて外れた状態である。暗橙褐色を呈す。11は軸部が完全に粘土で充填された高环である。脚柱部の接合部付近の径は3.2cm、外面には細かなヘラミガキがみられる。环部の底中心には小孔がみられる。暗褐色を呈す。12は高环の脚柱部で、内面にはシボリ痕がみられる。橙褐色を呈す。

加工段43上方溝出土遺物（第356図13～18） 13は復元口径20.0cmを測る上師器甕である。頸部と口縁部の間がわずかに屈曲し、辛うじて複合口縁の痕跡を残す個体である。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。暗褐色を呈す。14は復元口径18.4cmを測る土師器甕である。頸部は9mm～13mmと分厚だが、段を境にして立ち上がる口縁は器壁が6mm前後と比較的薄く作っている。口縁はやや外反気味で端部は丸くおさめる。暗褐色を呈す。15は復元口径15.4cmを測る土師器甕である。頸部と口縁部の間には稜を持ち、複合口縁の形態を残している。口縁は外反して立ち上がり、上端には浅い凹線がみられる。暗褐色を呈す。

16は復元口径12.6cmを測る土師器环である。ポール状を呈し、口縁は内側に湾曲して、端部を丸くおさめる。淡橙褐色で、白色の縞が層状に入る胎土である。17は復元口径10.6cm、復元受け部径12.6cmを測る須恵器杯身である。口縁はわずかに内傾して立ち上がり、端部はやや膨らんで、内側に微妙に段を設ける。淡青灰色を呈す。18は径の復元が不正確だが、口径16cm前後の弥生土器甕である。口縁外側には擬凹線を施して外湾している。口縁部から頸部にかけての内面は明確な屈曲点

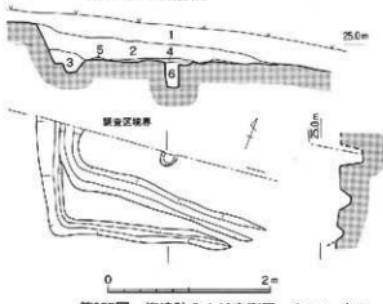
がなく、そのまま伸び、口縁端部は丸くおさめる。

加工段43周辺出土遺物(第356図19~25) 19~21は加工段43の南東側下方で出土した土器である。19は径の復元は不正確だが、口径25cm前後の弥生土器複合口縁甕である。口縁は外反しながら立ち上がり、端部に向かって次第に先細りとなる。淡橙褐色を呈す。20は径の復元は不正確だが、口径が16cm前後となる弥生土器甕である。口縁外面は外湾し、端部は膨らんで丸くおさめる。白っぽい淡褐色を呈す。21は高環の脚部であろう。下方に向かって次第にスカート状に開く脚部で、内面上半にはヘラケズリがみられる。赤味のある淡褐色を呈す。

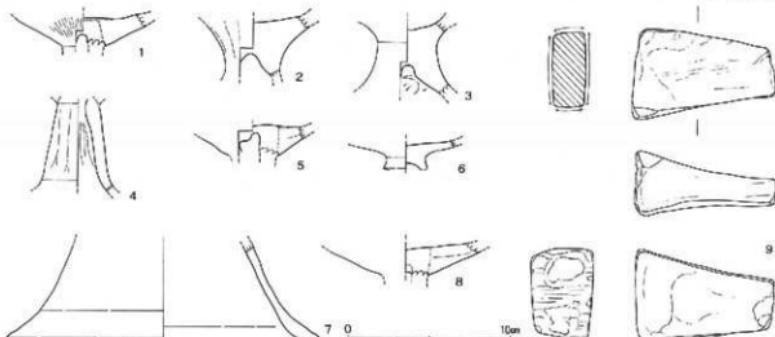
22~25は加工段43の下方から出土した土器である。明確な出土点をおさえていない土器で、あるいは下方の加工段44に伴う遺物の可能性もある。22は復元口径15.5cmを測る弥生土器複合口縁甕である。口縁外面には擬凹線を施し、外湾している。口縁部から頸部にかけての内面は明瞭な屈曲点がなく、そのまま胴部との境にいたり、胴部との間は屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。白っぽい淡褐色を呈す。23は復元口径12.0cmを測る複合口縁甕である。口縁は細身となって外反して立ち上がる。端部は丸くおさめている。24は復元口径16.0cmを測る甕である。口縁部と頸部の境は稜線を持ち、複合口縁の形態を取る。口縁は外反して短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。25は器台であろうか。復元口径15.0cm、内外面にはヘラミガキを施し、口縁端部には1条の浅い凹線がみられる。

加工段43の時期は、覆土から多く出土する土器から、古墳時代中期とするのが妥当だろう。上方溝が伴う造構だとすれば、須恵器が出土していることからさらに限定でき、大谷編年出雲1期³⁰で5世紀末と考えられる。ただ覆土内や加工段の周辺から、かなりの弥生土器も出土している。明確な造構は検出されていないものの、当該期の

- 1号 暗褐色土
- 2号 褐色褐土 (厚さ約1.5cm)、油絞りブロック状
- 3号 黄褐色土 (厚さ約1.5cm)、小塊のブロック状
- 4号 地上の黄褐色土と表面に汚れが見られた土層 (厚さ約1.5cm)
- 5号 地上と黄褐色土 (厚さ約1.5cm)
- 6号 4層と共に、土中に砂層あり。



第357図 柳遺跡 S I 12実測図 S = 1 / 60



第358図 柳遺跡 S I 12 · S I 12出土物実測図 S = 1 / 3

遺構が近辺に存在していた可能性もある。

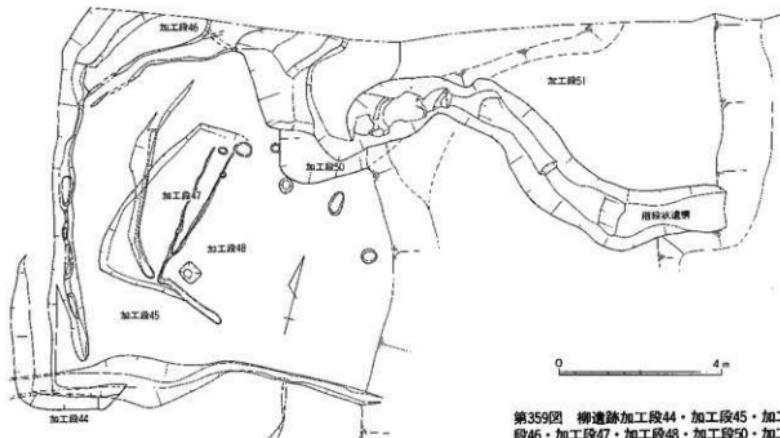
S I 12 (第357図)

柳遺跡東斜面北半の谷部、調査区北端の標高25m付近から検出された竪穴住居跡である。加工段43上方溝の北側にあたる。遺構の大部分は本調査区に統いており、わずか一部が検出されたに過ぎないが、ほぼ直角に曲がる溝が2条重なって検出された。特に外側の溝の背後には壁が残り、溝はほとんど丸みを帯びずに屈曲している。溝の底面幅は5cm前後、深さは10cm弱である。内側の溝は、外側の溝に比べてコーナーに丸みがあり、幅も若干広いことから、性格が異なるものかも知れない。

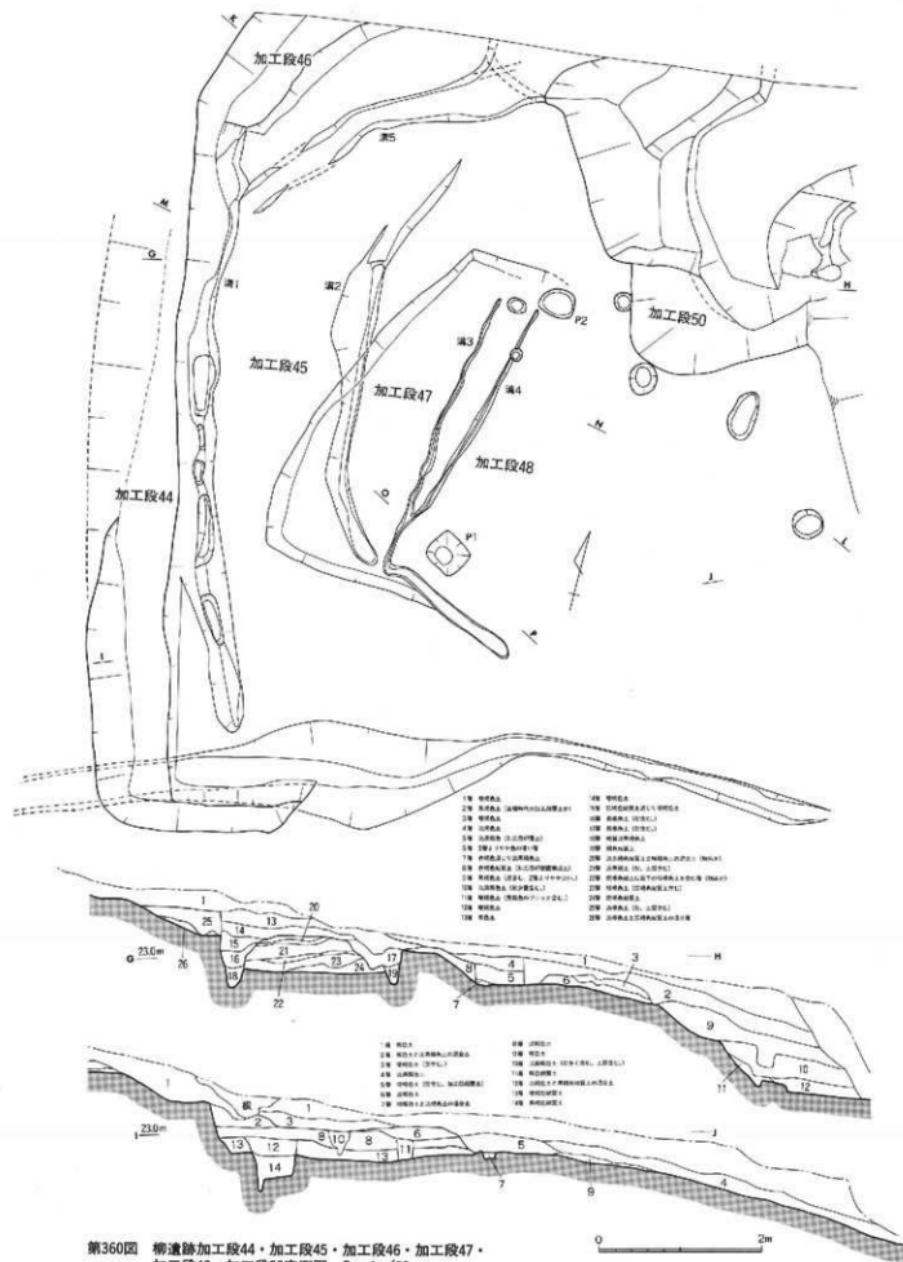
床面からは壁際に半分かかって柱穴状のピットが1穴検出された。直径15cm、深さ35cmを測る。床面には貼床状の土層が認められる。この遺構の性格は、外側の壁の形態や溝のあり方、柱穴の位置関係などと、後述する土器から想定される時期を考え合わせると、方形の竪穴住居を考えるのが妥当であろう。内側の溝も建て替えに応じた可能性もあるが、前述のように若干様相が異なり、違う遺構の重なりと考えるべきであろうか。

S I 12出土遺物 (第358図) 1~6はS I 12の覆土から出土した土器である。1~5は高環である。1は接合部付近の破片で、脚部と環部は差し込み法で接合する。底部の下面には径6~7mmほどの孔がみられ、外面にはハケメを施す。2は接合部付近の厚さが2cm前後と、分厚い個体である。風化して調整等は不明瞭で、淡褐色を呈す。3は接合部の厚みが2.2cmと、非常に厚い高環である。底部下面には径9mm、深さ6mm程の孔が開き、脚据に向かって開く。淡褐色を呈す。4は脚柱部である。接合部付近の径が2.6cm、内面にはシボリ痕がみられる。橙褐色を呈す。6は低脚環であろうか。7~9はS I 12南側の緩斜面から出土した遺物である。7は鼓形器台の脚台部であろう。8は高環の接合部付近で、接合は差し込み法による。9は白っぽい緻密な石材の砥石である。

S I 12の時期は、出土した高環の特徴から、古墳時代中期と考えられる。



第359図 柳遺跡加工段44・加工段45・加工段46・加工段47・加工段48・加工段50・加工段51・階段状造構 配置図 S=1/120



第360圖 柳遺跡加工段44・加工段45・加工段46・加工段47・
加工段48・加工段50實測圖 S = 1 / 60

加工段44・加工段45・加工段46・加工段47・加工段48・加工段49・加工段50・加工段51・階段状遺構の配置

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約23m付近の緩斜面に、加工段44～加工段49が複雑に重なりあいながら検出された。加工段44は加工段43直下に検出されたもので、加工段43より新しく、またすぐ下方に検出された加工段45よりも新しい。加工段45は掘削と盛土を繰り返した複雑な構造で、南側は後世の溝と同化してしまって全容はつかめていない。加工段46は加工段45の北側の一端高い部分にある。加工段47と加工段48は、加工段45の東側を切って作られた遺構で、豊穴住居跡の可能性もある。加工段45～加工段48の緩斜面の東側あたりに加工段50が切り込まれ、その部分から標高約20mの付近あたりまで、蛇行して溝状に続く階段状遺構が検出された。加工段51は、階段状遺構に切られる形で、標高約21m付近で検出されている。加工段49は加工段45～加工段48が検出された緩斜面の南東側、標高約22m付近で検出された。

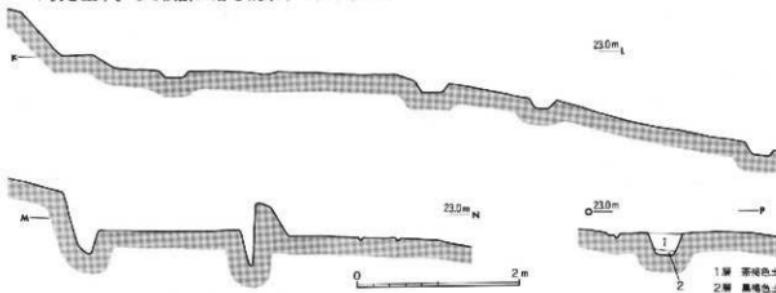
加工段44（第360図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約23m付近の遺構群の中で最も上方で検出された加工段である。加工段43の東側直下にあたり、加工段45がすぐ下方に存在する。上下を遺構で挟まれているため、狭い幅でしか検出できず、全容は不明だが、背後の壁をほぼ直線状に掘り込み、南側の端はほぼ直角状に折れ曲がって収束している。北側は不明瞭で検出できなかったため、長さ等は不明である。隣接遺構との前後関係は、加工段43の覆土を切っているため、加工段43より新しく、加工段45が加工段44の覆土を切っていないため、加工段44が新しい可能性が高い。加工段43が古墳時代中期であることから、この時期より新しい遺構であることは間違いない。

加工段45（第360図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約23m付近で検出された遺構である。前述したように、切り土、盛土、溝が交錯した複雑な構造で、遺構としての単位をどこで区切るかも明瞭にしがたい。ただここでは背後の壁の範囲と、平行する2本の溝（溝1、溝2）で囲まれた範囲を加工段45として取り扱いたい。

さて加工段45の最終的な調査後の形態は、細い溝が壁際にはしる長さ7.5m、幅1.8mほどの落ち込み状を呈す。ただ横断土層を観察する限り、状況はそう単純ではない。第360図G-H断面をみると、



第361図 柳遺跡加工段45・加工段46・加工段47・加工段48断面実測図 S = 1 / 60

まず1.8m前後の幅で地山を削り込んで平坦面を作り出している。その後、何らかの理由でその落ち込み部分に再び土砂を入れて元の高さ付近にまで盛り上げている。さらにその後、落ち込みの壁に沿って、盛土の上面から細くて深い溝が掘り込まれているのである。

しかもことが複雑なのは西側の溝1はほぼ直線状に伸びているものの、東側の溝2は溝1と平行にはしる部分は3m程の間で、その両側は微妙に東側へ折れていっている。さらに加工段47、48が切りあって、造構の両側では溝と盛土の関係も明瞭に検出できなかったのが実状である。

一応想定できる造構の範囲と規模を示すと、南端は壁が後世の溝と重なって不明瞭であるが、後世溝より南側には伸びていないことから、およそ加工段44の壁に近い辺りで収束していたことが想定される。一方北側は西壁際の溝1が加工段46と切りあって明瞭に終結しており、その部分を造構の端とすると、長さは8m前後となる。ただし、加工段46を切る壁が東側の溝2とほぼ平行していることから、あるいはこの壁が加工段45の北側の壁になる可能性もある。

溝1は、北側の約5.7mの間は壁際をはしり、わずかに東側に折れて壁際を離れ、約2m先で収束している。溝の底は平坦ではなく深さは部分によって異なり、確認できる範囲で最も深いところでは1mにもなる。底面の幅は狭いところでは5cmにも満たないため、非常に細くて狭い感がある。溝2は前述したように溝1から1.8m前後離れて掘り込まれ、両端は東側に折れて消滅している。溝の底面の深さは、溝1と同様に一樣ではなく、細く狭い。北側の壁に沿って、幅が30cm～50cmの比較的広い溝が検出されている(溝5)。この溝が加工段45に關係するものかどうかは不明だが、北側の壁とは微妙に方向を違えており、別の加工段に伴うものの可能性が高いだろう。

壁と壁の間の盛土状の土砂は、斜面の傾きと反対方向に傾いて堆積しているため、自然の堆積でないことは明かである。盛土の中には貼床とおぼしき薄い粘土層もみられ(第360図G-II断面20層、22層)、溝が掘削される以前に何らかの形で利用された可能性がある。

加工段45出土遺物(第362図) 1、3は加工段45の盛土以前の地山床面から出土した土器である。1は復元口径16.0cmを測る弥生土器甕である。複合口縁部の稜はわずかに横方向に引き出し、その直上は若干直立した後、外方に折れて立ち上がる。複合口縁部の稜直上は器壁が2.5mmと非常に薄く、その上方は4.5mmの厚みとなる。口縁端部は上端に微かながら面を意識したつくりとなっている。口縁外面にはわずかの幅で、細くて浅い擬円線がみられる。胴部内面は砂が右に動くヘラケズリを施す。3はほぼ丸形の鼓形器台である。口径(復元)24.7cm、底径20.5cm、筒部径11.6cm、器高13.0cmを測り、筒部が縮約し全体に器高の低いタイプである。受け部の内面はヘラケズリの後ヘラミガキを施し、口縁付近はわずかに折れて外方に開いている。口縁先端は丸くおさめている。白っぽい淡褐色を呈す。

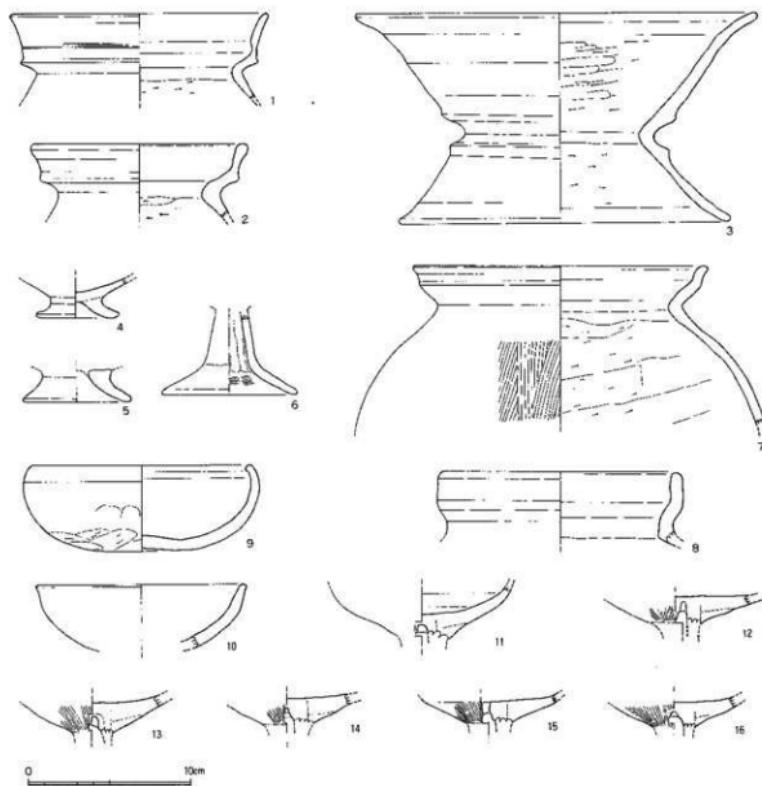
2と4～16は盛土より上方の覆土から出土した土器である。2は復元口径13.4cmを測る弥生土器複合口縁甕である。口縁外面は外湾し、端部は膨らんで丸くおさめる。4、5は弥生土器低脚甕である。4は底径5.2cm、淡黄褐色を呈す。5は底径6.7cm、橙褐色を呈す。6は高杯の脚部である。脚柱部の最小径2.1cm、底径8.4cm、中途から裾を大きく広げて脚端部に至る。厚さが4mm～5mmと薄手で、脚柱部の内面にはシボリ痕が、脚裾部の内面には放射状のハケメがみられる。淡橙褐色で、白色の縞が層状にはいる。

7は復元口径18.2cmを測る土師器甕である。頸部と口縁部の間に稜線を設けた複合口縁の形態を残すもので、口縁は外反して短く立ち上がる。胴部は上半しか残存しないが、よく膨らみ球形に近

い形態を思わせる。外面には粗いハケメを施している。8は復元口径14.5cmの土師器底である。頸部から口縁部にかけて、丸みを帯びながらも辛うじて稜を残し、痕跡的な複合口縁を呈す。全体に分厚でシャープさがない。口縁はほぼ直立し、端部は丸くおさめている。淡暗褐色を呈す。9は口径13.6cmを測る土師器底である。ボール状を呈し、口縁は内側に湾曲させる。底部外面にはヘラケズリ痕がみられる。淡赤褐色を呈す。10は復元口径13.0cmを測る底である。体部はボール状を呈すと思われ、口縁端はやや細くなつてわずかに外方にアクセントを付けている。

11~16は高环の接合部付近である。いずれも差し込み法によって環部と脚部を接合しており、環部底下面には小孔がみられる。外面にはハケメがみられるものが多い。

加工段45の時期であるが、盛土前の床面遺物は塙津編年5期に併行するものであり、盛上後の溝の掘削なども基本的にその時期と考えるのが妥当だろう。覆土出土の古墳時代中期の土器は、上方の加工段43、加工段44に伴うもの可能性が高い。



第362図 柳遺跡加工段45出土遺物実測図 S=1/3 (1, 3…床面、2, 4~16…覆土)

加工段46（第360図）

加工段45の北側に一段高い平坦面が検出されており、これを加工段46と呼ぶ。平坦面を作り出した壁は、加工段45の北側の壁とはほぼ平行して伸びている。加工段45よりも20cmばかり高い位置に床面があり、床の幅は40cmほどしか残存していない。加工段45との前後関係は、両者の間の土層断面をとっていないので不明である。

加工段47（第360図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約23m付近で検出された造構群の中で、加工段45の東側の壁と溝（溝2）を切って形成された造構である。斜面下方側は検出できていないので、全容は不明だが、長さ4.1m程の不正な方形を呈す加工段である。背後の壁はわずかに弧を描いて掘り込まれ、北側はやや鈍角に、南側はやや鋭角に壁がまわり込んでいる。東側に加工段48があるため不明瞭だが、壁際の溝や床面に柱穴などは検出されていない。

加工段47出土遺物（第363図1、2）いずれも覆土より出土した土器である。1は復元口径21.8cmを測る壺である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、口縁はやや外方に開いてまっすぐ立ち上がる。口縁部の厚みが4mm～5mmと薄くてシャープなつくりである。口縁端部は外方に若干膨らんで、上端には微かながら面を設ける。胴部内面は砂が右に動くヘラケズリがみられる。白っぽい淡黄褐色を呈す。2は復元口径24.0cmを測る壺である。複合口縁部の稜は横方向に薄く引き出し、口縁は若干外反しながら立ち上がる。口縁の厚さは4mm～5mmと薄いつくりで、上端は丸くおさめるというより、面を意識したつくりとなっている。淡黄褐色を呈す。

加工段47の時期は、床面遺物はないものの覆土出土の2点の壺が共通した特徴をもっており、この遺物の時期と考えて問題ないと判断している。これらの土器は塩津5期と考えられる。

加工段48（第360図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約23m付近で検出された造構群の中で、加工段47の東側で検出された細い溝で区画された部分を加工段48と呼ぶ。加工段47との前後関係は、土層断面をみると加工段47の覆土を切っており、加工段48が新しい。

溝は2本検出されており、西側の溝を溝3、東側の溝を溝4と呼ぶ。溝3と溝4は若干方向を離れて伸びており、南側で交差している。交差後は見かけ状は1条の溝となってやや伸びた後、ほぼ直角に東に折れている。一条になった後の方向は溝3と同方向で、曲がった直後までは溝3と直交する方向を示している。ただ東側に折れて伸びていくと直交するのは溝4となり、溝3は折れた後の溝を検出できていないと考えるべきだろう。いずれにしても2条の溝はコーナーをほぼ同じくして作り替えられたものと考えるのが妥当であろう。

溝の内側からはピットがいくつか検出されているが、特にP1とP2はその位置関係から加工段48に対応している可能性が強い。溝のあり方や形態から、方形の竪穴住居跡の可能性もあるが、柱穴の位置は一般例に比して壁に近すぎるのが否定的な要素である。

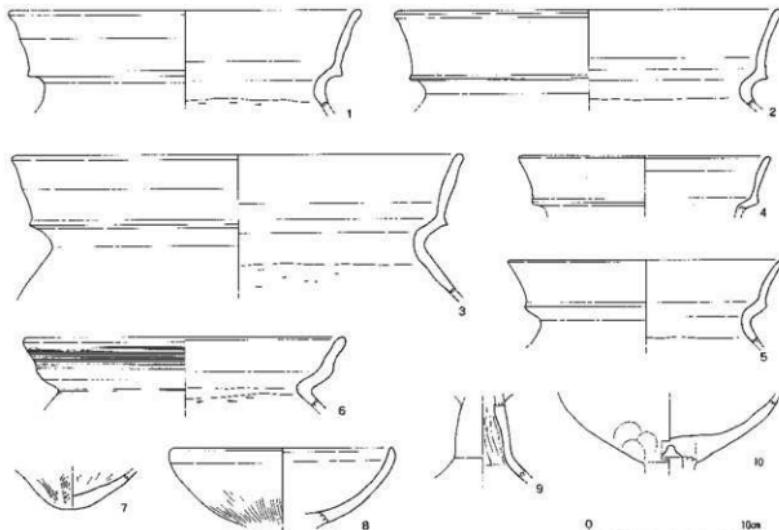
加工段48出土遺物（第363図3～10）いずれも覆土内より出土した土器である。3は復元口径28.0cmを測る大形の壺である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、その直上は薄くなつてさらに上方へはまっすぐ立ち上がる。口縁端部は外方に向けてに若干のアクセントを付け、上端には面を設け

る。側部内面は砂が右方向に動くヘラケズリを施す。淡黄褐色を呈す。4は復元口径15.6cmを測る甕である。複合口縁部の稜はわずかに横に伸び、口縁はやや外湾気味に立ち上がる。口縁の厚さが2.5mm~4mmと非常に薄いつくりで、端部は丸いものの上端に微ながら面を意識しているように見える。

5は径の復元が不正確だが、口径17cm前後の甕である。口縁はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁の厚さは3mm~4mmで薄く、特に頸部との厚みの差が目立つ。6は復元口径20.0cmを測る甕である。頸部から口縁部にかけて明瞭な稜を持たず、丸みを帯びているが、これは稜の拡張部が剥落した結果の可能性がある。口縁部の外面には擬凹線を施して外溝し、端部は丸くおさめている。7は甕または壺の底部である。丸底に近いが、径2cmほどの微かな底が残存する。外面にはハケメがみられる。

8~10は土師器高环である。8は復元口径14.0cm、稜を持たないボール状の環部である。外面にはハケメがみられ、口縁端部は丸くおさめる。9は脚柱部で、内面にはシボリ痕が観察される。10は接合部付近で、脚部と環部の接合は差し込み法、環部底の下面には小孔がみられる。

加工段48の時期は、床面遺物がないため覆土出土の遺物を想定するしかない。覆土出土の土器には時期幅があるが、大きく塩津3期前後のもの（3~5）と古墳時代中期のもの（8~10）に分かれる。加工段47を切っていることやコーナーに丸みの少ない方形という平面形を考慮に入れると、古墳時代中期と考えるのが妥当であろう。塩津3期前後の遺物は、西側の加工段47と加工段48にかかる遺物の混入と考えたい。



第363図 柳遺跡加工段47・加工段48出土遺物実測図 S=1/3 (1, 2…加工段47出土、3~10…加工段48出土)

加工段49（第364図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約22m付近で検出された加工段である。標高23m付近に連なる遺構群（加工段44～加工段48）の南東側下方にある。平坦面を作り出す背後の壁は、弧状に掘り込まれている。南側は斜面下方側にまわり込んで流出しており、北側は後世の溝に切られ、その先は検出されていない。よって遺構の全体像は不明である。この溝は、表土の段階から確認できていたもので、かなり近い時期に形成されたものと考えられる。

検出時の残存長は4.5m、残存幅は2.1mを測る。實際には、底面の幅15cm程の溝が確認されたが、ベルト内で確認されたのみで平面的には検出できなかった。床面および流出した斜面にピットが検出されているが、建物を構成するような並びはみられない。加工段の南側には長さ1.7mの弧状の溝状の遺構とピットが、東側の斜面にも直線状に1.8m程伸びる溝状遺構が検出されているが、本遺構と直接関係するものではないだろう。

加工段49出土遺物（第365）

図1) 加工段49から出土

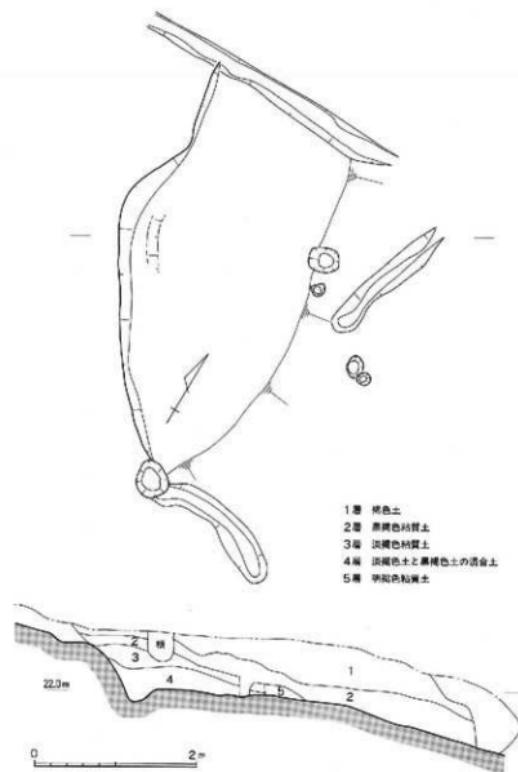
した遺物で図化できたのは、

第365図1だけである。1は

径の復元が不性格だが、口
径16cm前後となる甕である。

器壁が2.5mm～3.5mmと非常
に薄い土器である。複合口
縁部の稜は、横方向に若干
張りだし、口縁はまずわず
かの間直立した後、やや外
方に開いてまっすぐ立ち上
がる。口縁端は次第に先細
りとなり、わずかに外方に
折れている。先端部は丸く
おさめている。淡褐色を呈
す。

加工段49の時期は、1の
甕が非常に薄手で、口縁部
の先端を外方により曲げる
ような調整を行っているこ
とから、塩津編年5期と考
えられる。



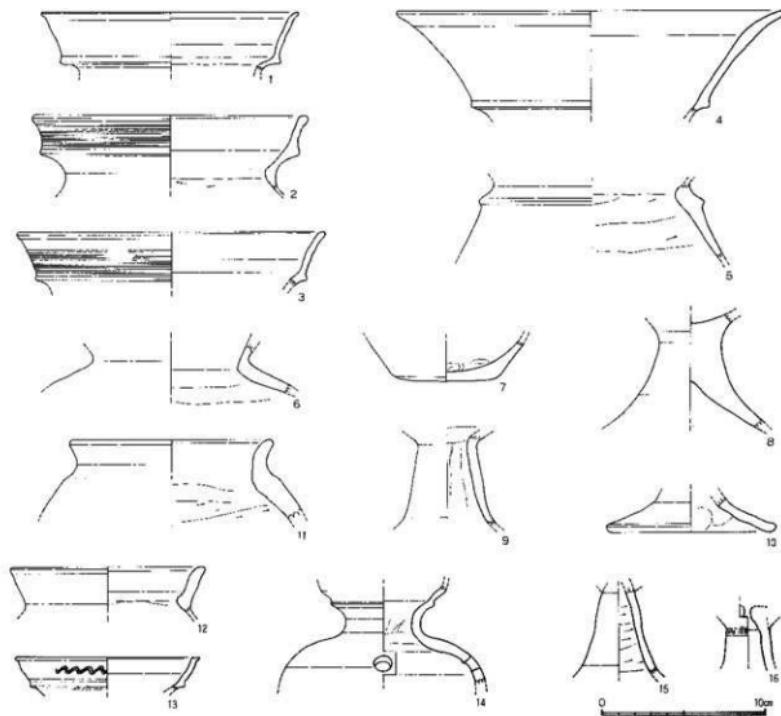
第364図 柳遺跡加工段49実測図 S=1/60

加工段50（第360図）

柳遺跡東斜面谷部、標高約23m付近で検出された造構群の中で、北東端、加工段48の北側の下方で検出された造構である。ちょうどその辺りから下方に向かって検出された階段状造構（後述）と重なって検出され、しかも階段状造構よりも高い位置に床面の高さがあったために、平面的に造構を追うことが出来なかった。結局明瞭な形で検出できたのは、南端の壁がまわり込む部分だけで、およそコーナーが丸みのある直角に壁が収束していたのがわかる。ただ調査段階で、階段状造構の覆土を切って壁が掘り込まれていたことが確認されており、階段状造構よりは新しいものであることは明かである。

加工段50出土遺物（第365図2～16） いずれも加工段50の覆土より出土した上器であるが、前述したように平面的に加工段50の床面を捉え切れていおらず、その下に存在する階段状造構の覆土の遺物も一緒に取りあげた可能性があることを最初に断っておく。

2は復元口径17.0cmを測る弥生土器複合口縁甕である。口縁外周には擬凹線を施して外湾している。口縁端部は膨らんで、上端に面を設けている。白っぽい淡褐色を呈す。3は径の復元が不正確



第365図 柳遺跡加工段49・加工段50出土遺物実測図 S=1/3 (1…加工段49出土、2～16…加工段50出土)

だが、口径19cm前後となる弥生土器複合口縁甕である。器壁の厚さが3mm~4mmと薄手である。口縁は外方に向けてほぼまっすぐ立ち上がり、口縁外面の下半には擬凹線がみられる。口縁端はわずかに外方に折れるようにして丸くおさめている。

4は鼓形器台であるが、風化のため調整が不明瞭で、受け部として圓化しているが天地は逆転する可能性もある。復元口径は23.9cmと径がかなり大きく、高さが比較的低いタイプである。5は鼓形器台の脚台部である。筒部の復元径は12.0cmで、3と同様に径の割に高さが低いタイプとなるだろう。6は「く」字状に口頸部が折れる甕であろうか。復元頸部径が9.6cmを測り、胴部内面には接合痕とおはしきラインが観察できる。7は弥生土器の甕または壺の底部である。復元底径6.4cmの、やや曲面をなす平底で、内面には指頭痕痕がみられる。8は脚柱部がほぼ粘土で充填された高坏である。脚柱部最小径3.8cm、脚部は下方に向かって次第に裾広がりに開いていく。黒色、褐色の砂粒を含んでいる。9は弥生土器高坏の脚柱部である。接合部付近の復元径は3.7cm、坏部の底は円盤が充填されていたと考えられ、内面は横方向のヘラケズリを施している。

10は復元底径10.4cmを測る高坏の脚柱部である。淡橙褐色を呈す。11、12は土師器の単純口縁甕である。11は復元口径12.6cm、分厚で口縁は外反して立ち上がる。12は復元口径11.8cm、口縁は外方にまっすぐ立ち上がる。胴部はかなり薄いようである。15、16は土師器高坏である。脚柱部の最小径が2.0cm、比較的薄手のつくりである。16は脚柱部径2.6cm、坏部の底に小孔が貫通している。外面にはハケメがみられ、橙褐色を呈す。

13、14は須恵器である。13は甕の口縁部であろう。頸部との境には段を設け、外面には梅描波状文を施す。口縁端部は薄く外方につまみ出して、上端は四線状の段となっている。頸部にも櫛描波状文を施している。青灰色を呈す。14は甕である。復元胴部径が12.6cm、頸部最小径が4.6cmで、口縁端部は失われているが、口径が胴部よりかなり小さくなるタイプである。波状文等はみられない。堅緻で表面は青灰色、断面は赤褐色を呈す。

覆土出土の土器をみると、大きく二つの時期のまとまりがみられる。ひとつは塙津5期の上器で3~9が対応する。もうひとつは古墳時代中期のもので10~16が対応する。前者の時期の土器は、加工段50の下にある階段状造構の時期と同じである上、外来系土器の可能性のある6、8と同系統の土器も階段状造構から出土している。前述したように、階段状造構の覆土上の土器も加工段50覆土の土器と一緒に取りあげた可能性が高く、これらは加工段50とは直接関わらないと考えた方がよいだろう。となれば後者の古墳時代中期が加工段50の時期の可能性が高いことになる。大谷編年出雲1期¹⁰の須恵器も出土していることから、時期は5世紀後半に限定できるだろう。

階段状造構（第359図、第366図）

柳跡跡東斜面北半谷部の調査区北端近く、標高約23m付近の造構群辺りから標高約19m付近の加工段57上方あたりまで蛇行しながら続く溝状の造構である。この造構は、東側は加工段57付近の壁(表土から壁面が観察されているのでかなり新しい加工であろう)で断ち切られ、西側は調査区外に続いている。この間の検出された長さが差し渡して約14mで、実際は蛇行しているのもう少し長い距離となる。

この造構の大半は、平面的には溝状を呈し、西上方側で幅が広がって加工段状の数段の平坦面につながる形となる。東側の溝状の部分は、検出面の上端の幅が0.9m~1.6mで、底面は通常の溝のよ

うに傾斜のある平坦な面ではなく、緩やかな面と急斜面とが繰り返すステップ状を呈している。底面の幅は30cm~60cmを測る。東側は比較的地形が緩やかなせいか、平坦面の間が長いが、西側の加工段51の壁に対応する辺りは急斜面になるためステップが小刻みに刻まれている。ステップの高さは15~20cm前後一般的だが、東側の緩やかな部分では40cmほどの高さになる部分もある。

遺構は数mおきに鈍角を持って折れ曲がりながらほぼ西上方に上っていく。加工段51の壁の肩あたりで溝状の形態は途切れ、その上方は踊り場状に幅の広い平坦面がステップ状に重なる。遺構はそのまま未調査区に伸びていくため、その先のつながりはつかめない。

階段状遺構の性格 さてこの階段状遺構の性格であるが、底面が平坦ではなくステップ状であること、緩い角度で蛇行するのは傾斜を緩くする工夫と理解できることなどから、谷底から上方に向かう道と考えるのが妥当であろう。踊り場状の広い面もみられることや、基点の谷底付近には湧水地があること、上方へは竪穴住居跡が最も集中する区域に向かっていることなども道と考える傍証となるであろう。



階段状遺構内土器出土状況（西から）



同上（北から）

階段状遺構出土状況（第367図） 階段状遺構の覆土内より大量の遺物が出土した。特に東側の緩やかな地形のほぼ中央部付近では、比較的個体の形態をとどめた土器が集中して出土している。最も遺物が集中するのはひとつのステップ平坦面の間、およそ4.5mの間で、意図的に土器を投げ込んだ、あるいは置いた状況と言つていいだろ。東側に散在的に土器が出土しているのは、集中区域から転がり落ちた個体と推測される。

少し細かく土器の出土状況をみてみると、最も西側（上方）の南肩付近にはコシキ形土器(20)が大きく2群に分かれて出土している。このコシキ形土器の下には甕(1)が1点、完形で横倒しになった状態で出土しており、ちょうどこの甕を支点にして、上下に分かれた状態である。

コシキ形土器(20)の西側に